

ハウステンボス編

ハウステンボス・グラントオープン

ハウステンボスも何とかオープンに漕ぎ着けました。中央の方へも大分派手に宣伝されているようですね。オープンの三月二十五日、全国紙に二面ぶち抜きのカラー広告を出したこと、それも在京六紙と地方二紙夫々に違つ写真を使ったのが話題になったようです。金は掛かったけれど、それが話題になればその金は取り戻せると言つこと。どこまで計算が出来ていたのか判りませんが、ここまでは成功と言えそうです。

三月に入つて、数万人の単位で招待客に来て貰つて、シミュレーションを繰り返して来ました。店を開けるとなると人手が掛かります。既存のオランダ村も前日まで営業しましたから、理屈から言えば人が倍位要つたわけで人練りが大変でした。おまけに閉店の棚卸と開店の棚卸を同時にやると言つ離れ業を演じたのですから、正に気違い状態。連日午前一時・二時まで働いて貰いました。女の子もそんな時間まで残つて貰つことに

なります。既存の店の仕事を九時に終えてから一時間で新しい店に移動し、夜の十時から新しい店の準備の応援をする、なんて皆良くやりました。オランダ村の最後の日なんかは棚卸で、仕事を終えたのが朝の五時。私も最後まで付き合って、一時間の睡眠でオープンの日を迎えました。疲れて倒れる子が出て来ないか。帰りに車の事故を起こさないか、ハラハラの連続でしたが、どうやら乗り切ったようです。

三月十六日はオープンング・セレモニー。皇室から三笠宮（昭和天皇の弟君、髭の殿下のお父さん）、オランダからは第三王子と貿易大臣が参列。財界からは興銀の中山素平特別顧問、日産の石原社長、松下の谷井社長、東京海上の河野社長、日本郵船の宮岡会長、フジサンケイの鹿内議長、電通の小暮社長、富士フィルムの大西社長、キリンビールの本山社長、雪印の正野社長、伊藤ハムの伊藤社長等、錚々たる方たちに列席して頂きました。組織的とはとても言えない未熟な準備と生憎の強烈な雨風で、ご参列の皆さまにもご迷惑を掛けましたし、アテンドする側も大変でした。私はもっぱら従姉妹の連れ合いに当たる本山社長のアテンドを担当していました。私の方が一応常務取締役

たいな顔をして、気の利いた課長クラスを運転手に従えて対応しているのに、同行した従姉妹の信子姉が昔から呼び慣れた「タツアキちゃん」で対応されるのに閉口しました。

一年前に販売本部を預かった時は、本当にこの日が迎えられるなんて信じていることが出来ませんでした。何度も告白したように、店の建物は立派に出来たけれど、商品が揃わなくて棚が空っぽ、と言う夢にうなされて脂汗を流して目が覚めて、そのまま眠れない夜を過ごしていた頃のこととも思い出になっています。担当の部下どもには、「オーブンの日に棚が空っぽだったら、俺がその店の入り口に首を釣ってぶら下がっているから」と脅しながら仕事をしていたものでした。やはり、店作りに苦労した店が一番可愛い。そう言う店に商品がギッシリ並び、お客が沢山入っているのを見ると、何だかジーンとして来ます。店に入ると本当に泣き出しそうで、暫くの間はそんな店には近付かないで、遠くから様子を窺っていました。店の成績は悪くないのです。苦勞して作り上げた想定外の数字の五%上ぐらいを行っています。どうしてこうピッタリの数字が想定できたのか、我ながら不思議な思いをしています。

プレジデントにあんな書き方をされたものですから、面白い人がいると言うことなのでしょうが、時々インタビューの申し入れがあります。先日は朝日新聞のインタビューを受けました。どんな記事にしてくれるのでしょうか。インタビュー何て怖い、と思っていましたが、本誌に書いた内容を喋れば良いのです。どこかの段階で一度、考え方を一応整理してあるのですから、比較的楽に喋れます。本誌の効用を再認識しました。

(平成四年四月)

神奈川新聞

神奈川新聞には二度ほどコラム欄に登場させて貰った。三菱重工業横浜製作所の所長を勤めていて私を可愛がってくれていた有吉熙さんのご長男が、神奈川新聞に勤めていて、何度かハウステンボスに来てくれて、取材してくれたもの。次の二編を紹介する。

アンデルセン

アンデルセンと言つても、デンマークの童話作家の話ではありません。昔、倉田城良君がやっていたパン屋さんのチェーンの話をする訳でもありません。大村湾の東側に面した川棚と言つ小さな町の駅の前にある小さな喫茶店の話です。この喫茶店の店主が超能力の持ち主で、お茶を飲みに行くと、サーブスで色んな不思議なことを見せてくれる、と言つ話は大分前から聞いていました。この町は、ハウステンボスから大村の空港に行く途中にあるので、駅の前を通る度に、どんな店なのだろう、と車の中から探すのですが、仲々発見出来ませんでした。何度目かによつと発見しましたが、お土産屋さん兼雑貨屋の二階にそれこそ小さな、と言つかむしろ、みすばらしい看板が掛かっています。休日になると、ここに全国から人が集まって来て、入口に行列が出来る、と言います。こんな田舎の、こんな粗末な店で本当にそんなことがあるのだろうか、と信じられない思ひでした。

最初にこの話をしてくれたのが、東京から来ていた店舗デザイナーの先生でした。も

う五年ほど前のことになります。髭を生やした良い年をしたオジサンが、熱を込めてその不思議さを話してくれます。東京では女性誌に盛んに紹介されて話題になっている、とのことでした。デザイナー何て世界にいる人は、ミーハー連中との付き合いも商売の一つだろうし、一種の芸術家ですから、オカルトとか超能力と言った世界にも近いのではないか、何て感じがあって、好きな人もいるものだ、と軽く考えていたのです。

次に紹介してくれたのが、経営コンサルタントとして話題の船井総合研究所の役員の方でした。自分のクライアントである中小企業の社長さんたちでグループを作って、このアンデルセンを目当てに態々東京から来た、と言います。調べたら近くにハウステンボスがあるのに気が付いたので寄ってみた、なんて、こちらが「ついで」なのです。折角来たので、この社長さんたちにハウステンボスを見せて勉強させたいから、コンセプトの説明してくれないか、と言う依頼があって、夕食をご馳走になりながら、話をしたことがあります。小さな喫茶店のついでにハウステンボスに来るなんて、変な話だな、失礼しちゃうよ、と何だか複雑な気持ちで話をした覚えがあります。「中央であれ

だけ話題になっていくアンデルセンが近くにあるのに、これを利用しない手はない。アンデルセンとハウステンボスをセットにした旅行商品を作って売り出したらどうか」なんて、経営コンサルタントらしいご親切な提案をしてくれたりしました。船井総研の船井幸雄さんの本も幾つか読みましたが、この人もどこか神がかっていて、教祖になっている部分がありますから、この人の手下どももその影響を受けているのかな、なんて思いつつ、一度は見ておくべきかな、と機会を探していたのです。あの種の所に良い年をしたオジサンが一人で行くのもサマにならないな、と思っている間に時間が経っていました。

決定的な切っ掛けになったのが、当社の会計監査をしてくれている監査法人の会計士の先生の話でした。この法人の代表社員で、古くから長崎オランダ村とハウステンボスの面倒を見てくれている人が、行って来た、と言います。「かなり眉に唾を付けて行ったのだが、あれは本物だ」とスツカリ虜になっています。具体的にどんなことをするのか、を聞いてみると、一寸信じられないことが行われている、と言つのです。会計士と

言えば、現実を冷静に見るのが商売の人達ですから、こんな世界からは一番遠いところにいる人達ではないかと思えます。その人が信じているのであれば、これは本物ではないか、と思ったのです。話を聞いたのが、先期の決算を纏めて株主総会の準備をしている頃のことでした。これは近い内には非行かねば、と思っていたのですが、総会も終わって少し落ち着いた七月の初め、ウィークデイに参加したゴルフコンペが雨の為途中で中止になった日があつて、思いがけず早く帰れたので、ワイフを誘って行って見ることにしました。

開演の時間が決まっている訳ではなく、日に三度くらいやってくれる、と聞いていたので、当てずっぽうに行つて見ると、丁度実演中で途中からは入れない、と言います。番号札を貰つて、並んで待つていてくれ、と言われて周りを見ると、既にそれとおぼしきオバサン達が四人ほど待つていました。今やつている実演が何時に終わるか分からない、次の回が何時に始まるか分からない、と言う不安定な状態で三十分ほど待つと、前の回が終わつて、若い男女がソロソロ出て来て入れ替えになりました。汚くて狭い階段

を上がった二階に本当に小さな喫茶店があります。およそ粗末なデコラ貼りのテーブルが置いてあって、全部で二十席程度でしょうか。折り紙も得意と聞いていましたが、自分で計算して作ったと言う紙製の動物の折り紙が沢山並べてあるし、ビートルズとか人気音楽グルプの似顔を折って、額に入れたものなんか飾ってあります。たもりとさんまと所ジョージの三人の顔を折ったものはテレビの何かの番組で紹介されたそうです。来店者の写真が貼ってありますが、竹村健一、桐島洋子親子、舞の海なんかの写真があります。竹村健一は三度ほど来たと言っていました。

チョコレートパフェとコーヒーのケーキセットで二時間ほど待ちました。コーヒーも四五〇円ですから、少し高目と言う程度。出演料と考えれば、別に高いものではありません。この日は雨の所為か集まりが悪く、全部で十人足らずでした。前の回は若い人たちも大勢いたようでしたが、この回は小母さまばかり。男性は私一人でした。お待ちせしました、と出て来たのは、どこにでもある喫茶店のお兄ちゃん。四十は過ぎているとのことですが、前掛けをして、ついさっきまでコーヒーを淹れ、チョコレートパフェ

を作っていた、スツキリした感じの良い普通のお兄ちゃんなのです。オカルトっぽい感じは全くありません。舞台は、これも普通の喫茶店の、やっと五人が並んで座れる程度の小さなカウンターです。前列の人はそのカウンターの前に座り、後ろの人はそのすぐ後ろに立って覗き込むスタイルですから、ホンの目の前で不思議なことが演じられるのです。

まず、テーブルにある楊枝をお客に持たせると、その楊枝がお客の掌上上で立ったり踊ったりします。ワイフが取り出した一〇〇〇円札を四つに折ると、これが蝶々みたいに踊ったり飛んだり、指に止まったり肩に止まったり。煙草をお札に突き通す、通した位置をあちこちに移動させる。一〇〇円玉を借りると、持っていた煙草をスーッと突き通してしまいます。「氣」がこつ言つことを可能にするのだ、と言います。左脳を使わず右脳で考えて、一〇〇円玉がチヨコレートだと信じれば煙草が通っても不思議はないのです、なんて言いながら、次から次へと不思議な現象を見せてくれました。スプーン曲げなんてヘッチャラ。こんなのは固いと言つ先入観があるから曲がらないのであつて、

素直に柔らかいものだと思ふことが出来るようになれば、誰にでも曲げられますよ、何て言いながら、曲げるやら捻じるやら、グニャグニャにしています。記念に一本買って来ました。凄いと思つたのは、お客に絵を描かせるのですが、描かせる前に、自分がその朝描いて来た、と言つ紙を財布に入れて私に持たせるのです。色んなことをやつた後で私から財布を取り返して開けて見ると、正にそのお客が描いたのと同じ絵が描いてある。おまけにその人の名前が書いてあつて、何月何日ご来店、と書いてあるではありませんか。これは自分が参加したものだけに信じざるを得ません。この「氣」と言つのは誰にでもあるもので、裏にしたトランプを当てる位は、訓練すれば誰にでも出来るようになりますよ、なんて言っています。キリがありませんので、私自身が参加したものを二つ紹介してお終いにします。テレパシーでメッセージを送ると言つのです。私にトランプを切らせてそこに置いて、一番上にあるカードを当てて、私に言わせようと言つ訳。まず、マークを送るから、と言われて待っていると何となくハートと言いたくなります。次に数字を送ります、と言われて、何が浮かびますか、と言われると、何と

なくジャックが浮かんで来ます。一番上のカードをめくるとハートのジャックがあるのです。「昨日、電話で打ち合わせした通りですね」なんて冗談を言っています。この辺は一種の催眠術かも知れませんが。最後は心靈写真でした。私たち二人にカードを見せて、そのまま伏せてしまいます。ダイヤの一〇だったので、「そのカードをイメージしながら写真に納まって下さい」と言いながら、ポラロイドカメラを取り出してパチリとやって出て来たのを見ると、二人の間の頭の辺りにボンヤリとダイヤの一〇が浮かび上がっているではありませんか。これも貰って来ました。

これはどう見ても手品ではない、世の中には不思議な力があるものだ、と言つのが結論で、素直な私は一度で虜になりました。家に帰ったら、通信販売で頼んでおいた志ん朝の落語のCDが届いていました。一五枚のセットです。返品はお早めに、との注意書きがあります。CDの良し悪しなんて全部聞いてみないと分からないな、と思いながら、適当に一枚取り出して封を切ってデッキにセットしたら、これ一枚だけが傷物なのです。早速、クレーム／返品と言つことにしました。全くの偶然だとは思いますが、こんな不

思議な体験をした直後のことでしたから、私にも超能力が乗り移ったのか、と変な気持ちになりました。

(平成八年九月)

道路整備促進総決起大会

また、ハウステンボスの現状紹介になります。先日、長崎県主催の道路整備促進総決起大会と言つて会がありました。消費税改定の機会に、道路に割かれる財源が抑えられる恐れがある、と言つ動きがあつたのだそうで、これを阻止するために中央に対して圧力を掛けよう、と言つのが目的でした。建設省から道路局国道課長なる人に来て貰い、県は知事以下、県会議長を含む県議三〇人以上、県選出の代議士三人(これは選挙が近かつたので、選挙運動の一部だつたようですが)を始め、地方自治体の関係者など合計一〇〇〇人を超える人が集まる大会です。最後は決議文を採択して、お決まりの「エイ・エイ・オー」で締め、その日の内に陳情団が東京に向けて出発する、と言つスタイルの大会でしたが、その中で観光施設からの意見陳述と言つことで三〇分ほど話をさせられ

る機会がありました。これまでの講演の最大聴衆数が二〇〇人程度でしたので、

一〇〇〇人の前で喋るなんて、と、一寸震えたのですが、何とかお役目が果たせようです。内容がハウステンボスの現状を紹介するものになっていますので、ご披露します。毎度、押し付けのご紹介で申し訳ない気もしますが、皆さんには、この新しい事業がどう進んで行っているか、を知っていて頂きたいのです。表向きは、デイズニールと並んで好調だ、とか、最近では海外客が増えて来ている、とか、もっぱら明るい部分の報道がなされていますが、内情は、一部の経済誌に報道されているように大変で、まだまだ道は遠いのです。売上五〇〇億円規模の会社なのに、オープン以来四年間、

一〇〇億円規模の経常赤字を出し続けて来えています。減価償却前でも赤字ですから、借金が増え続けて来ていると言うことで、シツカリした銀行が付いていなければ、所謂イケナイ会社なのです。日本興業銀行が支援して来てくれている理由は、将来の日本に必要な新しい産業を育てよう、と言う使命みたいなものと、この会社が示しているここ数年の強烈的な経営改善の実績なのでしょう。これだけ借金してしまったら、借りた方が強

いと言つ居直りもあるかも知れませんが、でも、借金経営の会社に対する銀行の態度の強いこと。こうした経験のなかつた私にとつては、腹が立つことが多いのですが、経営の実態を見たら銀行に強いことを言われても仕方がないのかな、と思います。でも、私はどうしても、銀行なんて他人の金の力を借りて偉そうなことを言っている奴らだ、と言う感覚から抜け切れず、それが透けて見えるのか、銀行の方にはあまり受けが良くないようで、困つたものです。所謂、可愛くない、と言つことなのでしょう。平成五年度が二四〇億円の経常赤字、六年度が一九〇億円になり、昨年度は一三五億円に改善しました。償却前では赤字が一二五億円、八六億円と改善し、昨年度は三四億円まで来しました。今年償却前でヤツと黒字になります、単年度黒字が実現できるのは、まだ少し先の話です。累損減らしはそれから、と言つことになりますが、土地に相当の含みがあるもので、単年度黒字が実現出来さえすれば何か手立てがあるかも知れません。安くして賣つているとはいえ、金利は払っているのだから立派なものだ、銀行にとやかく言われる筋合いはない、と励ましてくれる人もいます。国際的にも話題になっている事業ですから、

上場すれば資金調達が楽になるだろう、と言う夢はありますが、これもまだ先の話。こんな会社が存在するなんて、優良企業しかご存知のない諸兄には想像もつかないことかも知れませぬね。ここでやっている、これまでに存在しなかった新しい事業を立ち上げようとする実験の難しさが分かって頂けるでしょうか。

.....

観光施設の立場からひと言ご意見を申し上げます。

観光施設にとつて、アクセスが重要な要素であると言つことは申すまでもありません。特に、私どものように、九州も西の果て、それも長崎県でも人口の集中している長崎市から遠く離れたところに位置している施設の立場からすれば、その重要性は益々大きいものになります。これは、私がハウステンボスのプロジェクトに参加する前の話で、もう歴史に属する話になりますが、針生のあの土地にハウステンボスを作ることになる切っ掛けになったのは、一九八六年のゴールデンウィークに元の長崎オランダ村で発生した交通大渋滞だったと聞いています。関係者の皆さまは覚えていらっしゃるかも知れま

せんが、あの時は、有田の陶器市と重なったのも一因だったそうですが、佐賀の武雄から長崎のグラバー園まで一〇〇キロ近くの国道が大渋滞を起こし、周辺の皆さまに大変なご迷惑をお掛けしたのだそうで、それなら県が所有していた針生の工業団地用の土地を駐車場として使ったらどうだ、と言っアイデアが出され、このアイデアが発展して、この工業団地用の土地にハウステンボスが建設される計画が実現したと伺っています。このひと事をもつてしても、観光業にとって道路の重要性が如何に大きいものであるかが分かるうと言っものだと思います。

ハウステンボスは自然と人間が共存する理想的な未来の街を作って見よう、と言っ理念のもとに作られて来ています。理想の未来の街と言っのは、コンクリートに囲まれ、コンピューターで管理された環境の中で生活するような人工的で無機質なものであつてはならないのではないか。未来の街は自然と人間とが触れ合っことが出来る、自然環境を大切にしたい美しい街でありたい。こんな街は、現代の最高のハイテクの力を借りなければ出来るものではありません。でも、こんな理想的な街は自然発生的に出来るもの

ではないでしょう。国や地方自治体のお力をもってしても、仲々出来るものではないと思われれます。それなら一つの企業がそんな街を作って、この街を商売として成り立たせてみよう。これこそが、私どもが今やろうとしていることなのです。多分、世界でも例のない壮大な実験に挑戦している、と言えるのではないのでしょうか。何を商売のタネにするか。この街自身を見て頂く、この街を利用して歴史や文化を紹介する、と言う目的で大勢のお客様に来て頂いて、楽しんで頂きながらお金を落として頂くことで、経営を成り立たせようとしています。言ってみれば、ハウステンボスにとって観光事業の部分20は、未来の街を作る、と言うこの大きな実験を成功させるための一つの手段と言えます。

ハウステンボスはこの四月で開業四周年を迎えました。現在五年目に入っています。お蔭さまで集客も順調に推移しています。初年度の入場者数が三七五万人でした。最初の計画では初年度四〇〇万人を目標にしましたが、少し足りませんでした。オープンの時期が運悪く、丁度バブル経済が崩壊したタイミングに当たってしまったことを考え合せますと、ずい分健闘した方ではなかったかと思えます。二年目に三九〇万人と順

調に伸ばしましたが、三年目は関西の大地震、サリン事件やオウム事件などの影響で少し落として三三三万人でした。やはり人々は世の中が平和でないと観光に出掛けると言う気持ちにはならないようです。四年目の昨年度は、開業後初めて四〇〇万人の大台を越すことが出来、四〇三万人のお客様に来て頂きました。今年もこれを上回る勢いで来て頂いており、前年度を大幅に上回る集客が出来ることは間違いないと考えております。出来上がったばかりの会社ですから、まだ未熟で、経営的にもまだ一人前とは言えず、内部的にも改善の努力を続けていますし、また、色々な形で皆さまのご支援を頂いています。実験成功の目的が立ちつつある、と申し上げて良いのではないかと考えています。

私どもでは毎月、定点観測の形のお客様へのアンケート調査を行っていますが、お客様がどの地方からお見えになるか、を見て見ますと、面白いことに年を追って遠いところからお見えになるお客様の数が増えています。これはハウステンボスの認知度が徐々に遠くに及んで来ているからだ、と考えています。初年度と四年目の平成七年度の比較

で見ますと、九州内からのお客様の割合が四一%から三四%に下がったのに比較して、関西が一七%から二二・五%に、関東が一六%から二〇%に、中部地方が七%から一一%へと順調に伸びて来ています。

長崎・佐世保と言うロケーションは日本と言う目で見れば西の果てで、言わば僻地ですが、アジアと言う目で見れば、むしろ中心と言うことが出来ます。私どもはハウステンボスをアジアの観光拠点に育て上げようとしています。オープン直後から東南アジア地区へのセールス・プロモーションを始めましたが、その成果が急激に上がって来ており、最近では海外のお客様、特に台湾からのお客様が急増しておりまして、昨年度の海外からのお客様の数は、円高の逆風に中にも拘らず、一七万人にも上りました。この内台湾が七五%です。今年は円安の追い風を受けて、更に大幅に伸ばしています。この二・三ヶ月は、昨年比二〇〇%から三〇〇%の伸びを示しています。香港や韓国、マレーシア、シンガポールからのお客様も増えて来ています。将来は中国本土がターゲットになります。一二億人と言われる中国の人口の内、奥地に住んでいられる人たちは別として、

沿岸部に三億五千万人の人が住んでおり、これらの人たちは日本に観光に来られる可能性を持っていると言われています。来年の七月に香港が中国に返還されると、中国の海外旅行の自由化が加速されると言われています。むしろ日本側のビザ発給の問題が解決するのに時間が掛かると思われますが、将来は中国本土から何百万人・何千万人の単位の観光客が日本に来られると思われれます。私どもはこの日を睨んで準備を進めています。

これらのお客様がどんな交通手段で来られるか、を見て見ますと、昨年のデータで、マイカーが四〇%、バスが同じく四〇%と道路に依存する度合いが圧倒的に高いことが分かります。私どもの場合、JR九州さんのご協力で玄関の前までJRを走らせて頂いています。JRによる入場が一三%、空港や平戸からの船による入場が六%と言う数字が出ています。マイカーについては、プレートナンバー調査をして見ますと、九州一円は勿論、中国・四国地方、関西方面からもマイカーで来られている様子が窺えます。また、バスについては、最近、旅行会社が企画するパック商品を利用されるお客様が増える傾向が示されています。口幅つたい言い方ですが、旅行会社の方が九州の旅行商品

を作る場合、ハウステンボスを含めておかないと売れない、と言って頂けるほどになっていますので、観光バスも増えているのではないかと思います。現在のところ、ハウステンボスでは大晦日とゴールデンウィークを除き、周辺の交通渋滞で大きなご迷惑をかけている事実はないのではないかと考えていますが、これは県や市のご関係の皆さまが、オランダ村当時の渋滞の実態を十分に研究頂き、オープン前から周辺道路の整備・拡張にご尽力頂いたお蔭と感謝しています。

お越しになるお客様の八〇%以上が、その日かその前日に何処かでお泊りになっている、と言う調査結果が出ています。どこでお泊りになっているかは、波があつて一概には言えませんが、一番多いのが長崎で、二〇%から二五%。これは長崎観光と結び付けてハウステンボスにお越しになっている方が多いと言うことでしょう。常に一番多いのは当然だと思います。後は地元の佐世保・雲仙・小浜・平戸・嬉野温泉などが、季節によつて四〜五%から一〇数%の間で入れ替わります。これらの地区を結び形で、マイカーやバスで周辺の道路網を利用する方が多いものと思われれます。ハウステンボスの中に

もホテルはありますが、その宿泊能力は場内ホテル四つ合わせて一日当たり二二〇〇人。場外に出来たJR全日空ホテルとホテル日航、チュールリップホテルの三つを合わせて一八〇〇人程度、合わせて四〇〇〇人程度です。年間で一〇〇万人程度の方にこれらのホテルにお泊り頂いていますが、宿泊能力はまだ足りません。オープンの直後から、周辺の宿泊施設と一緒に集客をしよう、と言う試みを始めています。長崎・雲仙・小浜・大村・諫早・佐世保・平戸、加えて長崎県に止まらず佐賀県の嬉野・武雄と各地の宿泊施設の皆さんにメンバーになって頂いて、西九州観光協議会と言う組織を作りました。ハウステンボスの知名度を利用して頂いて、一緒になって全国からこの地域に来て頂くための営業をして行こう、と言う訳です。更には福岡のシーホークやカナル・シティ、北九州のスペースワールド、宮崎のシーガイアなどとも連携を取って、点でなく面でお客様を引き付けようと努力をしています。県内に止まらず、周辺の観光地と連携を取って行くためにも更に道路網の整備をお願いしたいと考えます。(ここで具体的な陳情が入りますが、省略します)

私どもは常々、人と人とが交わる観光業が将来の日本の国土軸になるのではないかと、ご提言申し上げて来ていますが、先日、私どもの社長が国土審議会で元国土庁次官の下河辺淳さんとお話する機会があったとのこと、その話をしてくれました。日本の将来をどう言つものにして行くか、と言つ話の中で、下河辺さんは、将来は観光産業が日本の基幹産業の一つになって行くのではないかと、言っておられたそうです。従来の日本は原料を輸入し、これを加工して輸出すると言つパターンの産業が基幹産業だったが、これからは生産拠点がドンドンとアジア各地に移って行く中で、物流の拠点も販売の拠点も金融の拠点もそちらに移って行く傾向にある。将来、日本が何で食つていくかを考えて見ると、人の交流で食つていく方向ではないのか。例えば、フランスは人口五五〇〇万人の国に五六〇〇万人の観光客を受け入れている。観光産業の経済波及効果は、四次効果まで入れると五倍と言われているそうです。観光産業が日本の基幹産業の一つの数えられるようになって来ていると言つことだと思ひます。観光インフラの大きな柱の一つとしての道路整備に期待したいと思ひます。(平成八年十二月)

雲仙植林ツアー

雲仙の普賢岳が平成二年の十一月に一九八年振りに噴火してから四年半、一昨年五月に、噴火が一応落ち着いていた、と言う気象庁の発表があつたのですが、丁度その少し前に島原の市長と一緒に酒を飲む機会がありました。四年ほど前に県警本部長として赴任して来たのが、一橋の後輩で四十七年卒の石附弘君と言う人で、この人が仲々の出来物。警察内での評判も良いし、地域の人にも好かれて、先ごろ二年の任期を終えて東京に転して行つたのですが、この人が時々自分の官舎に地元の要人を招んで私的なパーティーをやると言う洒落たことをやっていました。私の場合は、地元の観光業者と言うか、ハウステンボスの要人と言うより、もっぱら先輩の顔を立てる、と言う意味からではなかつたかと思うのですが、何度か参加させて貰つたのです。ある会で一緒になつたのが島原市の市長でした。島原の市長としては、髭の鐘ヶ江市長の方が有名かも知れませんが。髭を売り物にし、パーフォーマンスも仲々上手だつたので、全国的に名前を売つたと思えます。先日、奥さまと話す機会がありました。市長を辞めてからも今もって全国を

講演して回っておられる由でした。今の市長は吉岡庭二郎さんと言う方で、三年前に市の助役から出た人。鐘ヶ江市長ほど派手ではありませんが、実直で熱もあり、人気のある市長さんです。飲みながら「復興に協力して下さい」「一緒になってやりましょう」なんてエールの交換をしていたのでした。

この時はエールの交換程度に考えていたのですが、この鎮静化の発表があった後、このことを思い出して、県庁に行った機会に県の経済部長や観光課の人たちに、「県としてもこの鎮静化のニュースを大々的に全国に流して、観光客の誘致に務めたらどうか」と言う話をして回ったのです。災害に見舞われた地域には、一階部分が完全に灰の中に埋まっている二階建ての家なんかが遺されていて、災害の爪痕を見せてくれています。何と云ってもここは雲仙天草国立公園の一角です。雲仙はもう大丈夫だ、と言うアピールをすると共に、逆に災害を利用して、自然の驚異を見せる、と言うプラス・アルファで観光客に来て貰って、復興の足掛かりにはどうですか、と言う訳です。お役人たちの反応は「今回の発表は『一応鎮静化宣言』と言う不思議な言い方の宣言で、

もう大丈夫と言うものではない上に、丁度梅雨の前なので『安全ですよ』と大々的に宣伝した後で、万一、梅雨の時期に大きな土石流でも起こったら何にもならないから、具体的には梅雨が明けてからにしましょう」と言うことでした。この年の梅雨は所謂男性的な梅雨で、降ると豪雨と言う感じでしたから、また災害が発生しても仕方がないのかな、と心配していたのですが、幸い何の事故もなく梅雨が明けました。全国から雲仙に人を呼ぶと言うことはハウステンボスにとっても大変に結構なことなのです。旅行会社の人に言わせても、今や九州の旅行はハウステンボス抜きでは語れない、と言うところまで来ているそうで、ありがたいことですが、こうして雲仙に来る方は大部分がハウステンボスにも寄ってくれるだろう、と言う思惑があつて、復興への協力だが、自分への利益誘導だか分からない部分もあると言うのが本音なのです。

またソロソロ動いてみようかな、と思つていたら、旅行会社出身で旅行の専門家の部下が、「植林旅行」と言うアイデアを考えて提案して来ました。「噴火で荒れた土地を皆さんの力で緑に変えましょう」と言う名目のツアーを組んで売り出したらどうか、と言

うのです。団体旅行のバス一台で一本、修学旅行で一学級一本、と言う形で植樹して貰って、名札でも残しておけば記念になるし、これなら義捐金と言う名目で植樹料一本幾らの有料にしても、出してくれる人は大勢いるだろう。その分で植樹の実費は賄える、と言う仲々の名案なのです。何でも三〇年ほど前に、鹿児島島の旅行業者が、当時新婚旅行のメツカだった宮崎の日南海岸からお客を取り戻すために、記念植樹を含めた新婚旅行を考えたことがあり、これが大当たりになったのだそうです。新婚旅行で植えた樹が今や立派に大きく育っているだろうし、今年はこのカップル達の銀婚式位の年回りに当たるので、二十五年前にした植樹の成果を見る銀婚旅行と言うことでリピート客を呼ぼう、なんて考えている人がいるそうで、この世界も常に生き馬の目を抜くアイデアを考え出して行かねばならぬらしくて、仲々大変です。この植樹旅行のアイデアは、自然を大切にしよう、と言うハウステンボスのコンセプトにピッタリなので、積極的に仕掛けてみようと言うことにしました。仕掛けるなんて言うと、人を騙すみたいで好きではないのですが、商売に繋がるとなれば仕方がありません。

早速、この提案を持って島原市長に会いに行きました。市長も「良く来てくれた」と歓迎してくれ、提案にも大いに乗り気で「あの土地には櫛（はぜ）か梅が良いのだけど、植樹となるとカブレが発生してもいけないので、梅の方が良いだろう」なんて話になり、場所を見てくれ、と言うことになって、市長自らの案内で、あの荒れ果てた現地の大分上の方まで連れて行ってくれました。平成三年六月の大火碎流で大きな被害を出した地点くらいまでマイクロバスで連れて行ってくれたのです。正に自然の爪痕と言う感じで、緑はスッキリ剥ぎ取られ、無残な荒れ地になっています。ここは新聞報道で有名になった水無川の流域で、土石流の通り道になると言うことで、土石流を外に流れ出させないで海まで持って行ってしまおう、と言う目的の導流堤と言うものが作られつつあります。まだ危険と見られていた時期には、無人の巨大なブルドーザーを沢山投入して、これを無人で動かして整地の作業をしていたそうです。若い女の子が流行のテレビゲームの感覚で、大きな土木機械を遠隔操作で楽々と動かしていると言うことで話題になったりしていました。今は人が大勢入って作業しています。そここに避難所と称するトーチ

力みたいなものが配置してあるのが物々しい感じですよ。火砕流の発生を一日中監視している人がいて、山の上の方で火砕流が発生したら、警報を鳴らしてこのトーチカに逃げ込ませる算段とのこと。荒れ地に端に沿って、高さ四〜五メートル、幅一〇メートル、長さが一〇〇メートル以上ある小さな山みたいなストッパーが何一〇と作られていて、これが導流堤と呼ばれています。この堤の上の面とか斜面に梅を植えて梅林を作って行こうと言う案を作ったのですが、ここは国有地と言うことで自由にならず、県の土地から始めようと言う話になりました。国の土地と言うことになる、国土庁とやらの許可を取らねばならず、更に、国立公園ともなると、文化庁の許可を得なければ手を加えてはいけない、なんて、こんなに良いアイデアも実現出来ないと言う固い話です。こんなものも規制緩和の対象にしてはどうでしょうか。

私はこの辺で担当を外れてしまったのですが、その後島原では、「復興」がまだす計画」なるものが作られています。『がまだす』と言うのはあの辺の方言で『頑張れ』と言った意味だそうで、みんなで力を合わせて頑張って復興しようではないか、と言う

計画です。植林の計画もその中に組み入れられていて、植林ツアーのアイデアも旅行会社との連携で進められているようです。今のところまだ、このツアーが当たりに当たって、一行が帰りにごっそりハウステンボスに寄ってくれて集客に貢献した、なんて話は聞きませんが、その内に実現するものと思つて、楽しみにしています。

(平成九年十一月)

装道

日本には道を究めると言う文化があります。ただお茶を飲むのではなくて茶道と言う道に進む。お花を活けていけば良いのに華道が出来る。香を楽しむことから香道、文字を書くことから書道が生まれる。武道の面でも技を磨いたり、身体の鍛錬をするだけでなく、柔道になり、剣道になり、弓道になる。そうしたお稽古事を通じて人間を磨いて行くと言う姿勢は、一種宗教に通ずるものがあるのではないか、と思つています。この文化は外国、特に欧米にはあまり見られないように思います。スポーツ選手でも、

技さえ優れていて強ければ、人間としての行動についてはとやかく言わない、と言った風潮があるのではないでしょうか。外国人には宗教で人間を律すると言う日本人の感覚では仲々理解できない点があつて、見習うべき点は沢山あるのですが、日本人に宗教が身に付かないのは、若しかしたら、この「道」の文化がこれを代用しているのではないか、なんて思いつきました。道を究めた人、一芸に秀でた人、身近な例で言えば柴山先生なんか一種の哲学者あるいは宗教家ですものね。

着物を着る、と言う行為を「装道」と言う「道」にした山中典士（のりお）と言う人がいます。もっとも、この「さうどう」と言う言葉は、広辞苑を引いても出て来ないし、ワープロを叩いても出て来ませんから、まだ認知の度合いが低く、今の段階では、「道にしようとしている人」と言った方が正確なのかも知れません。この人と接する機会があり、私にとっては大変貴重な経験をしたので、ご紹介しようと思ひます。

山中先生は、社団法人 全日本きものコンサルタント協会の会長をしていますが、先生がこの事業を始める切っ掛けになったのは、戦後、命拾ひして復員して来た時に、着

物姿の母親を見て日本の心と文化を感じ、母の愛を感じたからだ、と言います。着物の中に愛があり、美があり、礼があり、和がある。着物の伝統を後世に伝えよう、と言つ趣旨で事業を起こしたのが一九六四年。それから三五年の間に八万人の着物着付けの先生を世に送り出し、四百万人の着物愛好者を作つて来た、と言います。この日本伝統の文化を世界中の人に紹介しよう、と、毎年、一〇〇人規模の「きもの使節団」を世界中に派遣していますが、既に八一か国に派遣しているそうです。国連に二度も招聘されたり、ローマ法王に拝謁したり、この運動は世界的にも認知されて来ているようです。この財団法人は文部大臣と通産大臣の認可を受けたものになっており、どうやらこれが少々ご自慢みたいです。

この協会が毎年、「全日本きもの装いコンテスト」と称するお祭りを開いています。九八年の九州大会予選が一月に長崎で開催されましたが、この大会の審査員として出席する機会があつたのです。勿論、私自身は着物に特別の関心がある方ではありませんし、自分の着るものについてはむしろ関心が薄い方、と言つより、関心を持つこと自体に抵

抗を感じる方ですから、能力の面で選ばれた訳ではありません。単に、地方の名士であり、そちらの面でも眼がある、と言う社長の代理役が回って来たと言うだけのことです。当日は流石に少し気を付けて、何時もより少しはマシと思われる格好で出掛け、決められた会場の市民公会堂に着いて、受付に登録すると、和服姿の綺麗なお嬢さんが、「長島達明先生」なんて大書した大きなリボンをつけてくれました。審査員控室なるところに入って行くと、いかにも地元の文化人的な顔をした人たちが待機していました。和装に関する研究者、博物館の館長、神社の宮司、テレビや新聞の文化部関係の責任者、婦人団体の会長とか市長夫人、代議士夫人などなど、こうした行事には慣れた方ばかり、と言う感じです。これは偉いところに放り込まれた、と、ここへ来て反省する辺りが、手遅れで浅はかと言うことなのでしょう。山中会長を始め、協会の役員連中は勿論ビシッと和装で決めて、ご挨拶をしておられます。昼食を一緒にしたのですが、こんな雰囲気の中ではお行儀に注意しながら戴きますから、美味しくも何ともありません。味自体もあまり美味しいお弁当とも言えなかったのですが・・・。

会長の挨拶の後、簡単に審査の要領の説明があり、会場に入りました。二〇〇〇人収容と言う会場は満員。立ち見の人がいるほどです。着物に対する関心がこれほど大きいものだと言うことを改めて認識させられました。全く別のところで目にしたデータによりますと、日本人の着物離れが急激に進んでいることが示されています。一所帯当たり
の着物の購入枚数なんてデータが取られています。七五年に〇・三三枚だったのに、

八五年には〇・一二枚になり、九六年には〇・〇六枚に減少しています。着物購入に掛けるお金も、九〇年がピークで一所帯当たり一万三千円の消費がなされているのは、バブル期の所為かと思いますが、九六年にはこれが七千円台まで落ちていきます。それでもこういう大会にこれだけの人が集まると言うのは、着物に対する人気が根強いものであることを示すものでしょう。審査員の紹介があり、一人ひとり立ち上がってご挨拶をして拍手を受けて席に着きました。自分にこんな盛大な大会の審査員をやる資格があるのだろうか、自分みたいな審査員に審査される人たちが可哀相なのではないか、と思いがら待っていると、間もなく幕が上がって着付けの競技が始まりました。最近では自分

で着物を着られる人が少なくなっていて、何かあると美容院や着付けの専門家のお世話になるケースが殆どのようですが、この競技は凄いですよ。幕が開くと、舞台に振袖を羽織っただけの三〇人ほどの女性が座っています。勿論、長襦袢まではビシツと着ていきますから、変な想像はご無用にお願いします。人前で、自分一人で、鏡も見ないで、振袖を着ようと言う訳です。スタートの合図で、まず帯の処理に入りますが、その手捌きの早いこと、鮮やかなこと。立ち上がって裾線を合わせ、おはしより作りの後、帯に掛かります。簡易帯も認められていたようですが、それにしても見事なものです。トップで上がった人は、五分五一秒とのことでした。全員が八分以内に仕上げていました。別に速さを競うのではなくて、出来上がりの美しさを見るのだ、と言うことでしたが、會長によれば、振袖は七分、留袖は五分、普通のカジュアルな着物は三分を目安にしている、とのことでした。振袖の部に続いて留袖の部、カジュアルの部、男性の部、子供の部、外国人の部、学生の学校対抗の部が次々と行われ、舞台上上がった選手の数は一五〇人に及びました。この中から予選通過者三三人を選んだのですが、長島審査員の

成績は七〇%が当たりでしたから、俄か作りにはマズマズで、私の審美眼も捨てたものではなかったな、と思いました。成績が悪かったのは留袖の部。この部には六十も過ぎたご年配の方が何人も出場しておられたのですが、これらの方の、内面が現れるような、キリツとした着こなしが美しいと思つて良い点を付けたのが皆外れでした。やはりコンテストともなると、見栄えの良い、若い、スタイルの良い、綺麗な人に票が集まるようでした。着物クイーンも、私はカジュアルをキリツとした着こなしした三〇代後半の奥さんと思しき人に入れたのですが、当選したのは振袖部門のいかにもキャピキャピの若い子でした。新米の審査員も終わりの頃には余裕が出て来て、審査員に選ばれる人たちは文化人と言つても、この程度のレベルかな、なんて生意気な感想を持ち、感想文を書かされたので、この辺にチクリと触れておきました。

後日、長崎支部の支部長さんからお礼の電話があつた時に、次はハウステンボスでやって下さいね、と頼む辺りは商売々々です。語るに落ちましたかな？

(平成十年三月)

テディ・ベア

突然ですが、熊の縫いぐるみの話をします。テディ・ベアと言えば、皆さんご存知の熊の縫いぐるみですが、この縫いぐるみに関する若干の情報と知識をご披露しようと言
う訳です。

まず、テディとは何かと言うことですが、これはアメリカの二十六代大統領セオドア・ルーズベルトの愛称、テディから来たものなのです。この人は一九〇一年から〇九年まで大統領を務めた人で、日本が日露戦争に勝った時、ロシアとの仲裁役を引き受け
てくれた人ですから、日本にも縁のある人で、私も好きな大統領の一人です。私の記憶
が正しければ、ニューヨークのメトロポリタン・ミュージアムの玄関に、馬に乗ったこ
の大統領の銅像がありました。テンガロン・ハットを被って荒れ馬を御している、西部
劇に出て来る開拓者の雰囲気のある銅像でした。この人の大統領としての評価は知りま
せんが、日露戦争の仲裁役で、日本の肩を持ってくれた人だ、と言うことは知っていま
したので、日本にとっては良い人だったんだ、と思って見た記憶があります。当時は、

アメリカでも原野で熊狩りが行われていたのだそうですが、子熊を撃たないで助けたと言つて逸話があつて、テディ・ベアが誕生したのだそうです。若しかしたら、当時、この逸話を美談として、選挙運動の道具にでも使つたのかも知れませぬ。

こうしてテディ・ベアなるものが誕生したのが一九〇二年と言われますが、これが世界中に広まつて、今では世界規模のテディ・ベア協会があります。勿論、れっきとした会長も存在するのです。英国、ドイツ、アメリカを中心に会員数が一〇〇〇万人にも達するとか。この一〇〇〇万人は所謂マニアと呼ばれる人たちで、愛好家と言つて括りで考へると、この一〇倍、一億人位はいると言われています。日本でもテディ・ベアの名前は知られていますが、組織と言つて面では後進国で、協会が出来たのはつい先頃の九三年のことだそうです。日本の規模は、この十分の一程度で、愛好家一〇〇〇万人、マニア一〇〇万人のレベルと言われています。

一口でテディ・ベアと言つても、アンティーク・ベアと言つて、一九〇〇年代から四〇年代にかけて作られた古くて由緒のある熊とか、有名人が大切にしていた熊とか、

アーティスト・ベアと言つて有名な作者が作ったとされるものなどは、何百万円もするものがあります。これまでに最高価格を付けられたのは、テディ・ガールと呼ばれるアンティーク・ベアで十一万ポンド、二二〇〇万円の値で売買されたと言います。ハウステンボスに來ているもので一番高額のものは、保険の付保金額一九〇万円の「SKITTLES」と呼ばれるベアです。一九〇〇年の初頭に作られたものらしいのですが、九柱戯と言うボーリングに似たゲームのピンになつていたものとのことで、高さが二〇センチほどの汚い人形六体（熊だけではなく、象や兎もあります）でした。何故こんなものが二〇〇万円の価値があるのか理解が出来ませんが……。テディ・ベアの本格的な生産を始めたのは、ドイツのシュタイフと言うメーカーだったそうで、今でも現存するこのシュタイフ社が作るベアが今尚大変珍重されていて、耳のところにこのメーカーが作った、と言う印が付いているだけで値段がグンと上がるのです。どこにもブランドの好きな人はいるものです。世界的にも有名なメーカーがアメリカと英国にあって、これらはメーカー・ベアと呼ばれて夫々に珍重されています。

世界規模のキャラクターと言うことですが、こうして自然発生的に出来たものですか、このキャラクターには版權がありません。誰が作っても、使っても、売っても良いのです。ウチの社長が長崎オランダ村を作った時、これをオランダ村のキャラクターにしようと考えたことがあったのだそうです。可愛いし、雰囲気が暖かいし、自然を大切にしている心が感じられる。オランダ村のコンセプトにピッタリだ、と言うことで考えたらいいのですが、踏み切ることが出来なかったのは、「この、版權がない」と言う点でした。

版權があればこれを買って取ってしまっ、日本でこのキャラクターが使えるのはオランダ村だけだ、と言うことにして置けば、ディズニーのミッキー・マウスやドナルド・ダックよりも強烈なキャラクターとして売り出せるのですが、誰でも使えると言うことになると、将来、強力な競争相手がこれを使い始めたら、場末の、力の弱いオランダ村なんか吹き飛ばされてしまう、と言う心配があったからだ、と言うことなのでしょう。

昨年十月に、ハウステンボスにティディ・ベア・キングダムと言うティディ・ベアの博物館を作りました。ハウステンボスも知名度が上がって、ハウステンボスを発信基地と

するテディ・ベアだ、と言っても負けないだけの力が付いて来たのではないか、と言う割り切りです。セオドア・ルーズベルトの祖先がオランダ人だった、と言うのもこじ付けの一つになりました。テディ・ベアの研究者として世界的にも有名なリンダ・マリンさんと言う綺麗なオバサンに名誉館長になって頂き、世界中からアンティーク・ベア二五〇体、アーティスト・ベア四〇体を含めて一五〇〇体の熊を集めて、日本では有数の博物館になっています。丁度同じ時期に、三越がテディ・ベアを取り上げて大々的に宣伝を開始しました。たまたま、博多に三越が開店して、オープニングにテディ・ベア・フェアみたいなのをやっていました。相手が三越では強敵ですが、そちらは一時的な取り上げだったのに対して、こちらは博物館まで作って、半永久的に売って行こうとしていますので、長い目で見たらこちらの勝ではないか、と思っています。

昨年は景気が後退する一方で、個人消費が伸びず、夏頃から客足が落ちて、特に九月なんかは前年比二桁の減少で、どうなることか、と心配していたのですが、このキングダムを十月の十日にオープンしたら、それからグンと客足が伸びて、この不況の時期に

昨年の十二月や今年の一月なんか、前年を上回る成績でした（流石に通年では昨年実績に届きませんでした）。日本のティディ・ベア人口なんて大したことはないので、単にマニアが来てくれたと言うだけではなくて、こうした出来事が刺激になって客数が増えたものと思われます。こうした客寄せ商売には、時々こうして何かの形でインパクトが必要なのだそうです。西の果てからでも、何か新しいものが出来たよ、と言う情報を発信すると、これが契機になって、行って見ようか、と言う人が出て来る。集客の面白さと言うか、難しさと言うか、怖さみたいなものを感じました。

この博物館の出口のところに、ティディ・ベア・グッツのお店を開きました。リンダ・マリンおばさんの名前を拝借して店の名前を「リンダ」にしました。ハウステンボスに騙し絵の作家、エッシャーを紹介するアメリティ施設があるのはご記憶かと思いますが、お店を担当していたオープン頃、社長に散々無理を言って、この施設の出口に「メタモルフオーゼ」と言うエッシャー・グッツの店を作らせて貰ったことがあります。これと同じ思想です。博物館でインパクトを受けて出て来たお客さんに、関連したお土産を

見せて、早速買って貰おうと言つイヤらしい作戦で、所謂ミュージアム・ショップです。

この店の売り上げが好調です。売り場面積が四六坪程の店ですが、年間一〇億円近くの売り上げが取れる店になると思つています。年間一〇億円を売り上げている店と言いますと、ここでは一番人気のアニー小母さんのチーズ・ケーキのお店位のものでですから、大したものなのです。この辺の小売業の感覚は、小売店との付き合いのある玉川社長や茂木専務辺りでないと、ご理解頂けないかも知れませんが・・・。

人寄せ産業は常に何か新しい投資をして、人の興味を惹いていないと忘れられた存在になります。デイズニールランドなんか、本国でも東京でも、必ず一部に工事中の施設があります。いつ何時になったら、こんな新しい施設が出来ますよ、と言つ期待を売り物にしてリピーターを惹きつける作戦です。ところがハウステンボスの場合は、古い街並を作つた訳ですから、これ以上のものを作る必要もないし、新しい施設を作つて行くと言つことは、コンセプトを壊すことにも繋がりがかねません。本来なら、理想の街づくりをしているのだ、と言つことが多くの方に理解され、ハウステンボスは遊ぶところと言

うより、過ごすところなんだ、俗世のストレスを逃れて自由で我が儘な時間を過ごす場所なんだ、と言う方で埋まるのが理想なのですが、こういう目的で来られるお客様は数が多くありません。大部分の方は、テーマ・パークとしてのハウステンボスを見に来られます。人が来てくれないことには売り上げが上がらず、経営的に成り立たないと言ふことになるのですから、暫くの間はこうした新しい施設を作つて客寄せをせねばならないのですが、借金経営の中で新しい投資をするのは、これがまたはなはだ難しい。特に昨今の貸し渋りの風潮の中では銀行の説得が大変です。とにかく大きなお金を掛けて新しい施設を作つても、掛けたお金に見合うだけのお客が来てくれるかどうか、の保証が出来ない、と言う点が一番の問題。新しい事業を立ち上げると言うことは、本当に大変なことです。

(平成十年六月)

テーマ・パークの経営

また、ハウステンボスの話になります。

ハウステンボスはテーマ・パークを運営している、と言うのが世の中の一般的な認識だと思えます。ここで働いている人の多くもこの感覚なのですが、何時もご紹介しているように、ハウステンボスが本当にやろうとしていることは全く別のところにあります。それは理想的な未来の街のモデルを作ろうとしていることです。理想的な未来の街と言うのは、人間と自然が触れ合える美しい街である。そこでは人間を取り巻く自然の景観も勿論美しくなくてはならないけれど、自然に対する人間の態度、と言うか、お行儀も正しいものでなければならぬ。その街が経済活動を行った結果、自然に返すものは自然を汚さないもの、を超えて、自然を改善するものでなくてはならない。人間の生活はかなり進んだものになってしまって、自然を破壊するものになってしまっているから、その生活水準を維持した上で自然を守ろうとしたら、人間が作り出した高い技術の力を借りなければならぬ。そんな生活をしようと思ったら、現段階では、普通の生活に比べて高いコストを払わねばならないけれど、そんな街がこの世の中に存在できる、と言うことを世の中の人たちに示して見よう。一つの企業が、このような理想的な未来の街

を作つて、これが経済的に成り立つことを見せて上げよう。これがハウステンボスがやるうとしてのことです。基本理念と言つても良いでしょう。これまでこんな考えで事業を進めている企業は世の中になかったと思います。ですから、私たちは、世界で初めての壮大な実験に挑戦している、と言つて良いと思います。理念だけでは飯が食えないので、折角作つた美しい環境を利用して観光業を営んでいる。言わば、観光業、即ちテーマ・パークの部分は経営のための手段なのです。ハウステンボスでは偶々手段として観光業を使っているけれど、他の企業がどこかでこんな理想的な街を経営しようとしたら、手段としては製造業が使えるかも知れないし、農業や林業が使えるかも知れない。ここでこの実験が成功して、他の人が他の場所に第二・第三のハウステンボスを作つて行くことが出来たら素晴らしいことではないのか。

こんな話をすると、あまりにも綺麗ごと過ぎる、とか、理想に過ぎる、と言われますが、少なくとも私はかなり本気でこんなことを考えながら仕事をして来ている積りです。大体、人集めで飯を食う、なんて、世の中の為になることなのか。例えば、同じテーマ・

パークでも東京ディズニーランドで働いているとしたら、お金儲けはしているけれど、世の中の為に働いている、と思えるだろうか？ 尤も、理想的な未来の街を見に行こう、と言つてハウステンボスに来られる方は極く少ないと思われます。やはり、あそこへ行けば綺麗なものが見られるらしい、面白いものがあるらしい、と言つ期待を持って来られる方が大部分ですから、大勢のお客様に来て頂いて、経営を成り立たせ、事業を成功に導かねばならない今の時期は、理想の部分は暫く横に置いておいて、テーマ・パークの部分を表に出さねばならない、と言つことは言えそうです。

本来、観光地になる資格のある土地と言つのは、自然や景観が他のところとは違つても、その力で人寄せが出来るところ。それで人を感動させることが出来る土地でしょう。他所で体験することの出来ない温泉地なんかも観光地になる資格がありそうです。歴史的に謂れのある土地で、その歴史に縁のある建造物や史跡が残っているところも観光地になる資格があるのでしょうか。珍しい食べ物や産するところもそうですし、その土地特有のお祭りとかイベントがある土地も観光地の資格があると言えるでしょ

う。そんな自然発生的な観光地なら、誰もがそこにそんな観光地があることを知っている。一度は行って見たいと思っていて、お金と暇が出来た時に行って、「やっと来られたね」と言う。そんな観光地では殊更お金を掛けて、いらっしやい、いらっしやい、と宣伝しなくても良いのではないか。また、宣伝なんかしなくてもお客が来てくれるところが本当の観光地ではないのか。

ところが最近では、人寄せ場所、観光地を人工的に作り出そうとしています。国の中でただ一か所、博奕の出来る法律を作って、博奕の街を作り出したアメリカのラスベガスなんかは人工観光地の傑作と言えるでしょう。映画で有名になったミッキー・マウスやドナルド・ダックを売り物にして、巨大な遊園地を作ったディズニー・ランドも大成功の例でしょう。テーマ・パークと言う存在は、あまり外国、特にヨーロッパでは見られないような気がします。それだけ豊富に自然発生的な観光地があると言うことではないでしょうか。アメリカでは最近、人工の人寄せ場所が人気を呼んでいます。これはもっぱら映像技術やコンピューターの技術を駆使したバーチャル・エンターテインメン

トの場、と言われるもので、日本で言うテーマ・パークとは性質が異なるように思います。

遊園地とテーマ・パークを区別する通産省の定義があります。遊園地は「一定のスペースに樹木・池などの自然の環境を有し、客に娯楽を提供することを業務として行っている事業所」で、テーマ・パークは「外国・歴史・自然などの一定のテーマのもとに、遊戯施設の有無に拘わらず、全体の環境づくり、ショーやイベントなどのソフトを組み込んで、空間全体を演出して娯楽を提供する施設づくりがされている遊園地、レジャー施設」なのだそうです。あまり判り易い定義とは言えませんが……。

一定のテーマのもとに人工の人寄せ場所を作る。これには大変なお金が掛かります。装置に対して大きな投資が必要ですから、一種の装置産業になるのです。装置産業であれば、石油化学産業みたいに、最初にお金を掛けて装置を作ってしまうえば、後は大した人件費を掛けなくても装置自体がお金を稼いでくれるのですが、テーマ・パークとなるとそうは行きません。こちらはサービス業なので、人が人に対してサービスを提

供しななければならない。どちらかと言えば労働集約産業的な性格を持っていて、大変な人件費が掛かります。おまけに「ここにこんなに面白いものがあるよ」と言うことを絶えず訴え続け、宣伝費を使って、「いらっしやい、いらっしやい」と言い続けなければならぬ。そういう意味ではテーマ・パークと言う産業は経営的に成り立ち難しい性格を持っていると言えるのかも知れません。

八三年にオープンした東京ディズニーランドは大成功の例で、開業後これまで一五年間の利用者は二億人を超え、このところ年平均の入場者が一六〇〇万人から一七〇〇万人と言つのですから、これなら何をやってでもペイすると思えます。現にこの隣接地に二〇〇一年秋のオープンを目指し、四〇〇〇億円の金を掛けて、東京ディズニー・シーを作ろうとしています。

逆に、経営難が取り沙汰されている宮崎のシーガイアについて見て見ましよう。シーガイアはリゾート法の第一号の適用を受けて、投資総額二〇〇〇億円で九一年に着工し、九三年三月に第一期のオーシャン・ドームがオープン、九四年十月にホテルが完成して

全面オープンしています。企業体はフェニックス・オープンゴルフで有名なフェニックス・リゾート社ですが、宮崎県と宮崎市がそれぞれ二五%の株を保有する第三セクターです。メインバンクが第一勧業銀行。オーシャン・ドームと言う疑似の海と海岸を中心とする馬鹿でかい施設（綺麗な海と海岸がある直ぐ近くに、人工の海と海岸を作る意味がどこにあるのか分かりませんが、実は、これは三菱重工製なのです）とホテル・オーシャン四五と言う四十三階建てのホテル、トム・ワトソンが設計したゴルフ場、それに五〇〇〇人収容の国際会議場があります。二〇〇〇年のサミット会議をここでやると言うのが謳い文句になっています。集客目標を年三七〇万人、売り上げ目標二四〇億円と言うことで走り始めたのですが、これが初年度から大変な見込み違いなのです。先日、前期の決算が公表されましたが、一九九億円の売り上げに対して、経常赤字が一八七億円、累損が今年度までに九三九億円に上っています。経営陣は、前年の九七年度に比べれば大分改善している。損益分岐点は四五〇万人の集客、二五〇億円の売り上げだから、二〇〇〇年から二〇〇二年には単年度黒字が達成できる。予定通りの赤字を出している、

と強気の発言を繰り返しています。確かに、前年度は二〇七億円の売り上げに対して経常赤字が二〇八億円でしたから、赤字の額が減ったことは改善には違いありませんが、売上額と同じレベルの赤字を出して、どこが予定通りなのだろう。集客数についても、ハウステンボスの場合は入場口が一つですから数の把握が容易ですが、この場合は四つの施設夫々の入場者の合計が集客数になっている筈です。元々観光統計と言つのは、いい加減で信用出来ない面があります。有田の陶器市に何十万人の人が訪れた、と言つ。JRの輸送能力から考えても、駐車場の収容能力から見ても、そんな数は到底あり得ないのです。それは来られた方が十の店に立ち寄るとか、十回の買い物したらこの人は夫々十人分に数えられるので、こんな数字になるのです。観光客の数なんて、バード・ウォッチングの手法で数える方が正しいのではないか、と思うほどです。シーガイヤの場合、第一勧銀からの借入金が一五〇〇億円に上っていると。第一勧銀自身の経営状態がフラフラしているのに持ちこたえられるのか。ましてや銀行の不良債権が問題視されて来ると、この種の債権は第二分類から第三分類に格下げになるのではないか、と言

うことで経営危機が叫ばれている訳です。

ハウステンボスの経営も輪郭は似たり寄ったりですから、偉そうなことは言えず、これを対岸の火事視する訳には行かないのですが、経営改善のピッチが違つ、と言つてころが評価されているのではないか、と思つのです。投資金額はこれまでに三〇〇〇億円を超えています。この内、自分の借金部分が二〇〇〇億円足らずです。年間の集客数が年々増加の傾向で、四〇〇万人を超えて来ています。売り上げ規模は五〇〇億円で、略々一定しています。初年度の経常赤字は一〇五億円と予定通りだったのですが、二年目の赤字がやり繰りの分を外すと二三八億円の多額に上りました。これではダメだ、と強烈な経営改善努力に入り、三年目からの赤字の額が、一九六億円、一三五億円、八八億円と改善し、昨年度は七八億円まで来ました。現在の累損が七九〇億円です。資本金が二二億円ですから、大幅な債務超過に陥つていますが、四五万坪の土地に大きな含み益があるので、実質的には債務超過にはなつていない、と判定して貰つているようです。それでも昨年からは、償却費を除いて利益が出るようになり、借金がこれ

以上増えない体質になって来ています。オープンした時の損益分岐点は入場者数六五〇万人程度でしたが、リストラ努力により、これが現在は四五〇万人見当になっているのではないかと見ています。昨年、後三年で単年度黒字を出す、と言う計画を立てたのですが、ここへ来ての未曾有の不況で、黒字転換目標を五年後への目標替えを余儀なくされています。昨年度は日本のテーマ・パークも総崩れで、あの東京ディズニーランドでさえ集客数を一〇%以上落したと言うのに、ハウステンボスの落ちは三%でしたし、売り上げは落ちたけれども経営内容は改善出来ました。今期も、最初の四か月を見ると、お客の数は減っていますが経営数値は昨年よりも大幅に改善して来ていて、このままで行けば、五年後黒字の目標は達成できると思っています。

従業員の給料も、この地域ではマズマズのレベルにあると言われますが、中央と比べると可哀相なくらいの低いレベルで皆頑張ってくれています。出来るだけ中央のレベルまで引き上げて上げるのが我々経営者の務めなのですが、この赤字続きの中ではベースアップが出来るような状況ではないので、我慢してもらつたわりに、役員の報酬をカッ

トしています。役員の中から、「長島は従業員に媚びて、役員を苛めている」なんて声が聞こえるほどです。役員なら、儲かったら役員賞与なるものが頂けて、これが役員の役得なのでしょうが、赤字続きの中では賞与なんて一度もお目に掛かったことがありませんし、私なんか、こちらへ来てからズツと、役職が上がるとカット率が上がるものですから、給料は全く上がらない、と言う目に遭っています。当分、この状況は続くでしょう。左団扇は無理としても、少し楽になるのは五年以上後のこと。役員定年が一応六十五歳と言うことになっているので、私は定年一杯まで働くとしても、どうやら苦勞58する時期ばかりで、楽な時期には間に合わないと言うことになります。それより、こちらへ来てから九年間と言うもの、新しいものづくめの中で、計画・立ち上げから経営改善と毎日が正念場の連続で、肉体的にも精神的にも、これ以上持つのかな、ここはモット若い人の職場ではないのかな、と考えているのが最近の正直な心境です。

テーマ・パークの経営の現状をご説明するなんて言いながら、またもや泣き言を言っていますね。

(平成十年九月)

西暦二〇〇〇年問題

西暦二〇〇〇問題と言つのが巷で話題になっていきます。二・三年前から話題にされていたのですが、来年がその二〇〇〇年と言つことで、切羽詰って来ている、と言つことなのでしょう。これは大きくは二つの問題を含んでいるものと考えられます。

一つは、言うまでもなく西暦の年号が一九〇〇年代から二〇〇〇年代に変わることにより生ずる問題です。コンピューターが出来た初期の頃は機械の能力が低くて、機械が記憶できる容量にも限度があったので、記憶させるデータの数を出来るだけ減らそうとしました。年号についても一九XX年と表示すると四桁になるので、これを節約してXX年と二桁で表示することにしたのです。一九九二年頃になると記憶の容量も増えて来て、四桁でも大丈夫と言つことになって、それ以降の機械は四桁の対応も出来るようになったのですが、そのまま二桁の対応を続けて来た機械もあるし、それ以前の機械は殆ど全部と言って良い程二桁の対応になっていると言います。年号が二〇〇〇年になつてしまうと、これらの機械のXX年は二〇XX年ではなくて、一九XX年と認識され

てしまいます。二〇〇〇年から年金を貰うことになっている人は、一九〇〇年に戻ってしまう訳ですから、「あなたは未だ生まれていない人ですから、年金は貰えません」と言う種類の混乱が起こるのです。こんなことは最初から分かっていた筈で、気が付いていなかった訳ではなかったのでしょうが、コンピュータの普及があまりにも早く、その範囲が広がったため、とでも言うのでしょうか、これまでこんな下らない問題に対する対策が取られていなくて、二〇〇〇年を控えた今、世界中で騒いでいる、と言う訳です。世界レベルでの怠慢だった、と言うことなのでしょうが。

これに加えて、閏年問題と言うのがあります。これはあまり表に出ていないようですが、面白い問題なので解説してみます。これは多分、十六世紀のガリレオかグレゴリオ十三世の昔からの約束事(?)なので、ご存知の方は読み飛ばして下さい。地球の公転と暦を合わせる目的で、四年に一度、二月の月を一日長くする閏年が作つてあるのはご存知の通りです。西暦の年号で、四で割り切れる年を閏年と定めています。これは一年が長くなり過ぎてズレて来るので、四で割り切れても一〇〇で割り切れる年は閏年

にしない、と言う約束になっています。従って一〇〇で割り切れる年は四でも割り切れますが、閏年ではないのです。ところが、これでは行き過ぎて、また逆のズレが生じると言うことで、一〇〇で割り切れても四〇〇で割り切れる年は、これを閏年にする、と言うことになってきているのです。と言うことで西暦二〇〇〇年と言う年、来年は本来なら閏年ではないのですが、この年は閏年になると言う、四〇〇年に一度の珍しい年なのです。この暦に対する対応もしなければならぬ、と言うことで、二〇〇〇年問題と言うところの二つを指していると思われれます。

今やコンピュータは世の中の隅々まで行き届いています。大きなシステム、例えば銀行とか証券会社とか、郵便とか、大きな会社のシステムなんかは、範囲が見えていますから、二桁の対応を四桁に変える作業をすれば良いのです。但し、この作業には膨大な手間とお金が掛かりますから、その余力がないところ、例えば中小企業なんかは対応が出来なくて困っているところもあるようです。国として支援をしなければ、と言う声も上がっているようですが、これはこうした力のない企業に対する配慮をせねばならぬ

い、と言うことです。カレンダーが組み込まれているシステムになると、閏年の対応も必要になります。大きなシステムの中に、一つでもこうした対応が出来ない組織や会社があると、全体のシステムに悪影響を及ぼすかも知れないし、こうした心配はすれぱするほどなくならないようです。

ウチの会社でも、昨年からこの問題に取り組んで来ました。ハウステンボスは一つの街ですから大変です。ホテルもあればお店もある。レストランも劇場もある、と言うことで、範囲が広いのです。普通のホテル会社だったらホテルだけのシステムの心配をすれば良いし、レストランならレストランのシステムの心配をしていれば良いのです。しょうが、ここではこれら全部が一緒になっています。経理も人事も一つのシステムに組み込まれていますから、大変は大変でしたが、大体の目途が立つところまで来ています。コンピューターの心臓部にはマイコンチップと言うのがあって、一種のブラックボックスになっているのですがこれが何処にあるのか、どんな能力を持っているのか、を調べ、一つずつ対応して行く。頼りにするのはこれらを作ったメーカーになります。メ

「カーによつてはそんな古いことは分からない、と回答して来るところもありますし、悪くすると潰れて存在していないメーカーもあります。真面目に相談に乗ってくれても、対応の費用となると足許を見て高い見積もりを吹っかけて来たりします。これを、「ここまではこちらでやるから、これだけ安くしろ」なんて交渉をしたり、仲々手間の掛かる仕事です。」

それでも全体のシステムの中に組み込まれている部分は、こうして見ることが出来ますから対応が出来ますが、システムに入っていない独立した見えない部分があります。分かり易い例で言えば、エレベーターやエスカレーター。これらに使われているコンピュータに暦の機能が組み込まれているとしたら、年が変わった時点で、どんなことが起こるか分かりません。それでも、あの機械のあの部分にはコンピュータが使われているから注意した方が良くぞ、と言つ見当が付けられるところはまだ良いのです。一番怖いのは、どこにマイコンチップが潜んでいるか分からない、と言つ点です。個人が持っている計算機とかカメラにも、このマイコンチップが使われています。どんな数え方

をしたのか分かりませんが、今や世界中に一五〇億個のマイコンチップがばら撒かれていると言われます。これを全部調べるなんて出来る訳がない。二〇〇〇年を控えて騒いでいるのにはこの辺に理由があるのです。計算機やカメラ程度の小さいものであれば、狂っても大きな影響はないでしょうが、大変な問題もあります。先日、榊添要一氏が来て、講演を聞く機会がありました。大変怖い話をしていました。

ロシアにはソ連の崩壊後、三〇発位のミサイルが残っているのだそうですが、これがどんな管理をされているのか、分からないのだそうです。何かの間違いで電流が流れて、発射ボタンが押されたことになって、ミサイルが発射されてしまったらどうなるか、と言うのです。核を持っているアメリカにしたってフランスにしたって、最近の中国やインドにしたって北朝鮮にしたって、それなりの対応はしているでしょうが、何せ初めてのこと、何が起ころるか分からない、と言います。何かの手違いで、どこかの国の核ミサイルが何処かへ向けて飛んで行かないとも限らない。今の世界の核防衛体制は、核の攻撃を受けたら自動的に報復する体制が出来ているのだそうで、報復が報復を呼んで世

界戦争に発展する恐れすらある、と言います。だから自分は今、「二〇〇〇年になる直前に、世界中の核弾頭をミサイルから外しておいてくれ」と言うキャンペーンをしている、と言っていました。間違つてミサイルが飛んでも核弾頭が搭載されていなければ、落ちたところに大きな穴が出来る程度で問題にはなりません。これは少しセンサーシヨナルな議論かも知れませんが、例えば、空を飛んでいる飛行機が二〇〇〇年になった瞬間に、機器に何かの予測できなかったトラブルが起こって墜落するとか、新幹線が暴走するとか、電気が止まるとか、の危険もあると言います。中国で、政府が中華航空に、「二〇〇〇年対策をしろ」と言うのに、仲々言うことを聞かないので、「それでは一九九九年から二〇〇〇年に変わる瞬間に、社長自身が自分の会社の飛行機に乗って、どこかの空を飛んでいる」と言う命令を出したら、真面目に対応を始めた、とか。本当かどうか知りませんが、こんな笑い話もあるのだそうです。同じ種類のトラブルが、実は今年の正月にも発生しています。九九と言う数字を、一番大きい数字、と約束している機械があつたのです。一九九九年一月に、当社でもホンの一か所でしたが、この約束が変

な具合に働いて、妙なオペレーションが発生したところがありました。先日のテレビでも、今年、元旦になったとたんに船の運航に支障を来した事件があった、と特集を組んで報道していました。二〇〇〇年になるとこうしたトラブルが一部では済まなくなるのです。

梶添氏は、「だから自分は、二〇〇〇年になる瞬間には、どこかの山の中で井戸を掘って、食料を抱えて、ローソクを持って静かにしているんだ」なんて言っていました。そう言えば、先日、ニュース・ステーションで久米宏が同じようなことを言っていました。たっけ。北朝鮮のミサイルはアメリカまで届かないから、多分、日本の米軍基地に照準が合わされている筈だ。だから沖縄とか横須賀、佐世保なんかは危ないよ、なんて、佐世保でやった講演会だったので、こんな脅し方をしていました。もっとも、北朝鮮の技術レベルからすれば、佐世保を狙っても狙いが狂って熊本の中の山に落ちる、位の誤差はあるだろうから、どこに逃げて同じかもしれない、なんて笑い話になりましたが、いずれにしても、コンピューター部門の責任者としては、自分は何も分からなくても、

専門家を駆使して、少なくとも会社のシステムには支障がないようにせねばなりません。誰も経験したことのない問題に対する対応ですから、その日が来るまで頭が痛い、と言うより、気が疲れる毎日が続くことになりそうです。二〇〇〇年になった瞬間に世の中で何が起ころのか、心配と楽しみが半々と言うところでしょうか。

(平成十一年二月)

・西暦二〇〇〇年の元旦は、責任上事務所で迎えましたが、お蔭さまで何のトラブルもなく年が明け、情報システム部長の報告を受けて、元旦の朝帰宅しました。

ハウステンボス熱供給会社

熱供給と言う事業の存在をご存知ですか？ 私は、恥ずかしいことながら、自分がこの事業に関わりを持つまで知りませんでした。熱供給と言う字は、見たり聞いたりして知ってはいましたが、事務所やホテルやマンションみたいなビルの中で、個々の部屋で火を焚いて熱を作るのでは効率が悪いから、纏めて熱を作ったり、冷房用水を作ったり

して、それらを各部屋に供給する程度の、言わばセントラル・ヒーティングみたいなものかと思っていたのです。熱供給事業と言うのは、冷温熱を供給すると言うことではセントラル・ヒーティングと同じことですが、これが広域化し、地域に冷温熱を供給する事業としてドンドン伸びて来ている産業なのです。確かに個々に小さい規模で暖房したり、冷房したりするのでは効率が悪い、と言う面はあります。でも、最近ではそれ以上に、環境問題に対する利点があるとされています。例えば、個々に石油や石炭を燃やしていたのでは、NOxやSOx、CO2の排出が十分に制御出来ないけれど、大きな熱供給源なら排出防止の対策も取り易いでしょう。都市災害の防止にも、熱源は集中している方が容易なはずです。都市の美観の問題もあるでしょう。と言うことで、この事業はこの一〇年程で大きく伸びて来ているのです。

日本で最初にこのシステムを取り上げたのは、福島県のいわき市小名浜で、一九七〇年のこと。工場で発生する熱の余りを利用してお湯を作り、地域に配湯するシステムが出来たのだそうです。その後、大規模な地域冷暖房は、大阪万博の後、大阪の千里ニュー

ータウンを作る際に採用されたものです。大阪万博の開催が一九七〇年でしたが、その跡地に出来た千里ニュータウンの中核地域三〇ヘクタールへの冷温熱の供給は大阪ガスが行い、供給の開始は一九七一年のことでした。熱供給事業法と言う法律が一九七二年に出来て、この種のシステムが全国に広がって行っています。一番盛んだったのは、北海道の暖房対策だったようです。化石燃料を焚く個々の暖房では、ロンドンが悩まされたスモッグが発生する怖れがある、と言うことで、札幌とか石狩とか苫小牧の市街地や集合住宅などに一九七〇年代の早い時期から採用されて来ています。その後、全国の各都市で都市開発が行われると、その地域に地域冷暖房が採用され、そのための熱供給会社が出来ると言うパターンで事業が広がり、一九八五年頃からこれが急激に伸びて、一九九八年現在で事業者の数が八四、施工拠点の数が（お役所が絡むので、許可地点数と呼ばれています）一三九に及んでいます。売上高が全国の合計で一三〇〇億円程度と言うのは意外に少ないな、と言う気がします。一番規模の大きい会社が丸の内近辺を中心とした丸の内熱供給と言う会社で、それでも売り上げ規模は一五〇億円、因みに

私が社長をやっているハウステンボス熱供給会社の売り上げ規模は一四億円程度、全国で二十二位に位置しています。

最初の頃は、一か所で石油や石炭を燃やすことにより、省エネや燃料代の節約の効果を享受したり、環境を保全したりする効果を期待していたのですが、最近では、これまで使われないまま捨てられて来たエネルギーを活用しようと言う動きが盛んになって来ています。この未利用エネルギーの種類は多種多様です。発電所、ゴミ焼却場、地下鉄、ビルから放出されるエネルギーもありますし、海や川が持っている水温も熱源として充分活用出来るのです。一九九一年には、こうした未利用エネルギーを活用して地域熱供給を行った場合、通産省から助成金が出る仕組みが出来ています。大体、この熱供給事業と言うのは、電気やガスの供給と同じ範疇のもので、公益事業と言うことになっており、安定供給の義務が負わされています。会社が潰れて、突然冷温熱の供給が出来なくなったり、会社の経営上の都合で、急に供給価格が上がったりしたのでは、需要者の皆さんに大きな迷惑を掛けるし、世の中に与える影響が大きいと言う訳で、事

業の内容も通産省の定めに従っていますし、逆に税制面では優遇措置が取られているのです。

世界的な視点で見れば、日本の熱供給事業は後進国と言えます。当然のことながら、寒冷地の暖房から始まった事業なのです。英国ではグラスゴーやロンドンで、石炭の排煙によるスモッグに対する防止策として、ずい分昔からこの考え方が取り入れられていましたし、西ドイツで発電所の排熱を利用した地域暖房の施設が出来たのが一八七五年のことだったそうですから、歴史は一〇〇年以上あると言つことになります。地域暖房の比率が高いのはやはり北欧で、フィンランド、デンマーク、スエーデンなんかの比率が高くなっています。これらの国の熱源は発電所の排熱を利用したものが多く、石炭の比率が大きくなっています。ノルウエーでは発電所の排熱利用が少ないのですが、これはこの国の電気が水力発電に頼る部分が大きいかからだろうと思います。その代わり、ゴミ焼却場の排熱の利用が大きい辺りは流石です。

ご覧頂いた通り、この事業は熱の利用が主体です。廃熱を利用して地域の暖房をしよ

う、と言う訳ですから、熱源は使用する地域に近い方が輸送のロスが少なくて効率的です。ですから、この思想の進んだ、例えばドイツなんかは、街の真ん中にゴミ焼却施設があるし、火力発電所も街の中、どうかすると原子力発電所も街の近くにあります。それだけ意識が進んでいる、と言うことでしょうか。住民が理解して共存している、とでも言えば良いのでしょうか。逆に言えばこの方が、工場環境対策を万全なものにする力が働き易い、と言うことではないでしょうか。日本のように、汚いものには蓋をして遠くに持って行く、と言う感覚は、何だか自分さえ良ければ良い、と言う島国根性的一端を見せられているような気がします。東京のゴミを埼玉で燃やすのは怪しからん、とか、他所の地域のゴミの運搬車が近くの道路を通るのは困る、とか言っているのを見ると、自分さえ良ければ、の狭い料簡が見え隠れして醜いですね。ゴミの焼却施設を街の真ん中に置いて、その排熱を住民全員で利用しよう、それを可能にするための環境基準を考えよう、なんて大きな気持ちにはなれないのでしょうか。自分が出すゴミだってその方が運搬も楽でしょう。

熱で暖房するのは誰にでも分かることですが、私には、熱で冷房すると言う理屈が理解出来ませんでした。この会社に入って、ほぼ最初に質問したのがこのシステムの仕組みのことでした。少しくどいけど仕組みを紹介してみます。興味の無い方は読み飛ばして下さい。

水の沸騰点は一〇〇度で、一〇〇度になると水が水蒸気になって行く、所謂気化して行くのはご存知の通りですが、気圧が下がると、この沸騰点が下がって来るのもご存じの通りです。富士山の頂上では九〇度位で水が沸騰します。高山で上手にご飯を炊くのが難しい、と言われるのはこのせいです。極端なことを言えば、気圧がゼロの真空の中に水を入れると、水は瞬時に沸騰し、気化して水蒸気になります。液体が気化する際には、気化熱と言って熱を奪う性質がありますので、その部分が冷やされることになります。真空のボンベの中に水を注ぎ込むと水はドンドン水蒸気になる。その気化熱でボンベの中が冷えますから、ここに水のパイプを通しておけば冷水が出来る。この冷水を使って冷房が出来る、と言うことになります。ところが、このボンベの中には水蒸気が充

満して来ます。これを取り除いてやらねばならない。ここで登場するのが臭化リチウム
と言う物質です。この物質は強烈に水分を吸収する性質を持っています。水蒸気が発生
したボンベの中にこの物質を入れると、瞬時に水分を吸い取ってくれます。水を吸い過
ぎると吸湿の効果がなくなりますから、水を吸った臭化リチウムは外に取り出して、熱
を加えて水分を吐き出させる。水分を吐き出した臭化リチウムは何度でもボンベの中
に送り込まれて水を吸い取る。こうして熱による冷房が実現出来るのです。この機械を蒸
気吸収式冷凍機と言います。ハウステンボスの冷房は、全部このシステムで行っていま
す。先日、オランダのラジオ局のインタビューを受けた時、この理屈の説明を求められ、
英語で説明するのに四苦八苦させられました。

冷房と言うと、つい最近までフロンガスを圧縮して冷やす方法が一般的でしたが、フ
ロンガスはオゾン層を破壊する、と言うことで、地球環境破壊の問題があります。フロ
ンガスに代わるガスを開発しよう、所謂代替フロンをおおうとする動きも一方ではあり
ますが、この代替ガスは、オゾン層は破壊しないけれど、温暖化効果が大きいと言っ

とで、最近ではこの蒸気吸収式冷凍機による冷房が注目されて来ています。フロンガスの圧縮には電気駆動のモーターが利用されていますが、蒸気吸収式だと熱があれば良いわけですから、ガスの方が良い、と言う訳で、冷房用のエネルギーを電気にするか、ガスにするか、で、電力会社とガス会社の奪い合いになっている面もあるようです。

ハウステンボスの熱供給のシステムを簡単に紹介します。一〇年以上前の計画段階で作られたシステムですが、省エネを考えた仲々合理的なシステムだと思えます。今や、自画自賛と言うことになりますけど・・・。

まず、ガス会社から天然ガスを買って来て、これを燃やして高温・高圧のガスを作り、これをタービンに吹き付けて廻して電気を作ります。所謂ガスタービンによる発電です。電気は勿論施設に送って使いますが、ここで出来たガスの廃熱を使って蒸気を作ります。この部分がコ・ジェネと呼ばれる部分です。蒸気の温度が摂氏一七五度。この蒸気をそのまま施設に送れば温水が出来てホテルなどで使えるし、冬は暖房に使えます。夏はこの熱を蒸気吸収式冷凍機の熱源として使います。摂氏七度の冷水を作って施設に送り出

し、冷房用の冷房水に使う、と言う訳です。ガスタービンで発電しているのは、電気を作ると言うより、蒸気を作るのが一番の目的ですから、充分な蒸気が出る分だけ発電機を回し、電気の足りない分は電力会社から買います。電気は自分で作るより買った方が安いのです。逆に、目一杯発電しても蒸気が足りない時期には、ガスを燃やして蒸気を作る直焚きのボイラーを使います。投下したエネルギーがどれだけ有効に使えたか、を示す熱効率と言う指数がありますが、こういいうやり方ですから、ハウステンボスの熱効率は高いのです。発電の効率はガスタービンが一番高いと言われていますが、それでも二五%程度です。ところがコ・ジェネで利用できる分が四五%なので、ここの熱効率は七〇%と言うことになります。ガスを焚いて蒸気を作るボイラーの熱効率は九〇%ですから、ハウステンボスの熱供給工場ではエネルギーを相当効率的に使っていると言えるのです。燃やすものは天然ガスですが、天然ガスは燃やしてもSOxや煤は出ませんし、NOxの排出量は石油の半分以下、CO₂の排出量も石油より二―三割少ないクリーンエネルギーなのです。冷房にもフロンガスなんか使わず、廃熱を利用している、

と言うことで、環境にも充分配慮したシステムだと言えます。

昨年十一月に長崎県に頼まれて、長崎県地質調査業協会の技術講習会なるところで、二〇〇人ほどの会員を前にして場違いの講演をやりましたが、この辺を大いに宣伝してやりました。私の「人間は地球のお邪魔虫」論や「二十一世紀は配分の時代」論、それに茂木兄の「経済成長とか経済発展の議論の中に、環境と言う関数を入れる」論も抜きりなく話しておきました。講演は仲々好評で、講演で飯が食えるね、なんて評価も頂きました。（また、自慢しています。鼻に付きますね）

（平成十一年十一月）

死生観・人生観編

脳梗塞顛末記

この度は脳梗塞なんて、誠に格好の悪いことでご心配をお掛けしました。その後は出来るだけ平常の生活に戻る努力をしていますが、今後の皆さんのご参考のためと、自身の記録の為、顛末記を残すことにしました。

一・昨年十二月十三日の早朝、トイレに起きた時にベッドから離れる際、右足に異常を感じたのです。どんな異常と表現すれば良いのか、ひと言で言って「右足が頼りない」「何だか自由にならない」と言っ感じでした。この種の異常は脳から来るものだ、と聞いていましたので、実はこの時「ア、やられたかな？」と思ったのです。「これなら兼ねて来考えていた理想通り、七十五歳の内に死ぬことになるのかな」とは思ったのですが、また少し横になっていたら治まったので、普段通りの時間に起きて、約束していたゴルフに出掛けてしまったのです。

二・気持ち良くゴルフを始めました。途中一度少し右足に異常を感じましたが、それも治まってスコアも普通通りの出来で、「今日も九〇を切れるかな」と思いながら七番ホールまで来ました。ドライバーが若干チョロ気味になり、それでもある程度飛んだ二打地点まで行ったら、右足がまた頼りなくなりました。足先がブラブラするような感じで、とても二打目を打てる気がないので、パートナーに話して、途中リタイアすることにしました。パートナーの一人が外科の医者でしたが、「この症状は頭ではないだろう。坐骨神経から来ているかも知れないので、整形外科に行って御覧なさい」と言うことでした。ゴルフ場からの帰りは、全く不安なく自分の運転で帰りました。

三・翌十四日は静かにしていましたが、あまりハッキリしないので、翌々日の十五日土曜日、約束していた長崎での会合への出席をキャンセルして主治医のところに出掛けました。運転は出来そうでしたが、何かあったらいけないので、家内に運転を頼みました。この先生は内科医ではありませんが、循環器専門の医者ですので、症状が脳から来ているなら適切な診断をしてくれるのではないかと、その期待を持っています。

した。こちらからの申し出に依えて、脳を中心に色々検査をしてくれましたが、右足先以外は全く異常がなく、若し脳から来ているなら予兆の後二四時間ぐらいで本物が来る筈だ、と言います。血管が少し硬くなっているが血圧もそれほど高くないし、脳から来た障害ではないだろう、と言うことで整形外科での腰のMRI撮影を勧められ、紹介状を書いて貰って、予約を取って貰いました。

四・日曜日を挟んで十八日月曜日、腰のMRIを撮って貰って、そのフィルムを主治医のところに持参したところ、脊椎に圧迫は見られるがそれ程の異常は見当たらず、「様子をみましょう」と言うことになりました。医者言葉では、何もしない治療のことを「保存的治療」と言うそうです。

五・やはり気になるので、翌十九日に整形外科に飛び込んで相談したところ、色々物理的な機能検査を重ねた結果、「腰からの症状とは考えられない」と言うことで、脳のMRIを撮影することを勧められ、紹介を受けて翌二十日に毎度お世話になっている佐世保中央病院に出掛けました。今回は初めての脳外科です。MRIの機械の空き

具合と先生の都合が合致せず、その日は撮影のみで先生の診察は翌日の予定だったのですが、MRIの撮影が終わっても放射線技士が仲々解放してくれないのです。撮影台に横になったまま、「これは何かあるな」と思っていたら、脳外科の先生が手術か何かの他の用件の途中で飛び出して来てくれて、左大脳に小さな梗塞が発見されたとのことで、即入院と言うことになりました。

六・二十日に入院して二十八日に退院するまで、朝夕二・三時間ずつの点滴と日中はリハビリ。不自由なのが右足だけなので、リハビリも大したことはありません。リハビリ室では物凄く不自由な人たちが汗を流しているのに、こちらは軽くて申し訳ない思いをしていました。面白かったのが、鏡を使ったトレーニング。一〇メートル程の間隔で大きな鏡を向い合せに立てます。その間を鏡に向かって行ったり来たりするので、自分がどんなに見つともない格好で歩いているのか、を見せて、その意識を使って自分で矯正させるリハビリなんだそうですが、これではまるで「蝦蟇の油売り」の蝦蟇蛙ではないか。我と我が身の醜さにタラーリ・タラーリと脂汗を流している蝦蟇蛙

にされているのではないかと、思いながら歩いていました。

七 簡単なりハビリのカリキュラムを作って貰って年末ギリギリの十二月二十八日に退院。新年は自宅で迎えることが出来ました。退院の翌日からこのりハビリと朝夕の散歩と散歩途中でのゴルフクラブの素振りを続けています。用心しながら車の運転もやっています。二月に入ってからゴルフ場に出掛けて、パットをやったり、アプローチの真似事をやったり、打ちっ放しで打って見たのですが、まだ軸足が不安定で、コースに出る気になるまでに大分時間が掛かりました。千葉在の幼友達から、「二月に娘が結婚するので、親族の一員として是非出席してくれ」言われて上京の準備をしていたのに、これでは行けないかな？ と思ったこともありましたが、落ち着いたので二月十六日から十八日までとんぼ返りで上京していました。これも良いりハビリになって自信を付け、四月の長期上京の絶好の予行演習になりました。二月の最終日の二十八日に、二か月半振りでコースに出て見ました。途中リタイヤした時と同じメンバーだったので、それ程気にすることなく回りました。軸足を相当意識しないと、何だか

グラグラする感じがしますが、その意識の所為で右足が流れないのが良いのか、左程酷い目に遭わず、スコアは九四で、これなら再開出来そうだ、との自信を付けました。ゴルフはその後もボチボチやっていますが、一寸油断をすると右足が緩んで大きなミスをするので、一〇〇を切るのがやっとと言う状態です。何だか常に失敗のエクスキューズを準備しながらやっているようで、面白さが半減しています。

八 コトを起こした十二月十三日の時点で年賀状は準備が完了してパソコンに入れてあり、印刷するばかりになっていましたが、まだ、ボチボチと喪中欠礼のハガキが届くので、年賀状の作成は年末ギリギリまで待つことにしていました。こんなことになったので、「これは何時どうなるか分からないぞ」と思っ、最初の兆候を感じた日、ゴルフを中断して帰宅して直ぐに早速印刷を開始しました。私は年賀状には全員に手書きのコメントを一言ずつ書くことにしているので、それも書き始め、丁度即入院になる前日までにこの作業を完了させていました。入院中の二十五日には家内に発送して貰いましたが、年賀状を受け取ったある人から、「何時もの字と違うので、何かあ

るのではないか、と思っていた」と言われました。やはり何処か違っていたのでしょ
うね。皆さんはそんな感じは持たれなかつただろうか。単に「何時もの下手な字だ」
と思われたただけだったかも知れませんが・・・。

九・落ち着いたところで、最初診察を受けた主治医のところに、その後の経過を報告す
るメモを送りました。初期対応に対する批判乃至はクレームの積りもあって、医者
の対応によつては主治医を誡にする積りでしたが、その後、リハビリに行ったゴルフ場
で偶然に会つたら、誠に率直に「誤診でした。お詫びします」との挨拶を受けました。
こつ言つ率直で素直な対応に弱い私は、今後もこの医者を主治医としてお願いしよ
うと思つています。

十・私は農作業的なものがあまり好きではなく、プランターでの栽培にも熱心でないの
ですが、八年前に総胆管ガンが発見される直前に、プランターで胡瓜の栽培を始めて
いました。未だ生らない内にガンが発見されたのですが、栽培と病気が結びついてい
る、と言つ感じが抜けませんでした。そんなこともあって、その後はプランターでの

栽培は、何となく避けて来たのですが、昨秋、久し振りにその気になってプランターに絹さやの種を蒔きました。芽が出たところで、今回の脑梗塞騒ぎを起こしたので、やはり何かジンクスがあるに違いない、と変な確信を持つに至っています。若し、今度同じことをやって「二度あることは三度ある」になって、次回が心臓関係の病気だとしたら、ガン、脳卒中、心臓の三大疾病達成の偉業を成し遂げることになりそうですので、暫くの間はプランター栽培は控えようと思っています。

「四庵橋ブルース」

教養と常識に溢れた諸兄妹は、この表題を見て、「ア、長島はまたワープロの変換を間違えて、変な文字を打ち出したな」と思われたに違いありません。ソウ、歌で有名になった長崎の「しあんばし」は「思案橋」です。昔、この橋の近くにあった丸山と言つて遊郭に、行こうか戻ろうか、と思案して迷つて、行ったり来たりした橋、と言つことで名付けられた橋だと言います。今ではこの川は暗渠になつてしまつて、橋も要らなくなつたのですが、観光の名所の一つですから、かつて橋のあつたところの近くの道端に一メートル足らずの橋の欄干の一部を作り、電車の停留所の名前として残してあるのみです。

私の重工時代の一年下の友人で、長崎の造船所で教育を受けた仲間四人が、最近になつて、何を思つたか、俳句の会を作りました。断つておきますが、私がこのメンバーに

加わっている訳ではありません。その内の一人が、少しこの方面の勉強をしていたので、皆が作品をこの人に送り、講評と添削をして貰う、と言う会にしていたようです。一堂に会することは滅多になくて、手紙やファックスでやり取りしていたようですが、最近では電子メールのやり取りで交信が早くなっているそうです。その内に、宗匠に評を頂くだけでなく、お互いに講評を交換し合うようになりました。一年くらいこれが続いたら、この交換文が溜まったので、面白い文集になりそうだ、と言うことで、これを私費出版し、私にもくれたのがこの表題の本なのです。仲々面白い文集になっていました。句集と言うより仲の良い友達の交換日記みたいなもの、と言った方が良いかも知れませんが。楽しい読み物でした。この中の一人は鹿児島島の岩本恭一君と言う人で、玉川兄もご存知の方のことですし、兄はこの話も、もう知っておられるようです。こうした連中がまず形から入るのは良くあることで、四人が夫々に「ナントカ庵」と言う尤もらしい号を名乗ったところから長崎に引っ掛けてこの本の名前を「四庵橋ブルース」にしたと言う訳です。

腕前（って言うんですかね？）の方は、知覧カントリークラブでのゴルフの情景を詠んで、

「夏雲や ボール飛び込む 水の音」

の程度ですから、私の

「朝顔に 水のなければ 風呂の水」

（佐世保の大水飢饉の際に詠んだもので、三つの意味を込めた積りです。一つは加賀の千代の有名な釣瓶の句をもじったもの。二つ目は、単純に朝顔へ水やり。三つ目は、男性用便器のことを朝顔と申します。）

と大して変わらないレベルではないか、と思いました。もっとも夏雲の句は初期の頃のもので、一年後の句は大分雰囲気が変わって来ていましたから、研鑽が進んだ、と言えるのだと思います。私の朝顔の句も、勉強すればその内に何とかなるのかも知れない、と思いました。

我々がやっている、物を書く場、も面白いことをやっていると思っし、これだけ続け

て来ていると言うことは、凄くて尊いことだと思っけれど、俳句の交換なんてのも、知的で洒落ていて素敵だな、と思いました。我々が始めるとしたら、宗匠は杉山夫人になるのだろうか。助手が杉山兄だろうか。玉川ご夫妻もかなりやっておられるみたい。茂木夫人の作品も拝見した記憶があります。最近、あまり拝見しませんけど・・・。

私は経験もないし勉強をしたこともないので、全く分からないのですが、情景とか心の動き、感動とかを限られた言葉の中に凝縮して表わそう、と言う芸術は日本特有のものなのだろうか。ゲームと言っては失礼なのでしょうか。外国にも「詩」と言う存在はあるけれども、五・七・五とか、五・七・五・七・七ほど短くはないし、漢詩にしたって同じことです。こうしたルールは日本には万葉の昔からありましたが、どこから来たのでしょうか。盆栽や石の庭園、お能や狂言など、日本人の、言わば「凝縮の文化」に通じるものがあるのでしょうか。先輩、どなたか教えて下さい。五シラブルと七シラブルの組み合わせに、リズムや心地よさを感じるのは、日本人だけのことも知れませんか。最近の詩は、自由詩でも言うのか、リズムをあまり大切にしていらないように思います

が、私はやはり五文字と七文字で作られた詩の方が好きです。佐藤春夫の

本年は君のものなり

かく言いて、いとにこやかに

新年はわが手を握り

新しき帽を脱ぎつつ

わが部屋に來たり座りぬ

なんて、本当に気持ちのいいリズムで一度読んだら何時までも覚えていられるような気がします。三十一文字（みそひともし）と言つとやんごとなき方たちのお遊びと言つ感じがするし、辞世の句なんて凄いと思いますが、七・七・七・七・五となると都都逸でグッと大衆的になります。大体、和歌・短歌・俳句・川柳などをやる人にとっては、それぞれに固有の文化があつて、それらを一緒くたにして論ずる私なんて野蛮人と言つことになるのかも知れませんが、もう少し野蛮人の「一緒くた」を聞いて頂きますと・・・

俵万智も面白いですね。私は最初の「サラダ記念日」が出た時に、あまりにも話題に

なったのと、あの人が地元の相模原の橋本と言うところの高校の教師だったと言うのがキツカケで読んだ記憶がある程度で、その後は読んでいませんから、偉そうなことは言えませんが、文芸春秋の平成十年九月号で与謝野晶子の「みだれ髪」を現代風に詠み直した句集のことを紹介していたのが面白かった。「みだれ髪」と言う句集があるのは、勿論知っていました。通して読んだことがあったかどうか。でも、幾つか有名な句で頭に残っているものがあります。これを彼女の言う、チヨコレート語に訳すと、こんなことになるのです。

「やわ肌の あつき血潮に 触れも見で さびしからずや 道を説く君」という有名な歌。改めて読んでみると、ずい分色っぽくて大胆な歌なのだ、と思いますが、これがチヨコレート語では、

「燃える肌を 抱くこともなく 人生を 語り続けて 寂しくないの」となります。ずい分と分かり易くなるものです。大体、玄人に言わせると、歌を書くときに、五・七・五・七・七と切って書いてはいけないのだそうですが、素人の私は、区

切って書いた方が分かり易いので、素人になり切ることになります。もう一つ有名なのを紹介しますと、

「その子二十歳（はたち） 櫛にながるる 黒髪の おごりの春の 美しきかな」
綺麗な歌ですね。これが

「はたちとは ロングヘアを なびかせて 畏れを知らぬ 春のビーンズ」
となります。これは凄い。洒落ている。こちらの方が出来が良いように思います。この辺になると言葉の遊び、と言っても良いのではないか、と思われ、こんな遊びが出来たら楽しいのではないか、と思います。

余裕が出来たら、先輩の宗匠方に添削をお願いして、少し上達して、この種の知的な遊びに参加できるようになれば良いな、と思っています。
（平成十一年四月）

阿川弘之と海軍

私が初めて阿川弘之の本に接したのは、ロンドンでのことです。ロンドン駐在中の

一九七五年十一月、玉川兄が来てくれて、同氏著の「暗い波濤」と言う本を持って来てくれたのでした。学徒出陣で海軍に配属された学生たちの話でしたが、戦争と言うものに疑問を感じ、悩みながら自らの命を犠牲にして行く。そんな姿が自分自身に重なって、自分もこんな立場に置かれたら、同じようなことを考え、悩みながら、それでもお国のために、と死んで行ったのではないか、と思いながら読んだのを思い出します。小さい頃、「大きくなったら海軍大将になる」と言っていたのは、海軍に応召し、海軍の軍人だった父への憧れもあったと思いますが、陸軍よりも海軍の方に魅力を感じ、歴史を読む際にもどうしても海軍の方に手が伸びます。何と言っても初代の海軍大臣（海軍卿）は勝海舟で、陸軍の祖、山県有朋より数等魅力があるし、西郷従道の下で存分に腕を揮って日本海軍を作り上げた山本権兵衛の伝記「海は蘇る」（江藤淳著）なんかも夢中で読んだものです。阿川弘之の書いているものは何処か波長が合うと言っか、視点が似ているのか、「暗い波濤」以来好きになって、その後もずい分読んでいます。「米内光政」「山本五十六」「井上成美」の伝記三部作が有名ですが、三部とも読みました。いずれ

も海軍大將になった人ですが、太平洋戦争反対論者で、この三人は海軍大臣、海軍次官、軍務局長の立場で、開戦の原因になると思われた独伊との三国同盟に徹底的に反対しています。同盟が出来たのはこの三人がその立場を退いてからのことです。山本元帥は昭和十八年に戦死されますが、米内大將と井上大將は終戦間際の頃の海軍大臣と海軍次官として、早期の戦争終結に尽力した人です。阿川さんは作家・小説家と言うより、伝記物を得意とする歴史記述家と言った方が良いのかも知れません。「暗い波濤」の中にも實在の人が実名で出て来ます。私がロンドンにいた頃、三井物産の支店長をしていた堤新三さんと言う方も海軍少佐だからで登場していましたし、他の著書にも度々出て来る正木生虎少尉（終戦時には大佐になっていたらしい）と言う人は、私の三菱重工同期生の親父さんです。

海軍のOB会でガンルーム会と言う組織があります。海軍の下級士官が軍艦に乗った時に、集まる溜まり場がガンルームと呼ばれる小部屋だったそうで、ここに集まっていた連中が当時を偲んで集まりを重ねている会なのだそうです。他の地方では、同期の会

とか、飛行科の会、兵科の会などの組織に分かれているのですが、佐世保では全海軍の予備士官の集まりと言うことで、主計科もいれば、お医者さんもいると言ったユニークな集まりにしているのだそうです。先日ご紹介した海軍中尉の名刺を持ち歩いていると言う十九年卒の先輩、富永茂氏は佐世保ガントリーム会の幹事長で活躍されていますが、ことある毎にこのガントリーム会のメンバーの方たちを私に引き合わせようとしてくれます。最年少のメンバーでも終戦時に少尉ですから、今では七十は超えている訳で、オジイサン達との付き合いと言うことになります。先日、佐世保市から講演を頼まれたとかで、阿川さんがこちらへ見えました。佐世保ガントリーム会が受け入れの世話役を頼まれたとかで、皆さん張り切って手伝いをしていました。阿川さんも東大学生から予備士官になって海軍士官の経験があります。作品を書くに当たっては史実を大切にされる作家ですから、海軍の基地があった佐世保にもこの史実の調査に何度か見えたことがあったのだそうで、この佐世保のユニークなガントリーム会は二〇年程前に阿川さんが見えたことを契機に作られたもののだそうです。ですから、阿川さんと佐世保ガントリーム

会のメンバーとお付き合いは誠に深いものがあるのです。富永先輩に、私が阿川さんのファンだと言ったら、その会の阿川さん歓迎の昼食会に特別参加させてくれました。およそ地味な方で、講演の前はあまり飲み食いしないのです、なんて仰って、普通の人の感覚。酒でも飲んで楽しく自由に喋ると言っタイプではなく、講演なんて苦痛で迷惑、と言っタイプの方とお見受けしました。「日本人のユーモア」と言っ演題で話されたのですが、内容は別とし、話もボソボソとあまり迫力もありませんでした。一寸本を読んだ人なら聞き古しているようなユーモアの紹介なんかをしていました。例えば、終戦直後、「何百万トンだかの量の米をアメリカが供給してくれないと、日本に餓死者が続出する」と言っ日本政府の脅し紛いの要求をアメリカが満たすことが出来なかった。にも拘らず、餓死する人なんて出て来なかったのでマッカーサーが怒って、当時の吉田首相を呼びつけて文句を言っところ、吉田さんが平気な顔で「若し日本がそんなに正確な統計を出せる国だったら、貴方のアメリカなんかに負けていませんよ」とユーモアで切り返した、と言っ有名な逸話なんかを紹介していました。有名人だから色んな所に引

つ張り出され、講演なんかをさせられるのですが、本当は調べたり書いたりする方に専念したい方なのではないでしょうか。

このところ「高松宮日記」が次々と刊行されています。全部で八巻になるとのことです。高松宮は言わずと知れた昭和天皇の弟君。六十二年に亡くなられてから、膨大な量の日記が発見され、歴史的に価値あるものと認められて、未亡人（最後の将軍、徳川慶喜のお孫さんです。こんな場合は「未亡妃」とでもお呼びするのでしょうか）が中心になって出版の準備に掛かるのですが、そのメンバーの一員として阿川さんが選ばれていきます。「高松宮日記」自体は、本屋で立ち読みしてみました。あまり読み易そうでなく、読み通す自信がないので買うのを控えています。この本の編集の過程を阿川さんが「高松宮と海軍」と言う本にしています。高松宮は海軍で教育を受けておられますが、やはり太平洋戦争には大きな疑問を持っておられた方。この本で阿川さんは「宮は軍と言ふもの自体が嫌いで、海軍にも嫌悪感を示しておられるけれど、その生き方、考え方は理想的な海軍士官のそれであった」と言う見方をしています。

日本の海軍はどんなものだったのか。どうやら阿川氏は帝国海軍の礼賛者の一人です。他の所にも度々出て来るのですが、この本の中でも、「日本人の作った組織として、或いは人間集団として仲々面白い、一種特別な気風を持った味のある存在だった」と評価しています。陸軍軍人の経験のある司馬遼太郎氏が海軍を評して、「明治以後の日本人が作り上げた最大の文化遺産ではないか。民族の能力と精神を、これほど見事に形に表したものは他にない」と絶賛していることも紹介しています。昭和十年頃、日本が世界の檣舞台に出して真実引けを取らぬものは、せいぜい三つと言われていたそうですが、一つが三井の貿易、二つ目が水泳日本、三番目が帝国海軍だったそうです。この場合は、戦う集団としての質の高さが世界の認めるところだった、と言うことですが、海軍は武辺一点張りの組織ではなかった。「スマートで、目先が利いて几帳面、負けじ魂。これぞネイビー」と言う当時の海軍士官自慢の句がありますが、軍隊でありながら考え方がフレキシブルでフリーで、ユーモアを大切にされるリベラルな集団だった、とされています。そう言えば「至誠に悖る（もとる）なかりしか。言行に恥ずるなかりしか。氣力に

缺くるなかりしか。努力に憾（うら）みなかりしか。不精に亘るなかりしか」の有名な「五省」は帝国海軍の伝統の精神を示すものとされ、アメリカ海軍が進駐後、これに興味を示して、持って帰って古文調に英訳して、アナポリスの海軍兵学校の教室に掲示してある、と言われている程ですが、実はこんな固い、画一的で精神訓話的なものは元々海軍では流行らなかったのだそうで、この「五省」が出来たのは、昭和七年頃のことです。陸軍や右翼の影響を受けて海軍の体質が硬直化して来た頃のことなのでそうです。阿川さんの本には、こうした古き良き時代の海軍の様子がここに紹介されているのですが、何かとても気持ち良く読める感じがします。語り口がどこか、名著「勝海舟」を書いた子母澤寛に似ているな、と思う部分もあります。伝記物の語り口はああいうものになるのかも知れません。

阿川弘之を紹介する積りが、帝国海軍礼賛になってしまいました。氏の著書を読むことよって、私の海軍好きが加速されてしまったものと思われれます。高木惣吉（海軍大卒、元少将）、実松讓（同じく海大卒、元大佐）、豊田穰（海軍兵学校出、元中尉）、

児島襄などの海軍経験者・海軍研究家の著作も好んで読みます。やっぱり私は右翼なのがなア。

(平成八年十月)

「司馬遼太郎が語る日本」

このシリーズは、司馬遼太郎の未公開講演録と言うことで、週刊朝日が発刊したものです。愛蔵版、としてありますが、大袈裟な本ではなく、八〇〇円程度の手軽な本にして、くれている点も気に入って、出る度を買って読みました。結局、第六巻で完結になりました。愛蔵版、保存版などと言うと、柄ばかり大袈裟な高価な本になるケースがありますが、この本は本当に月刊誌程度の装丁なのです。本は読むためのものであつて、本棚を飾るためのものではない。これで十分だと思えます。

司馬さんが亡くなった後、週刊朝日が五／六人のチームを作つて、何時頃、どこそこで講演をやつたらしい、と言う情報を捜し出すと、そこへ行って、収録テープを探して、これを借りて来て原稿に起こす、と言う作業をして行つたものと思われます。情報がガ

セネタのこともあったようだし、態々出掛けて行っても、満足な記録が残っていない、などの苦勞も多かったようです。宝探してみたいなものだ、と言いなから講演録探しをしていたようです。どうやら発掘出来た順に並べてあるらしく、別に年代順に並べてある訳ではなく、場所もテーマもあちこちに飛んだりしているのが、いかにも手造りと言っ感じがして面白いのです。

私が司馬さんのことを書くと、いつも評価が同じになってしましますが、本当にモノを良く知っている人だと言っことが分かります。引き出しが多いと言っことなのでしょうか。歴史、文学、宗教、軍事、遊牧、經濟から考古学に至るまで、何を語らせても人に聞かせるものを持っている。大したものだ、と思います。何とかセミナーと銘打って、シリーズでやったものもあります。講演先で目立つのは、大学、お寺、防衛庁・自衛隊などですが、地方に出掛けてやった講演が面白い。歴史的な話になるケースが殆どですが、その土地に因んだ話になっているのが流石だと思うし、その地方を持ち上げて、褒めてから始める、と言っのも、サービス精神と言っか、人柄が現れているようで好ましい

のです。原稿を準備して行って話す、と言う雰囲気ではありません。その場の雰囲気では話題を選び、考えながら話をしている、と言う雰囲気伝わって来ます。如何にも知識の引き出しを次々と開けながら話している、と言う感じで、凄いな、と思わされます。土地々々のことなんかも、自分で調べて頭の中に入っているの、引き出しを開ければスグに出て来るのでしょうか。長崎の田舎の西彼杵半島のことを調べて良く知っていられて、その地元で育ち、町役場の役人になって、その土地については一番詳しい筈だったハウステンボスの元社長の神近を閉口させた話は以前ご紹介したことがあります。

防衛大学では、日露戦争の後、その実態や当時の国の苦しかった内情、経済的にも軍事的にもこれ以上戦争を続けることが出来なかった実情などを国民に知らせず、「勝った、勝った」と言うことにしてしまって、反省をしないで、国民に、「日本の軍隊が世界で一番強い」と思わせてしまったのが間違いの始まりだった、と言う話をします。「戦争は、精神論で勝ち負けが決まる」なんてことにしてしまっただ。日露戦争までの日本と日本人は良かったが、日露戦争に勝ったことで、日本と日本人が悪くなってしまうた、

と言う話になります。昭和の初期に英国の女性評論家が、「日本の陸軍の軍人には天下の秀才を集めているが、常識を知らない。比較と言うことを知らないで、自分が世界一だと思い込んでいるから、この人達が国を動かすようになると日本は潰れる」と予言して帰った、と言う話をする。統帥権が日本を潰した、と言うのが司馬さんの持論ですが、この辺を自衛官たちにキチンと話しています。

大阪府に公文書館が開設される、と言うので講演をしていますが、「文明人と野蛮人の違いは、記録をするかしないかだ。日本人には記録が少ないから野蛮人の部類なのではないか」と言う貝塚秀樹博士の言葉から話に入ります。日露戦争の実態を示す記録が残されていないなかったので、ポーツマスでの講和会議で小村寿太郎外相が大変な苦勞をさせられたし、日本人が、「日本は強いんだ。日本人は優秀なんだ」と言う誤解をもったままになったので、太平洋戦争なんてバカなことを始めたんだ、と言い、冷静な目で見たい露戦史が書かれていたら、太平洋戦争は起こらなかつただろう、と言う。こうして、記録や資料の大切さを説いて、公文書館開設の意味に繋がって行きます。

会津に行く、どうしても明治維新で酷い目に遭った話になりますが、その原因も、会津が江戸時代に最も教養に富んだ藩の一つだったことが理由になります。それも書物を読むだけでなく、その思想を行動に移した。この藩風は家康の孫だった初代藩主、保科正之からの伝統だった、と言います。「名を惜しめ」と言う鎌倉武士の伝統は、薩摩と会津に強く残った。会津は強過ぎた。強過ぎたので、革命の目標にされてしまい悲劇になった、と言う解釈です。その地方に行ったら、そのオベンチャラを言う、と言うのではないと思います。歴史を暖かく解釈して行くと、こう言うことになる、と言うことではないでしょうか。

長野では、まず信州の素晴らしさを礼賛することから始めています。ヨーロッパの雰囲気だ、家内が信州に行きたいと言う、などと言う。信州は昔から知的な尊敬を集めている、それは教育に熱心だからだ、と言うマクラから、言葉についての話に入っていきます。言葉の大切さを語り、日本語の話し言葉の貧弱さ、日本人の演説のつまらなさの話になります。英語やフランス語では人の心を動かすスピーチが出来るが、日本語では

難しい。フランス革命の時、ロベスピエールが個人を弾劾する強烈な演説をして、聴衆を煽つて、その人をギロチンに追いやつた話なんかが例になります。日本人の日本語での演説にはそれ程のパワーはありません。日本人も話し言葉を大切に育てて行きましよう、と言つ結論になつて行きます。

知恩院主催の講演会と言えば、聴衆はお坊さんと言つことになるのですが、ここで仏教についての話をする。度胸が要るでしょうね。この講演は一九六七年にされたものですが、その前にも仏教文化講演会と言つ場でお坊さんを相手に仏教の話をしていきます。講演録の中ではこれが一番古くて、一九六四年になっています。司馬さんが四十を過ぎたばかりの頃、と言つことになります。若気の至りの部分もあつたのではないでしょうか。プロのお坊さん連中の前で、法然と親鸞、最澄と空海の話なんかをしています。トルストイと親鸞上人との比較の話や歴史の話なんかは良いとしても、それぞれの宗派の教義に触れている辺りは勉強の自信がさせることなのでしょう。

四国へ行くと、どの県も小説の舞台になつていゝのですね。土佐の高知が言つまでも

なく坂本竜馬で「竜馬が行く」、伊予の愛媛が正岡子規と秋山好古・真之の兄弟で「坂の上の雲」、讃岐の香川が弘法大師で「空海の風景」、徳島は淡路島になりますが、高田屋嘉兵衛で「菜の花の沖」。ですから四国では何処へ行っても話題には事欠かない、と言つことになります。

講演録の間に、生前、編集者が接した氏を短く紹介したエピソードが挟まっていますが、これも面白い。

「街道に行く」の挿絵を描いた須田剋太と言つ画家の話。ポルトガルのサグレスと言う岬に行った時のこと。須田画伯が浜に落ちている小石を、「グレコそっくりだ」と言いながら、ポケット一杯拾ったのだそうです。それを今度は、「ヨーロッパが減るといけないから」と言つて、一つずつ地面に戻して行った、と言つのです。何だか現実離れしていて、芸術家の世界を見るような気がします。

司馬さんは風邪に弱かったらしい。風邪を引くと、仕事も何も出来なくなってしまう。予防方法は、こまめに衣類で体温を調整することだったのだそうです。首を冷やさな

ようにバンダナを巻き付け、うがいを欠かさなかったと言います。寝る時も、手つ甲脚
絆姿だったとか。事務仕事用の黒い腕カバーをして寝ていたこともあった、と言います。

これも須田画伯に関する話。オランダ紀行の連載中に同画伯が病気で長期に入院した
時のこと。他の人に挿絵を頼むと画伯がガツカリするだろう、と言っことで、司馬さん
が自分で描くことにし、約五か月もロングリーフを務めたと言います。その挿絵を紹
介してありますが、仲々サマになっているのです。それより、病気の画家に対する温か
い気持ちを感じられて、良い話です。

この他、新幹線の中で、夢中で考え事をしながらトイレに行つて、帰りに戻る席を間
違えてしまい、おまけにその席に置いてあつた他人の弁当を食べてしまった話とか、方
向音痴で、自宅から散歩に出掛けて、帰り道が分からなくなってしまい、電話が掛かっ
て迎えを出した話とか、面白い話もあります。どのエピソードもギスギスしていなくて、
フワッと暖かで、気持ち良く読めるのです。

六巻目ともなるとソロソロ種が尽きて来て、対談なんかが主体になりました。

司馬さんの命日に毎年、「菜の花忌」が行われ、講演会をやっているようですが、塩野七生辺りが出て来て、「自分は司馬さんには生前一度も会ったことはなかったけれど、駆け出しの頃送った自分の著書に対して丁寧な返事を貰った」と、その時貰ったハガキを紹介して嬉しそうに話をしている。司馬さんは「人たらし」と言われたそうですが、誰にも好かれる得な人だったんだな、と思います。

（平成十三年二月）

「最終目標は天皇の処刑」

中国『日本解放工作』の恐るべき全貌

昨年末、題記の何ともおぞましい題名の本が出版されました。これは先日来日されたブータンの国王夫妻のご案内役として評判の良かったチベットのベマ・ギャルボ氏が書いたものです。

もう三・四年前になりますか、玉川兄のお宅に伺った時、奥さまが引つ張り出して来てくれて見せて頂いたのが、この本の主題になっている、中国共産党が作った「日本解

放第二期工作要綱」でした。どうやらかなり右翼系の「月刊日本」とか言う雑誌の抜粋コピーのようでしたが、この工作要綱は四〇年以上前に作られたもので、中央学院大学の西内と言う教授が当時香港・台湾など北東アジアを視察した際に入手したものとされています。奥さまが、当時話題になっていた「子宮頸がん予防のワクチン」なるものも、「このワクチンには妊娠をpushする作用がある。これは日本の人口を減らして国力を衰えさせようとする中国の陰謀だ」と大変に怒っておられて、相当右寄りと目される玉川兄より余程右寄りの「極右の奥さまだ」と頼もしく思った記憶があります。尤も、このような普通の愛国心を持つている我々が、右寄りだ、と言われるような昨今の日本の風潮の方が異常なのであって、それこそ、日本人のメンタリティをなし崩しに変えて行く、と言う、この要綱の工作で進められている中国の陰謀が成功しつつある、と言うことなのかも知れません。

コピーを持ち帰って読んでみましたが、実に恐ろしいことが書かれているのです。

四〇年前と言いますと、田中角栄が日中国交回復を成し遂げた頃ですが、この工作はそ

れ以前から進められて来ていたもので、日中国交回復はその第一期の工作が成功したに過ぎないことが示されています。その後の日本の動きをこの要綱に照らして見てみると、恐ろしいほど要綱に示されたスケジュールに沿っているのです。

要綱に示された第一期工作の目標は「わが国（中国）との国交正常化」ですが、第二期の目標が「民主連合政府の形成」とされており、第三期の目標は「日本人民民主共和国の樹立　天皇を戦犯の首魁として処刑」になっています。

恐ろしいのは、この要綱には、これらの工作を進めるための細かい戦術が指示されていて、それらが皆その後の実際の動きと一致していることです。例えば、中国への親近感を持たせるように無意識のうちに群集心理を導け、とか、マスコミを誘導して下らない番組が喜ばれるようにしろ、なんてことが指示されているのですが、昨今の一億総白痴化そのものの、「お笑い」と「グルメ」と「温泉」ばかりの下らないテレビの番組は、正にこの要綱に沿ったものです。「世論」というものは、自然発生的に出来るものではなくて、意図的に作り上げるものだ」と言う毛沢東の教えがそのまま生かされています。第一期

目標の国交正常化が達成されたのも、この工作の成果だ、と言っています。

教育面では中国語の普及のため、教師を無償で提供する。最初は柔らかく女性の教師から入れて行き、徐々に男性教師に交代させて行く。そしてこれらの教師は十分に教育を施された工作員とする、と書かれています。マスコミ工作は新聞雑誌、テレビとラジオ、出版に分けて細かい指示が出されています。「人間の尊重、自由、民主、平和、独立」等と言う誰もが反対できない謳い文句を利用して、「個の尊重、全の否定」の方向に持って行け、なんて指導がなされていますが、今や日本の状態は正にこの通りになりつつあるのではないか。石原慎太郎さんの言う「我欲」ばかりが罷り通る悲しい日本になっちゃってしまっているのも、この作戦が功を奏しているように思われます。マスコミ対策については別に定める作戦があつて、特に力を入れているようです。その他、政党への工作、議員の懐柔、対自民党対策、対社会・公明・民社（当時の）各党など個々の分野に亘つても細かくて具体的な対策が出来ているし、極右団体対策、極左団体対策も出来ています。

大勢の筋金入りの工作員を送り込んで、こつした工作を実施する訳ですが、これらの工作は表立った動きに見えてはならない。極く自然に、時間が掛かっても良いから自動的に見えるように仕向ける、と言う方針が基本になっていて、工作の行動要領と言う形で具体的に細かく指示が出されています。このための工作員を二〇〇〇名送り込む、と記されていますが、これは四〇年前のこと、その後どれ位の数の工作員が送り込まれ、そのシンパがどれ位の数になっているのだろうか。戦後、GHQの提灯持ちをする進歩的文化人なる不思議な人種が跋扈し、愚かなマスコミもこれを後押ししましたが、中国関連でもこれに類する人達が沢山いると言うことではないのだろうか。

そして今や、第二目標の民主連合政府の形成まで達成されて来ていますが、この要綱によれば、これでもまだまだ中途段階。今後は第三段階、日本人民民主共和国の樹立への仕上げに向かっていると云うことではないのだろうか。四〇年前に立てられた目標がその通りに達成されつつある、というところに何ともいえない恐ろしさを感じます。

ベマ・ギャルボさんは、チベットの高貴な階級に生れたらしいのですが、中共の弾圧

を避けて幼少時にインドに亡命。一九六五年に来日し、ダライ・ラマ法王アジア・太平洋地区初代代表になって、二〇〇五年に日本国籍を取得していますが、日本に今起こっている現象が、十九世紀に入って辛亥革命の後、チベットが毛沢東の中国によって加えられて来た工作とあまりに似ているので、警鐘を鳴らしたい、との意図でこの本を書いたとのこと。チベットは十七世紀の頃から、法王ダライ・ラマを中心とする中央集権の平和主義の国家でしたが、平和ボケに陥った結果、中共の侵略を許し、一二〇万人の人が殺される羽目になり、不幸にしてこの工作の成功させてしまって、今や中国の自治区にされてしまった。最近では、焼身自殺しか抗議の意を表すことが出来ない、と言う凄まじいことになってしまっています。ギャルボさんは「日本もこのままでは中国の一部にされてしまう。日本には中国の自治区になって欲しくない」と繰り返し書いています。私は、玉川兄宅でこのコピーに接して以来、何故この件が大きくマスコミに取り上げられ、話題になって来ないのか、疑問に思っていたのですが、どうやら最初に取り上げられたのが、弱小の右翼系の雑誌だったことが最大の原因で、この工作要綱が

偽物視されて来たと言うのが真相らしいのです。若しかしたら、殊更偽物視するように仕向けた中国共産党の工作の成功例の一つかも知れません。

時事通信社の元外信部長が、「ベマ・ギャルボも桜井よし子も反中国亡者」「意図的に中国脅威論を振り回して稼いでいる連中」「二十一世紀の、人と物の交流が活発に国際化しているグローバル時代に冷戦思考の抜けない桜井のような阿呆な連中が幅を利かせていること自体嘆かわしい」なんて言っているのだそうです。桜井よし子ファンの私としては、全く許せない発言です。こんなジャーナリストこそ中国に洗脳された亡国の輩ではないのか、こんなジャーナリストがいるから、こんなに情けない日本になってしまったのではないかと怒り心頭の思いです。

この要綱には書いてありませんが、中国共産党が発表した「二〇五〇年マップ」なるものがあって、これによると二〇五〇年には朝鮮半島は全部中国の「朝鮮省」として中国の領土となり、日本は能登半島から西は「東海省」となって同じく中国の領土、それより東北の部分は今のチベット自治区と同じように、中国の「日本自治区」になってい

ます。要綱の最終の目的はこの辺にあるのでしょう。

私は沖縄から米軍が撤退するようなことになつたら、直ぐにも中国が「沖縄は自分の領土だ」と主張して来るに違いないと思つています。今の日本の情けない外交姿勢から考えると、そのまま取られてしまつのではないだろうか。琉球の昔から、沖縄には中国のその種の主張を裏付けするような歴史があつたと思うのです。尖閣諸島でも見られたように、理由がなくても屁理屈をつけて主張して来る、既成事実を作り出そうとして来る、恥と言つことを知らないあの連中にとつては格好の理屈を与えるような気がしてなりません。アメリカが沖縄を離れないのは、それを慮り、且つ、日本に自国の領土を守ろうとする決然たる意志が見られないからではないか、と思つています。地球の裏側にある自国の領土フォークランドを守つたサッチャー首相の見事な毅然とした美しい姿勢を羨ましく思い出します。

それにしてもこのような気が遠くなるような長い目で見た政治や外交は日本の政治家にはとても出来ないこと。政治家に国家感が見られない上に、国民と国土、国益を守

る意識が希薄で、極く短い目でしかものを見ることが出来ない人気取り中心の政治家が蔓延っている昨今の日本は、こうした面では中国にはとても敵わない、と思わされています。逆に、昨今の日本の政治には「皆さま」のご意向を尊重するばかりの短視眼的で大衆迎合型になり過ぎた民主主義の弊害が如実に出て来ているのではないかな、なんて悲観的な見方をしています。

（平成二十四年二月）

「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」

私は常々、玉川兄は良く本を読む人だ、と感心しているのですが、彼が読んだ本を時々、これは面白いから、と言って送ってくれます。今尚、上京すると時間を見付けて神田の古本屋巡りをしているとのことですから、大したものだと思います。珍しい落語関連の本を貸してくれることが多いのですが、先日木村政彦を書いた題記の本を送ってくれました。

七〇〇ページの分厚い単行本なので、普通では仲々手の出ない本ですが、読み始める

と面白くて止められないほどで、一気に読み上げました。本来なら玉川兄から読後感をご披露いただくべきところですが、私の感じたこと、と言うことでひと言書かせて頂くことにしました。

著者は増田俊也と言う一九六五年生まれの若い記者上がりの人ですが、北海道大学の柔道部で高専柔道の流れを汲む寝技中心の柔道を経験した人だそうです。膨大な資料と綿密な取材の中から資料に忠実にこの伝記を書き上げたようです。フィクションの部分は全くなく、事実を積み上げた伝記になっていますが、この本が昨二〇一一年の九月に上梓されています。

一番興味深いのは、我々も知っている牛島辰熊氏が中心人物の一人となっていることです。牛島先生は昭和四年（一九二九年）から二十年まで東京商大の柔道部師範をしてくれた人で、我々が現役の頃にも先輩師範として何度か有備館にお越し頂いています。それほど大柄ではないけど、ガッチリした体型で美髯を蓄え、眼光炯炯として何とも凄みのある方でした。一番印象的なのが、昭和三十三年に大河内主将の下での三商大戦で

優勝した時のこと。牛島先生は少し遅れて来られたのですが、有備館の玄関を上がる時、マネジャーの野口兄が迎えに出て、「先生、神戸に勝ちましたよ」と勇んで報告したら、先生が「おお、珍しいことだな」と言われたので、野口が「先生、珍しいことではなくて、良かったな、と言って下さい」と答えたのだそうです。先生は後で「今日は野口に叱られたよ」と言っておられました。先生は一九〇四年の生まれとのことですから、当時はもう五十を大分超えておられた筈ですが、来られると柔道着に着替えられ、稽古をつけてくれました。私は直接稽古をつけて頂いた覚えはありませんが、大河内さん辺りとやっておられた姿を覚えています。

猛稽古と物凄い敢闘精神で知られ、昭和二年（一九二七年）から明治神宮大会から全日本選士権にかけて五年連続で優勝した方です。今で言えば全日本選手権を五連覇したことになります。その方が二回出場した天覧試合では運がなく、勝てませんでしたので、天覧試合に勝てる後継者を探そうということで、木村政彦をスカウトしたと言つことらしいのです。

昭和九年に熊本の本町の鎮西中学にいた木村を発見し、牛島塾と称していた自宅に住まわせ、自ら猛稽古の特訓で鍛え上げて、「木村の前に木村なし。木村の後に木村なし」と言われた木村政彦を作り上げます。木村は拓大に進むのですが、この間向かうところ敵なしの強さで、一五年間負けなしの記録を作り、昭和十五年には牛島先生が目指していた紀元二千六百年記念の天皇杯を取ります。

考えてみると、牛島先生はこの間も東京商大の師範をされていたことになります。記録を見ますと、師範の期間が子安正男先生とダブっていますから、名目だけだったのかも知れませんが、こんな方を師範にしていたなんて、母校の柔道部も大したものですよ。

牛島先生は、思想的にもシツカリしたものを持っておられたようで、終戦間近には石原莞爾に傾倒して、この戦争は早く止めさせねばならない、そのためには東條首相を暗殺せねばならない、との考えに至り、いざ決行しようとした時、東條首相が退陣してしまつて実行に移せなかつた、とのことですよ。このため暫くは牢屋に入っていたことがあつたようです。

牛島先生は講道館には属していたものの、三船久蔵十段とは折り合いが良くなくて、所謂反主流派だったようです。又、プロ柔道を始めたのが、牛島先生とそれに追隨した木村政彦だった、と言つのは新しい発見でした。終戦直後、講道館が、GHQに柔道再開を認めて貰わんがために武道色を弱め、殊更スポーツ色を強めて行つたのに反抗して作つたのが、プロ柔道の組織だったと言つのです。プロ柔道というと、金を目当てに柔道をするなんて汚い、と言つ、下に見る傾向が出て来ますし、私もそんな印象を持っていたのですが、柔道には武道の心を残さねばならない、本来の柔道を守るためには、どうしてもお金の裏付けが必要だ、と言つことでプロ柔道を立ち上げた、とのこと。一般的な評価とは全く反対の考え方でプロ柔道が生れたことに驚かされました。

この本に親しみを感じたのは、我々の時代と重なる部分があつて、知っている先生方が出て来るにもあります。大沢慶巳と言つ先生は柴山先生の親友の一人で、我々の現役の頃は早稲田の師範をしておられました。小柄ながら足技の名人と言われた人です。有備館に来られたこともあつたと思います。平野時男と言つ方の名前も出て来ます。

私が柔友会の副幹事長役をやっていた時、戦前の先輩方が、柴山先生では飽き足りない、
と言いついて困っていたことがありました。柴山先生の推薦で現在の野瀬清喜先生に引
き継ぐことは決めたものの、七十歳まではやらせてくれ、と言つ柴山先生の気持ちに戦
前の先輩方に納得させることに苦勞し、当時、会長をやっていた高木先輩の力を借りて、
何とか纏めたのでした。その時、師範候補として出て来たのが平野先生でした。この方
も小柄でしたが、大変に強い方だったそう、一橋大柔道部は一時、柴山師範、平野
先生、野瀬先生と三人の師範が鼎立していたことがありました。残念ながら、我が柴山
謙治師範はこの本の中には出て来ません。

木村政彦が全盛だったのは、昭和九年に熊本で牛島先生に見出されて拓大の予科に入
学し、拓大の学生の頃から、卒業後暫くのことですから、戦争を挟んで昭和二十九年ご
ろまでのこと。我々が知っている木村政彦は、プロレスの力道山と真剣勝負の戦いをや
つて、ボコボコにされて負けたことが一番印象に残っています。日本柔道史上最強の男、
と言われた木村がプロレスの力道山に惨敗したことが当時相当大きな話題になりました

た。これが昭和二十九年（一九五四年）十二月のことです。この本はこの辺のことを中心に書かれているのですが、色んな調査から当時の様子が判つて来ます。木村は昭和二十五年四月に牛島先生に誘われて国際柔道連盟に加盟し、その後プロ柔道の道を辿るのですが、プロ柔道は一年ほどで採算が取れなくなつて挫折します。その後、木村は自分で全日本プロ柔道家協会を設立して、格闘技を売り物にして外国を転戦し、お金を稼ぐことになります。その内にプロレスの世界にも近付いて行くのです。当時売り出して来た朝鮮出身の力道山とタッグを組んで試合をしていた時期もあったようですが、どうやら木村が負け役、力道山が勝ち役にされていたようです。力道山との対戦が計画されたのは、木村も三十七歳でもう下り坂だったことは事実なんでしょうが、それでも周囲の誰彼に聞いて廻つても、真剣勝負をやれば力道山なんて全く相手にならなかつた程、強かつたと言われています。それがボコボコに負けたのは、事前の打ち合わせで力道山に騙されて、木村がプロレスの出来勝負の積もりだったのに対して、途中で突然、力道山が真剣勝負に切り替えてしまったところに原因がある、と言っているようです。力道

山はこれを契機にドンドン名を挙げて、プロレスの時代を作りますが、昭和三十八年十二月には赤坂のラテックオーターでヤクザに刺されて死んでしまいます。木村は負けした後、何度も再勝負を申し入れるのですが、取り合って貰えず、その内に力道山が死んでしまった、ということのようです。

木村は酒飲みで人間が温かく、茶目っ気もあって多くの人に愛された人のようですが、所謂柔道馬鹿で格闘技の他は何も出来なかった人のようです。真剣勝負の武道としての柔道は寝技が主眼とされ、木村の寝技は群を抜いていたそうです。昭和三十九年の東京オリンピックの無差別級で神永がヘーシングに敗れて柔道日本の名が汚されることになるのですが、日本代表の選手決定の直前まで、無差別級には木村を出せ、と言う声が出ていたそうです。当時、木村は四十七歳でしたが、それでもヘーシングに寝技で対抗できるのは木村以外にいない、と言つのが当時の専門家の評価だったと言いますから、木村がどれほど強かったか、が分ります。

木村は昭和三十六年に拓大の師範に復帰しますが、六十五歳まで勤めて引退し、平成

五年に肝臓がんのため七十五歳で亡くなります。

木村が唯一残したのは拓大で育てた岩釣兼生だとされています。自らの特訓で鍛え上げて、昭和四十六年には全日本選手権を取らせます。その後、自分の跡を継がせて、格闘技のプロに育てます。バリリトワードと呼ばれる打撃・関節・締め何でもありの、正に生死を賭けた真剣勝負の凄まじい格闘技があるようですが、これはあまりに危険なので公には許されていないのです。地下組織の下で試合が行われていたとのことですが、岩釣はこの競技で昭和五十年代に世界チャンピオンを張っていたそうです。木村の力道山に負けた後の生き甲斐は、真剣勝負の戦いで自分の後継者を作ることだったが、岩釣が見事にその念願を叶えた、と言うのが結びになっていました。

(平成二十四年一月)

馬場 正平君のコメント

牛島先生。眼光鋭く、なかなかのハンサム。我々三商大戦が有備館であったとき、対神戸戦で晝兄が向こうのかなり強い選手と当たり、善戦していましたが、相手に

腕を取られ、あわや一本となり、負けたと息をのみました。そのとき、どうしてあの逆を逃れたのか、私には分からなかったのですが。その瞬間、われわれの近く、つまり剣道部との境目の隅から野太い「ウマイツ」という声が聞こえました。牛島先生がそこから、じっと見ておられたのです。そこには大河内さんの父上もおられ、貴兄が相手を見事な背負い投げで倒したときは、流石に先生の声があつたとしても歓声で聞こえなかつたでしょう。そのときは、一橋が優勝したのですが、試合後先生の姿はありませんでした。本来なら、正面席に座っておられてもおかしくないのですが、それを隅で眺めておられた先生の奥床しさが偲ばれます。飄然として来られ、飄然として去られた感じですね。その意味では、確かに先生に稽古をして頂かなかつたとしても、先生の一言は貴兄に対する素晴らしい賛辞でしょう。

寮の同室の川原君が帰宅して、興奮気味に貴兄の技を賞賛していたことを思い出します。あの瞬間、川原君が飛び上がるようにして手を叩き、その隣の女の子が口を一杯に開いている実にその瞬間という写真があります。彼がどんなに早く貴兄の

技を認めたかを証明する「俺の神眼」と誇らしげに言っていたものです。そのときの彼の写真は私から貰ったのでしょうか。単なる観衆の一人にしかすぎない彼がどうして写真に収められたのか、不思議です。もし撮影者が牛島先生を知っていたら、その一枚があつただらうと思うのですが。

右記コメントに対する私のコメント

牛島先生の話をご紹介頂き、どうもありがとうございます。三十三年秋、我々が三年の時の三商大戦の対大阪戦のことは良く覚えています。大阪の副将を背負い投げで倒した後、続いて大将と当たり、右腕を腕ひしぎ十字固めに極められそうになって「もうダメか」思った時、誰かに「頭を入れて身体ごと回れ！」と言われたような気がしたので。思い切つてその通りに身体を回転させたら、極められていた腕がスツポリ抜けて逆から逃れることが出来ました。若しかしたら、牛島先生がアドバイスして下さったのが、聞こえたのかも知れません。先生が「ウマイツ」と言つて褒めて下さった話は初めて聞きましたが、寝技の名人と言われた牛島先生に、上手い、な

んて言われたのですから、これは、以て瞑すべし、と言つても良いでしょう。川原君が大口を開けて拍手している写真は私も持つています。この試合では私は四将で出場していて、この大阪の大将とは技ありを取られた後、技ありを取り返して引き分けに持ち込んだので、三人残しで勝つて、優勝したのでした。若き日の思い出です。

「金融が乗つ取る世界経済」

この本の著者のロナルド・ドーア氏は英国の経済学者です。日本への関心は江戸時代の研究に始まつたそうですが、日本の経済や経営に対する造詣が深く、八十七歳になつた現在でも健筆を奮つておられます。橋本竜太郎内閣がグローバル・スタンダード取り入れに躍起になり、金融ビッグバンド、と騒いでいた頃、「日本の経済はグローバル・スタンダードと称するアメリカン・スタンダードに追隨する必要は全くない。日本は日本のやり方でやれば良い。日本と付き合いたかつたら、日本のやり方で付き合え、と言

えば良いんだ」と言う論陣を張られたことがあって、私が当時感じていた思いとピッタリ合ったことから気に入って、少し読んだのですが、今でも著書が目につくと時々手を出してしまいます。題記の本は二〇一一年の十月に上梓された新書本です。

日本の資本主義は仕事の充実感とか、職場の結束とか、ステークホルダーへの義理人情とか、報酬の配分に公正を求める考え方など共同体的な資本主義とも言えるもので、個人主義的な米英のアングロサクソン型の資本主義と対立すると言っても良く、むしろドイツのそれに近いと言っています。

橋本内閣に始まったグローバル・スタンダードの取り入れは、小泉・竹中の改革で固まってしまったが、規制の撤廃、競争原理の追及、株主優先（コーポレート・ガバナンス）、自己責任の徹底、株式市場を経済の中心に置くなどのアメリカ流の考え方を徹底した結果、経済が金融化してしまった。株式市場は新規事業に資金を供給するもので、経済を活性化させるものだ、と言われているが、この神話は全くのウソで、調べてみると、新規事業への投資は殆どが既存企業の設備投資や内部留保によってなされていて、

株式市場で取引された株数の内で新規事業に投資された分は僅か〇・三%でしかない。従って、株は投資ではなくて投機なのだ、と断罪しています。為替の取引においても、実際の国際貿易取引の実需に対し、その一〇〇倍の空需が発生している。これらを見ても昨今の金融業は世の中にとって無駄なもので、むしろ詐欺の分野に入る、とまで言っていて、私が常々考えていることと完全に一致し、全くその通りだ、と痛快な思いすらしています。

ドーア教授が憂えている経済金融化の弊害の一つは、優秀な人材・学生が証券市場に取り込まれて来ていることです。これらの優秀な人たちが優秀な頭で新しい金融商品を生み出す。これらの金融商品は一種の博奕に当たるものだが、当たれば莫大な収入が得られるので、優秀な人材がこの「賭け事のカジノの場」に取り込まれて行くことを憂えておられるのです。ノーベル経済学賞を取ったR・マートンやM・シールズにも触れて、「ノーベル賞と言うものは人間社会に貢献した人に与えられるはずのものなのに、株式市場で儲ける方法を考え出したこんな奴らにノーベル賞をやる必要なんてない」と主張

しておられ、これも私が以前、本誌のどこかで主張した考え方と完全に一致して嬉しい思いがしています。

企業買収についても、本来の買収・合併は、企業の力を付け、効率の良い企業経営が出来るようにするためになされるべきなのに、金融主導の買収は、短期間に収益を上げて企業の価値を上げておいて、その企業を売り飛ばして差額を儲けようとするのが目的になっている。人員削減や新規投資を削るなどの手段を取ることが多いので、従業員に過重な負担を強いたり、長い目で見た投資を先延ばしにするなどの弊害が出て来る。これも金融業が何の役にも立たないことの例だ、と言っているようです。

日本型の資本主義は、所得分布が比較的平等であること、失業が少ないこと、経営者が私益と共に公益を考える傾向があること、教育・医療制度が整備されていること、商取引の相手に対する思いやりがあること、官僚が優秀で腐敗が少ないこと、などで八〇年代までは評価されて来たが、今はこれが崩れて来ている、とも言っています。ただ所得の分布については、未だに比較的平準化していて、現在も八〇年代の英国の状態だ、

との見方をしています。

格付け会社が世の中に無用のもの、と言っているのも嬉しい。これは以前、馬場兄も言っておられたことがあったと思います。ドーア教授は、格付け会社と呼ばれる単なる営利企業のひと言で経済が動く。間違った判断で世の中を混乱させる。金融危機の元凶の一つだ、と言っています。全く、格付け会社なんて、何の権限もない民間の企業が偉そうな顔をして、会社の格付けをする。どつ言つ権限の下にやっているのか知りませんが、国の格付けまでやっている。一体、お前は何様なんだ、と思つて来ました。それでいて間違つても責任が問われる訳でもない。金融に乗っ取られた世界経済の弊害の一つなのではないかと思ひます。

これらの金融経済化の流れを止める方法が見当たらない、と言つのが悩みの種です。金融の国際化が進み過ぎていのに、国際的にこれを規制する手段がない。国内の規制だけでは止められないが、各国が国内の規制を強めて、これをお互いに協力し合う、と言つ方法しかないのではないか、と主張しておられます。

金融制度は、宇沢弘之教授が提起しておられる社会的共通資本の中の制度資本の一つですが、教授が主張されるように、こんな制度は自由競争の中に野放しにせず、その道の専門家からなるコモンズによって管理させる、と言つのも解決方法の一つではないか、と思います。どうすればこんな国際的なコモンズを作ることが出来るのか、が問題になると思いますが……。

国際通貨をドルから取り戻すことが第一歩ではないか、と言つ提言もあります。アメリカの国債が世界中に売られて、このアンバランスが金融危機を生み出していると言つのです。一九四四年のブレトン・ウッズ会議で国際通貨（バンコール）としてのSDRが提言されたものの、その後、全くSDR化が進んでいない。これを進めるのが第一歩ではないか、との主張です。私は本誌の初期の頃、昭和四十三年三月に「金に対する素朴な疑問」と言つ一考を試みたことがあり（一考、なんて偉そうなものではなく、単なる感想を書いた雑文ですが）、この中でSDRに対する期待を書いたことがあります。ここでドーア教授から同趣旨の提言を頂いて何だか嬉しくなっています。

これに関連して、考えたことがあります。先般、オリンパスが同社の金融上の危機に際して、不当な金融操作をしていたことが問題になりました。コーポレート・ガバナンスに違反し、株主に損害を与える恐れがあった、と言うことで、当時の経営者が罪になるようです。詳しい内容は分かりませんが、私はこんなことが罪になると言うのはオカシイのではないか、と言う疑問を持っています。これらの人たちは、会社の危機に当たって、その存続のために一時的に金融上の危ない手段を取ったのであって、私腹を肥やすためにこんなことをしたのではないと聞いています。事業を守るために止む無く危険を冒したのであって、現にこの会社は立派な製品を生み出し続けて社会に貢献して来ています。結果はあまり上手く行かなくて、損を出したようですが、別に罪に問う必要はないのではないか、と思うのです。事業を守るために経営者が危険を冒したことで株主が損害を受けるのは当然のこと。それも投機の一部だと考えても良いのではないだろうか。極端に言えば、仮にこの違法と言われる金融操作の結果、倒産するようなことになって株主に損害を与える結果になったとしても、罪に問われなくても良いのではないか

とすら思います。尤もこんな法律が出来てしまっているので、法を犯せば罪になる訳ですが、私はこんな法律が必要なのかな、と言う疑問を持っているということです。本件では、この会社の社長が最初は「私は知らなかった」と言っていたのに、結局は関与していたことがバレってしまった、何て言うのが一番見つとも無いことだったな、と思っています。

この辺について、経営者の玉川兄や馬場兄、茂木兄、金融の世界におられた大野木兄辺りのご意見をお伺いしたいと思いますが如何でしょうか？
(平成二十四年四月)

最近読んだ本

一・口語訳「古事記」・三浦佑之

日本の神話を読み直してみたいな、と思っていたら、この本が話題になっていましたので読んでみました。「古事記」は西暦七二二年に太安万侶が編纂して当時の元明天皇に献上したとされている日本最古の歴史書とされていますが、国の歴史書として

はその八年後に書かれた「日本書紀」の方が正規のものとされ、「古事記」が世に出たのは十八世紀も末になって本居宣長が「古事記伝」を刊行してから、とされている。「日本書紀」が天皇家の正当性を語ることに主眼を置いたのに対して、「古事記」の方は、それまでに語り部によって伝えられて来た伝承の歴史を忠実に書いたものではないか、というのがこの本の著者の三浦佑之氏の解釈です。勿論、古事記は全部漢字で書かれています。漢文の部分と日本古来の大和言葉を漢字で表音して表した部分があるそうです。三浦佑之氏はこの表音の部分が口伝えの伝承を元に書かれたものに違いないとの確信に基づき、新しい試みとして、語り部が語った形にして紹介しています。一人の語り部の老人を登場させ、この老人にその内容を語らせる形にしているのです。

取っ付き易く、読み易い読み物になっています。神代篇と、人代篇に分けてありますが、神代篇に出て来る神々の数の多いこと。この本では神々の名前がカタカナで表示されています。元の漢字の表示よりは読み易がるうと言うことでこんな手法を取っ

たのでしようが、これらが長々しくて読み難い。これらが皆口移しで伝承されて来たものだとすれば、代々の語り部達は名前を記憶するだけでも大変だっただろうな、と思わされます。夫々の神様が何をしたのか、が書かれている訳ではありません。大半は名前だけ。記述があるのはホンの一部の神様だけです。

イザナギの命とイザナミの命の国造りの話は、勿論出て来ます。天照大御神が天岩屋に隠れてしまい、タジカラオの命が岩の扉を引き開けた話も出て来ますが、その岩の扉が戸隠まで飛んで行って岩山になった話は出て来ませんでした。「古事記」が生まれる以前から各地の歴史がボチボチと書かれていた事実はあつたようですから、戸隠の話はそのどれかに出て来る神話なのかも知れません。良い神様ばかりではありません。嫉妬心を持つ神様、嘘つきの神様、色好みの神様なんかが出て来て、ギリシャ・ローマの神話と通じるものを感じました。神代篇は高天原の神々の話から大國主命の出雲神話に続き、初代天皇の神武天皇の出現までです。

人代篇には万世一系の天皇の名前と由来が比較的整然と記されています。ヤマトタ

ケルの命の蛮族征伐の話や仁徳天皇の有名な民の竈に代表される仁政なんかも詳しく出て来ますが、天皇の歴史の方は「日本書紀」の方がシツカリ書かれているそうです。「日本書紀」の方は、天皇家が神々の正当な子孫だ、と言うことを示すことを主目的として書かれたとされていますから、そう言うことになるのでしょう。

私が期待していた神話の部分はあまり明るい話は多くなくて、ギリシャ・ローマの神話の方が夢があつて面白かつたな、と思いました。

二、「絢爛たる悪運」・工藤美代子

工藤美代子が書いた岸信介元首相の伝記です。岸信介は戦前の東条英機内閣の一員として、大戦の開戦に関わつたし、右翼の妖怪としての悪名の方が高い人ですが、私は日本の国を誇りある方向に持って行こうとした国家観を持つたリーダーとして高く評価しています。吉田茂元首相もこうした国家観は持っていたと思いますが、終戦直後の進駐軍の下で出来ることは限られていただろうし、あの時代に出来ることはあの程度ではなかったか。少し力を付けてから誇りある日本を取り戻そうとしていたの

ではないかと思うのです。ところが、その後の首相は日本を経済的に発展させる方向に持って行くことには力を入れましたが、日本人の誇りを取り戻し、国として自立して対外的に国益を守る感覚が薄かったのではないか。田中角栄も経済の面で国を栄えさせるためには力を尽くしたと思いますが、国の誇りとか国土や国民、国益を守ると言う意味での国家観を持っていたかどうかには疑問があります。ましてや最近のリーダーと称せられる首相たちの国家観は何なんだろう？ 「国民の皆さまのご意向」とやらばかりが前面に出て来て、言わば選挙目当てのご機嫌伺いの政策ばかりが取られている。こんな首相に飽き足りない思いをしていたところにこの本を発見したので読んでみました。

序論として安保改定の一九六〇年の様子が描かれています。南平台の岸邸を囲む「アンポ反対」のデモの喧騒の中で、孫の安倍晋三と遊ぶ岸の姿が描かれています。女婿の安倍晋太郎や孫の晋三も最初から登場します。アンポの年の一九六〇年は我々が一橋大を卒業した年ですが、現総理の安倍晋三は当時五歳だったのですね。

岸信介、佐藤栄作と兄弟の首相を輩出した佐藤家と、信介が養子になつた佐藤家の本家である岸家の沿革が語られますが、曾祖父の時代の吉田松陰との付き合い辺りからの政治との繋がりをお明かしてくれます。同じ長州ですからそんな付き合いもあつたのでしよう。

岸信介は大変な秀才だつたらしく、東大の法科で民法学者の吾妻栄とトップを争つていたそうです。商工省に入省したのは、エリートぞろいの大蔵省や外務省を避けたのだ、と言つ説があるそうですが、商工省では群を抜いて出世し、四十歳の時満州に派遣されて、満州の経営に力を発揮します。四十七歳で東条内閣の商工大臣に抜擢され、開戦時の閣僚の一人と言つことになります。その後、東条首相の政策に反対して、辞職を求められますが、これに反抗して抱き合い心中の形で東条首相を退陣させることとなります。戦後はA級戦犯として逮捕されますが、不起訴となり、昭和二十三年十二月、東条英機他のA級戦犯の絞首刑が執行された翌日に釈放され、追放解除を待つて直ぐに政治活動を始めます。

彼の政治活動の第一の目的は自主憲法の制定だったとされていますが、その前段階の安保改定で退陣することになったのはご存知の通りです。当時は「アンポ・ハンタ―イ」の声ばかりが大きく聞こえていましたが、改定の内容は、今読み返してみても、それまでの日米安保条約の不備を補う誠に適切な交渉をやってくれたのではないか、と思います。本当は、憲法改正までやり遂げたかったに違いない、と思いますし、それ以降の首相は憲法には仲々触れようとしなかったこともあり、彼の手でやっておいて貰えればその後の日本も変わっていたのではないかと残念に思います。政治手法は仲々したたかだったことが紹介されています。当時の大物、大野伴睦や藤山愛一郎を散々利用した上で切り捨てて行った過程なんか紹介されています。一方、当時、県連との仲が悪くて自民党の公認が貰えず、無所属で初の選挙に臨む森喜朗の応援に単身で訪れて初当選の手伝いをするなんて、人情味豊かな面もあったようです。最近の政治家は小粒化してしまって、こんな大物の骨太な政治家には仲々お目に掛かれなくなりましたが、何か懐かしいのを感じます。それにしても首相になってか

ら南平台に広大な屋敷を建てたり、引退後は御殿場に豪壮な別荘を建てたり、政治家とお金の問題は、我々庶民には理解できない部分がありますね。

三、「海賊と呼ばれた男」・百田尚樹

百田尚樹と言う作家は「永遠のゼロ」で話題になった作家です。「永遠のゼロ」は抜群の航空技術を持ち、特攻隊の指導官をやっているながら、反面「卑怯者」の悪評を持つゼロ戦のパイロットの真相を調べて行く過程を描いた面白くて感動的な作品ですが、「海賊」は出光佐三の伝記です。「人間尊重」をベースとした家族主義の経営。就業規則も出勤簿も誅首もなければ、定年もない、労働組合もない、と言う異端の経営者出光佐三の生い立ちから、大出光興産を作り上げるまでのその業績を克明に追った伝記になっています。商売を始めるに当たって神戸高商の恩師が額に書いてくれた社是の一つになっていると言つ、「土魂商才」は私の好きな精神です。この場でも何度か主張しているように、経済人と言うものは金儲けだけに走ってはならない、と思えます。古来の多くの日本の経済人はその精神、所謂「武士の心」を持っていて、事業

そのものを大切に、従業員を大事にして、金儲けにも節度があったと思うのですが、最近の経済人には私利私欲ばかりの「我欲」のみが目について悲しい思いをしています。出光の社是の一つに「黄金の奴隷たる勿れ」が入っているのも嬉しいことです。山本兄がこの佐三精神に惚れ込んで出光興産を選んだのは正に慧眼であったと思います。こうした経営のやり方は、従業員が少なくて店主（出光では佐三氏のことを店主と言っていたようです）の精神が隅々まで行き届いている間は良いけれど、社員が多くなってこれが薄れて来た時にどんなことになるのか。山本兄が入社したころは既にこうした現象が起こっていたのではないかと想像しますが、実態がどんなものだったか、内部におられた経験からの話を聞きたいものです。

機械油を扱う小さな商社が始まりですが、独特の経営手法と徹底した社員の教育で急速に業績を伸ばして行く過程での、軍や官僚や統制組織に対する徹底的な反発が気持ちの良い筆致で描かれています。戦後はこれらに加えてGHQやメジャーオイルへの小気味良い抵抗の話も出て来ます。自分の事業や金儲けよりも日本の国を愛する気

持ちも見事に描かれています。石油を扱うようになってからの三代に亘る油槽船「日章丸」の活躍は有名ですが、初代「日章丸」は総トン数一〇、五二六トンで、昭和十二年に三菱重工横浜造船所で建造されました。私が知っているのは二三万トンクラスの三代目。石川島播磨重工出来ですが、当時の最大級のタンカーで、造船界でも大きな話題になったものです。

一応小説と言うことで、偽名（仮名？）を使って書かれています。丹念な調査による事実が記されていると思われる伝記なので、実名で書いてくれたらもつと面白かったろうに、と思ったことでした。

（平成二十四年十二月）

本

一 「孤愁」

この物語は新田次郎が一九七九年から毎日新聞に連載していたものだそうですが、新田次郎はその途中の一九八〇年に急逝されました。文字通りの絶筆になっていましたが、

それを三十二年後に息子の藤原正彦が書きを書いて完成させた、と言うものです。刊行されたことを聞いて以来興味があつて、是非読んでみたいものだ、と思いつつ果たせずにいたところ、玉川兄が読んだものを貸してくれたので、喜んで読ませて貰いました。

孤愁と言う題は、ポルトガル語のサウダーデと言う言葉を訳したものです。孤愁と言うと日本語では「一人でいることの寂しさ」と言った意味になります。サウダーデはこれに止まらず、色んな意味の深い寂しさが含まれていて、ポルトガル人が持っている独特な感情だ、と言うのがこの本で言いたいことのようにです。色んな場面にこのサウダーデの解説が出て来ます。過ぎ去つた幸せへの追慕や郷愁、になることもあるし、思ひ出すと心を揺すぶられるような思い出、として使われることもあります。遠くで思つて涙するのもサウダーデですし、懐かしい故郷に帰りたいたいけれど、その想いを大切に思つて帰らない、と言つた複雑な感情もサウダーデになります。場面々々で色んな解釈の「サウダーデ」が登場して、この物語は正にサウダーデを描いているのだな、と思わされま

明治の後半から昭和の初めにかけて日本に住み着いた一人のポルトガル人・モラエスの伝記ですが、モラエス自身が文筆家ですので数々の記録を残しています。自分が見た日本人の生活ぶりや日本の素晴らしさを、ポルトガルの地元紙に定期的に投稿していたようで、これが膨大な著書になって残されており、これらが貴重な資料になっています。更に、彼が外交官だったので、日本に公式の記録も残されています。これらを丹念に読み解いたり、調べたりして書かれたものと思われませんが、各章の区切りではその物語の根柢みたいなものが示されていて丹念で正確な伝記であることが判ります。勿論、記録以外の所では正に小説になっていて、楽しい読み物になっています。

モラエスはポルトガル領マカオ駐在の海軍少佐でしたが、一八八九年に日本を訪れ、日本の自然と日本人の心の美しさに惹かれて、日本鼻眞になります。日本人の道徳心や感性の高さ、清潔さ、勤勉さ、宗教に毒されず迷信深くない点など、欧米のどの国より高い精神性を持っている、と評価しています。その後、中佐に進級した後、一八九九年には日本の副総領事で神戸領事になって日本に住み着きます。およねさんと言う魅力的

な女性と結婚しますが、およねさんが死んだ後は外交官と軍人を捨てて、居をおよねさんの故郷の徳島に移し、ここで昭和四年（一九二九年）に七十五歳の生涯を終えます。

新田次郎が書いた前半を、息子の藤原正彦が書き継ぐ訳ですが、やはり本職の小説家と本業が数学者の随筆家とは大分書きっぷりが違います。前半部分がサウダーデの籠った心の部分が多い記述なのに比較して、後半部分は事実の記述とモラエスの世俗的な部分に重きが置かれ、前半で紹介された彼の精神性の高さが薄れているような気がしました。

新田次郎が亡くなった翌日、藤原正彦が怒りにまかせて、「父の無念を晴らすために、自分が完成させる」と宣言したのに対して、井上靖が「親子で書き継ぐなんて聞いたことがない。難しいだろう」と言ったそうですが、三十二年間の勉強の後でこれを完成させたのは見事だと思います。色んな意味で興味深い小説でした。（平成二十六年二月）
二、「天佑なり」

米系の銀行や証券会社で債券ディーラーをしていたと言っ経済の専門家・幸田真音が

書いた高橋是清の伝記です。高橋是清は大蔵大臣中の大蔵大臣として、私も尊敬している政治家の一人ですが、その生い立ちと業績を詳しく記した見事な伝記だと思えます。文中にも出て来ますが、是清自身が克明な日記を残し、また自分でも自叙伝を書いていく程ですから、資料には事欠かなかったでしょう。そう言えば、是清の伝記は他にも幾つも書かれているように思います。大変に興味深い波乱の一生だったし、資料が多くて取っ付き易いのが理由ではないでしょうか。

アメリカで奴隷として売り買いされた話が有名ですが、最初の部分でこの話題に触れています。極く若い頃から英語を勉強する機会を得、これをブラッシュアップするため無理に渡米しようとはしますが、その過程で誤って奴隷になる契約に署名してしまったのが事実だ、と言う話が披露されています。どうやら是清にとってはこの英語の能力が大変な武器になっていることが窺えます。勿論その才覚とか人物が生かされてあれだけ大きなことをする人生になるのですが、若い頃に習得した本物の英語が彼を支えたこと、いろいろな面から描かれています。幕末に育った是清が生きた英語を学ぶ機会に恵まれ

たと言うことは、余程の環境に恵まれていた、と言うことになりそうですが、そうした環境を自分のものにした、と言うこと自体が彼の能力と言うことなのだと思います。

十八才でお茶の水にあつたと言う大学南校（東大の前身の一つと言われます）の教師になつていますが、明治の初期と言う時代は、能力を尊び、年齢とか門閥や育ちに拘らない柔軟な世界が展開していたのかな、と思わされます。

前半は細々とした事実を羅列している感じで、少々飽きを感じたのですが、後半の日銀副総裁や大蔵大臣としての活躍の部分になると迫力がありました。前半で、関わりがあつた人との関係を詳しく書いたのは、夫々の人が後になって是清の支えになつて、ことを言いたかつたのでしょうか。極く若い頃からの伊東祐亨や森有礼辺りとの付き合いの話なんかが出て来ています。この時代にはこうした一種のエリートになる人の数は限られていたと言うことなのだろうか。ドラッカーの「傍観者の時代」を読んだ時、同じようなことを感じた覚えがあります。心理学者のフロイト、GMのスローン、キッシンジャーを育てたと言われるクレマー、ナチスのヘンシュなんて有名な人たちとの若い

頃からの付き合いが語られていて、当時は世界が狭かったんだな、と言う感想を持ったことがありました。

一度は総理大臣を務めた身でありながら、その後も何度も大蔵大臣を務めているのは知っていましたが、七回もやっています。最近、総理大臣の後で大蔵大臣を務めた人には宮沢喜一や麻生太郎がいますが、器が違う感じがします。日露戦争の際に欧州とアメリカで日本国債を売り歩いた実績や鈴木商店の破綻を契機とする金融恐慌を押さえ込むために緊急に大蔵大臣に起用され、短期間で収拾して直ぐ、一か月で降りた事実も知ってはいましたが、この辺になると書き手が経済・金融の専門家だけに、本当に迫力があります。「天佑なり」と言うこの本の題名は、明治三十七年（一九〇四年）にアメリカ人のユダヤ人の財閥シフ氏の後押しで、日露戦争に向けて発行した日本の国債の売り込みに成功した時に発した言葉から取ったものようです。

二・二六事件で暗殺される場面がプロローグの部分に出て来る辺りも工夫された書きっぷりだな、と思いました。

（平成二十六年二月）

三 「経済学は人びとを幸福にできるか」

こゝ鼻頂の宇沢弘文教授の最新作です。相変わらず宇沢節が好きで、本屋で新刊を発見するかどうかしても手を出してしまいます。この本にも従来からの主張と変わりのないことが書かれているのですが、私の波長とピッタリする感じで、実に気持ち良く読めるのです。

権威に反発する精神は持ち前のモノらしく、この本でも繰り返して述べられています。役人に対する反発、特に教育に関して文部省が持っている権威には徹底的に反発しています。この辺がリベラリストの教授の真骨頂なのでしょう。

この本で初めて、教授が大江健三郎を高く評価していることを知りました。彼もリベラリストの一人なのでしょうから、その面を評価しているのでしょう。大江は非現実的な空論を言っているだけの人、と言う感じで、私が大嫌いな作家の一人ですので残念ですが、それでも教授が評価しているならもう一度読んでみようかな、と言う気になるのですから、私の宇沢教授への傾倒の強さも窺えると言つものなのです。

新自由主義と呼ばれる市場経済主義者に対する反発は以前から何度も出て来ますが、何でも金に換算し、効率のみを求める考え方が気に入らないようです。戦争にも効率を求めるなんて考え方に反論を加えています。例えば二次大戦時にもこの連中は、どうすれば一番効率的・経済的に人が殺せて戦争に勝つことが出来るか、と言う検討していた程だったとしています。この中でフリードマンに対する反発が相変わらずなのは、これに教授の嫌いな権威主義が絡んでいるからではないかと思えます。フリードマンはノーベル賞も取った学者で、宇沢教授がシカゴ大学に奉職した頃は、シカゴ大学の経済学部部の総帥だった筈です。その頃のフリードマンの権威的な態度が気に喰わなかったのではないのでしょうか。フリードマンは極端な共産党嫌いで、例えば、ベトナム戦争の時、共産主義を防ぐためなら水爆を使っても良い、と発言したことがあった、なんて事実も披露しています。

権威に反発する気持ちが強いので、天皇制についても批判的なのですが、昭和天皇に対しては特別な思いを持っておられるようです。自分の学問が昭和天皇によって啓発さ

れた話はこれまでに何度も紹介されていますが、この本でも臨場的に披露されています。この話は以前ご披露したことがありますので繰り返しになりますが、一九八三年に文化功勞者に選ばれ、昭和天皇にご進講する機会があつたのだそうです。自分の研究をご披露している内が上がつてしまつて、自分でも何を言つていいのか分からなくなつた時、天皇が「君、君は心の經濟が大切だ、と言いたいんだね」と言われて目が開き、この考えを進めて一九九七年の文化勲章に繋げることが出来た、と言つ話です。

無制限な自由は本当の自由ではない。他の人の自由を侵さない自由が本物だと言つ主張も繰り返しなされています。私はつい以前から、理想的な世界は民主主義と全体主義の中間、資本主義と共産主義の中間にあるのではないか、と考えて来ましたが、心の經濟とはこの辺にあるのではないだろうか。宇沢教授の主張を聴いていると、その辺が感じられて、気持ち良くなるのでしょうか。この考えをもつて一歩進めると昔の日本の經濟人が大事にしていた武士の心を持つた資本主義に辿り着くのではないだろうか。株主ばかりを大事にするのではなくて、従業員や顧客、事業の継続を重視する經營が尊ばれる

べきだと思います。安倍さんが目指していると言われる「瑞穂の国の資本主義」なんて言つのもこの辺にあるのではないか、なんて考えています。（平成二十六年三月）

難しい本

久し振りで少し難しい本に挑戦しましたので、ご紹介します。

一 「資本主義の終焉と歴史の危機」 水野和夫

玉川兄のお勧めで挑戦したものです。玉川兄が時々、自分が読んだ本を紹介してくれ、勧めてくれます。落語関連の本もありますが、これは相当タフな部類の本です。現役の多忙な時間を割いて、未だにこうしたタフな本を読んでおられる兄の姿勢に感心します。玉川兄は私の本の読み方を「深読み」なんて評価してくれていますが、私は、自分の読み方は精読には程遠く、読み飛ばす癖が付いてしまっている、と思つています。ですから量は消化出来ても質が伴わず、深読みとは全く当たらない評価だと思つています。

著者は金融の世界で育つた方なのですが、にも拘らず、と言えば良いのか、その故

に、と言えば良いのか、実体経済の重要性を主張されていることには共感を覚えましたが、資本主義は利益を追求することを根本の思想としているが、世界的な利子率の低下、と言つよりゼロ金利に近い時代が続ぎ、実体経済では儲からなくなったので、儲けを確保するために金融経済に移行して来たのだ、と言っています。アメリカが自身の利益の為にグローバル・スタンダードを推進し、金融ビッグバンを世界中に広めて来た、と言つて見方をしていますが、私も橋本内閣がこれらのアメリカン・スタンダードに踊らされていた頃から感じていたことです。当時はハウステンボスの立ち上げに四苦八苦していた時代で、皆で力を合わせて新しい事業を成功させようと言つて感覚が大事な時期でしたから、競争原理を重んずるこれらの考え方には抵抗があつたのかも知れませんが、元々私の感覚には、「人を押しつけても」と言つより、「皆で力を合わせて」の方が合つていたと言つことだったのかも知れませんが。私も力が合わせて作り上げたハウステンボスの息の根を止めたのは、もっと強烈に競争原理を推進し、不良債権を厳しく追及した小泉・竹中組だったと思つています。

格差を作り出すのは資本主義が持つて生まれた性質だ、と言っていますが、この見方にも共感できます。現在のアメリカは「1%の富裕層が99%の国民を搾取している」と言われています。七〇年代のアメリカでは1%の富裕層が9%程度の富を持つていたと言われていますが、今では1%の富裕層が二五%の富を独占する格差社会になってしまっていて、格差が急激に広がっているとのこと。これは競争原理を野放しにした結果でしょう。資本主義は周辺に格差の対象がなければ存在できない、とも言っています。国内に貧乏人を作つてこれを周辺として格差の対象としていましたが、それが後進国になり、新興国になり、それが地上になくなつたら海上に周辺を求め、それでも周辺がなくなつたので、空間でありITであり、金融の世界にそれを求めたと言つのが著者の主張なんだと思います。格差の出来ない資本主義を模索しようと主張されていますが、この主張は、理想の世界は資本主義と共産主義の間、自由主義と全体主義の間にある、と言つ私の従来からの考え方にも合致します。金融の世界で一旦は繁栄しても、それは実体経済ではなくてバブルの世界なのだから必ず弾ける。バブル崩壊の繰り返しに

なつて来る。バブルの崩壊は三年毎にやつて来る、とも言われます。そしてその繰り返
しによつて資本主義が終焉を迎えると言つ見方は面白い。経済的な繁栄とか成長を無理
に求めるよつとすると却つて終焉を早め、酷い終焉を招く結果になる、と言つ見方も傾
聴すべき主張ではないかと思ひました。

リーマンショックに見られるように、金融経済が作り出したバブルによつて、多くの
人の未来の利益が失われました。同じことが自然環境の世界やエネルギーの世界にも発
生していると言つ見方も面白いと思ひます。資本主義は地球が何万年も掛けて作り出し
て来た化石燃料を数百年の内に費消してしまおうとしている。原子力発電でも何万年レ
ベルの災害を未来に遺そうとしている、と言つことは、現代の世界にはこれ以上の「周
辺」がなくなつたので、未来に周辺を求め、未来を格差の対象にしようとしているので
はないか、と言つているようです。面白い見方ですね。

ゼロ金利、ゼロ成長、ゼロ・インフレを一番長く続けているのは日本なのだから、日
本の資本主義が一番早く終焉を迎える、と言つ見方も面白い。次のシステムがどんなも

のになるのか、の提言に至っていないのが残念ですが、成長がなくても存続出来る資本主義、すなわち「定常状態」を目指すべきではないか、と言っているようです。日本的な資本主義、私が言っている「武士の心を持った資本主義」なんて言うのが次のシステムの候補になれば面白いのに、なんて考えていますか、どうでしょう？ 安倍総理が選挙演説の中で「強欲を原動力とするような資本主義ではなく、道義を重んじ、真の豊かさを知る、瑞穂の国には瑞穂の国にふさわしい資本主義の形があります」と言っていたことがあります。これなんか目指すべき方向ではないでしょうか？ 昔の近江商人は「売り手よし、買い手よし、世間よし」を「三方よし」と称して、これをモットーとしていたそうです。一番儲けを追求する立場にいる商人でも日本の商人にはこんな気概があった。これこそ瑞穂の国の資本主義ではないか、と思っっています。

仲々難しい内容なので、十分に消化したとは言いきれませんが。良かったら皆さんにも手に取って頂いて、感じられたところをお伺い出来れば嬉しいな、と思っっています。

二、「人類哲学序説」梅原猛

赤松ゼミの仲間で経済成長の是非が議論になり、その過程でこの本の名前が飛び出して来たので、読んでみようかな、と思つて本屋で探してみました。哲学書と言つので、物々しい本かと思つて、恐る恐る検索して見たら岩波新書の薄手の本だったので、買い求めて来ました。

私は、学生時代から哲学書の類は避けて来たように思います。何度か手にしたことはあつたと思うのですが、どうにも入つて行けず、自分は体育会系なんだから、こんな本は読まなくても良いや、と自ら逃げ場を求めていた面もあつたような気がしています。哲学とは本当の真理を探し求めるものだ、なんて言いながら、私が手にした哲学書なるものにはソクラテスやプラトンがこつ言つた、とか、カントやデカルトの言葉はこつ解釈すべきだ、とか、ヘーゲルやニーチェがどうしたとか、ばかりが目について、哲学者の歴史を辿つていような気がして、ちつとも面白くないな、と思つた覚えがあります。梅原教授はこの本の中で、「日本の哲学者と呼ばれる人々は西洋哲学を研究し、翻訳し

て紹介し、その研究を一生の仕事としている人が多い」と書いています。昔、私が感じたことが左程間違っていないかったことを知って少し安心しました。この辺は故川口兄の意見を聞きたかったところですね。

梅原教授は、哲学者は自分で真理を考え、自分の言葉でこれを語るべきだ、と主張され、若い頃からその考えで進んで来たので、先輩方の考え方を痛烈に批判することも多く、先輩方との葛藤がすごく多かった方のようです。この本では、デカルトに始まる西洋哲学に疑問を呈しています。有名な「我思う。故に我あり」の思想で科学を万能のものにし、科学によって自然を征服して来たため、人間は豊かにはなつたけれど、環境問題やエネルギー問題で壁にぶつかっている。「自然破壊を容認する哲学は、もはや未来の人類の哲学として通用しない」と主張しておられます。そして、ノーベル化学賞を受賞された福井謙一先生が言われたと言う「自然を征服する科学及び科学技術から、自然と共生する科学及び科学技術へと変わらねばならない」と言う言葉を引き合いに出して、全くその通りだ、と結論付けています。

日本には「草木国土悉皆成仏」と言う思想があつて、人間は勿論、生きてゐるもののみならず、草木や国土までも大事にしよう、と言う思想がある。こうした思想が人類文化を持続的に発展せしめることができるのではないか、と言う主張が結論になつてゐるようです。私はハウステンボスに来てから、「人間は地球のお邪魔虫」論者になつてゐます。ハウステンボスの現役の頃、視察に来られた地方自治体の方や学会をやって下さつた方々の団体、修学旅行生などを前にして、環境に関する講演をする機会が多かつたのですが、講演の中には必ず次のようなメッセージを挟むことにしてゐました。

「現在地球上を支配している西洋文明と言われるものは、『われ思つ、故に我あり』の昔から自然を征服・支配しようとする態度だったので、自然に対する崇敬の念が薄くなつて地球環境を破壊して来ました。その結果、人間が地球のお邪魔虫になつてゐます。そして、そのお邪魔虫が今や自身の存在を危つゝいものにしつつあります。日本の文明は、むしろ自然に溶け込むと言うか、自然と共存しようとする姿勢が強いので、自然破壊の度合いが少なかつたと思つたのです。西洋文明が入つて来る以前の、日本の自然に対する

姿勢は見事なものだった、と言えるのではないのでしょうか」

梅原教授のこの本を読んで、私の考えて来たことが、間違った方向ではなかったんだな、と今更ながら自信を深めています。

（平成二十六年五月）

槇原の完全試合

仕事の関係で知り合いになったテレビ局の人が、五月十八日の福岡ドームでの巨人／＼広島戦ナイターの切符をくれると言います。都合よく仕事に引っ掛けて行くことが出来たので、一塁側のS席で観戦していました。巨人のピッチャーが槇原。巨人が一回と二回に松井のタイムリーなどで五点を入れ、今日は巨人の楽勝だな、と気楽に観ていました。五回ごろ、アレ、槇原がまだ走者を出していないぞ、なんて言い始めたのですが、あれよ、あれよと言っている内に、とうとう最後まで一人の走者も出さない完全試合を成し遂げてしまいました。流石に最後の回は観客も興奮して大変でした。この日は長嶋ジュニアが最初から三塁を守っていたのですが、隣にいる人と、長嶋のエラーで完全試合が崩れるのではないか、なんて言っていたら、九回の先頭打者の打球が三塁目がけて飛んで行くではありませんか。これは無難に捌き、最後は一塁落合へのファールフライ

でゲームセット。万歳した槇原の嬉しそうな顔が印象的でした。完全試合は十六年振りとか、戦後十五回目だとか。滅多に出来ないプロ野球観戦で、完全試合に遭遇するなんて、一生に一度あるのかどうかのラッキーな体験をしました。

(平成六年六月)

技術立国「日本」の危機

最近、原子力発電所の数々の事故とか、新幹線のコンクリート崩落事故、東海村の臨界事故など、高度の技術に関わる大きな事故が続きました。何かオカシイのではないかと、思っていました。H2ロケットの打ち上げ失敗に及んで、これは日本と言う国にとつて、大変な事態になっているのではないか、と思うようになりました。

日本人は昔から、職人芸、技術を大切にして来た民族だと思えます。「細工は流々仕上げをこ覧じる」と言う言葉もあるように、江戸やそれ以前の昔から、職人は自分の仕事に誇りを持ち、プロとしての自覚が強かったと思います。へまな仕事をする職人は仲間から、「そんなことで良く金が取れるな」と軽蔑されたし、それだけ腕を磨くことに

熱心でした。金に糸目を付けしないで、良い仕事をしようとする風潮すらありました。大工や建具師のような、手工業的なものは勿論ですが、零戦や戦艦大和・武蔵だって、腕に誇りを持った職人さんたちの力に負うところが大きかったのだと思います。

戦後、「メイド・イン・ジャパン」が、安かろう、悪かろう、の代名詞になっていた時期がありました。これは終戦直後の貧弱な設備を使って、何とか物を作って売って行かねばならなかった時代のこと。食料にしても、エネルギーにしても、原材料にしても、輸入しなければ何もない国ですから、粗末な設備、粗末な材料の中からでも、何とか工夫して何かを作って、外に向かって売って行かねば生きて行けなかつたからです。ですから、少し力が付いて来ると、良い原材料を輸入し、これを優秀な技術で加工して輸出する「メイド・イン・ジャパン」の製品は、逆に高級品の代名詞に変わりました。鉄鋼業なんて、昔から、原料である鉄鉱石か石炭の鉱山の近くで栄えるのが常識とされてきましたが、どちらの原料も出ない日本で鉄鋼業が栄えたのは、臨海地帯に製鉄所を作ったことでした。両方の原材料を世界中から選んで買って、それを安い運賃の船で大

量に運んで来て、高度な技術力で安くて高質の鉄鋼材を作り出して、世界中に売って行ったのです。電気製品や自動車なんかは、つい最近まで、日本製は格が一段上、との評価があつて、欠陥商品が少ない、製品に当たり外れのばらつきが少ない、と信頼度は抜群で、少しぐらい高くても日本製を買おう、と言う人が多かつたと思います。

モノを作る上で、人間に求められる大切な要素として挙げられるのは、創造力とか、教育レベルとか、勤勉性とか、信頼度などがあります。手先の器用さ、何て要素もあるかも知れません。勿論、設計とか、工程の作り方など、上手く作るための段取りを考ええる部分もあります。この辺は、創造力とか教育レベルなど、頭脳の部分かも知れませんが、私はモノを作る上で最も大切なのは、実際に手を掛けて作って行く人たちのマインドではないかと思っています。良いモノを作ろうとする意識、一種のモラルです。この辺にも創造性や教育レベルが必要にはなるのでしようが、もっと要求されるのが、勤勉性とか信頼度です。いくら良い設計をし、立派な工程を考えても、これを使って現場で実際にモノを作って行く人たちのマインドがこれに付いて行かなければ、良いモノは

出来ません。毎日、手を掛けてモノを作っている職人さん一人ひとりの傍に立って、細々とした作業の一つ一つを監督している訳には行かないのです。昔、大きな船の外板の溶接部分に、溶接棒が埋め込まれているのが発見されて、大問題になったことがあります。船の外板は鉄板が溶接されて作られています。大きな船になるとこれが何万枚もの鉄板が繋ぎ合わされることになります。出来るだけ機械を使って均等に溶接する工夫はなされているのですが、手でやる部分もあります。溶接と言う作業は、溶接棒を電気やガスで溶かして、鉄板と鉄板の間に作ったV字型の溝を埋めて行って、二枚の鉄板を繋ぐ作業ですから、大変な手間が掛かります。溝の中に容量のある異物　この場合はこれが溶接棒だったのですが　を埋めておいてその上を溶接すれば、それだけ溶接棒を溶かす手間が省けます。溶接の表面は綺麗に出来上がりますから、視覚検査では合格してしまつて、レントゲンの検査をしない限り分らないのです。ところが鉄板同士はシッカリくっ付いていないのですから、大きな事故の原因になる。こうした先端の作業は、作業者個々人を信頼する他ないのです。新幹線のコンクリート崩落事故についても、

同じように先端の作業者の、仕事に対する意識の不足が原因と言えるのではないかと思われれます。作業の間違いが起こらないように考え、手を打つのは管理者の仕事であり、設計者や工程を組む人たちの仕事でしょう。工事が正しく行われているかどうか、をチェックするのも管理者の仕事です。フル・プーフなんて、どんな馬鹿がやっても誤った作業にはならないようにする、なんて考え方もあります、でもこんなものに守られて仕事をするのがプロの作業者なんだろうか。

日本の技術は、個々の職人さんの名人的な手腕に支えられて来た、と言う見方をする人もいます。システムの技術でモノを作り出す力が弱かった。確かに、この見方は当たっているのかも知れませんが、個々の作業の国際的コンテストで日本人が金メダルを独占した、なんて話は聞きますが、宇宙ロケットの開発、なんて膨大な技術の集積で、キチンとしたシステムが出来ていないと出来ないような大きな事業はむしろ不得意なのではないだろうか。

確かに、先端の作業者の意識や感覚が、日本の技術レベルを支えて来たのは事実だと

思います。改善提案、何て言うのは、現場の作業者が、少しでも良いモノを作るため、少しでも能率の良い作業をするために日々考え、提案してそれを組織の中に取り入れて行こうと言うのですから、正に日本的な発想と言えるのではないのでしょうか。クオリティ・コントロール（ＱＣ）の思想はアメリカから来たものだと言いますが、これをＴ（トータル）ＱＣに高めて成果を上げて行ったのは、日本の改善提案の思想だったと思います。上から監督するシステムをシッカリ作って良いモノを作って行こう、と言うよりは、作業をする人全員の工夫と力で良いモノを作って行こう、と言う意識です。これは単一民族の日本人にして可能なことだったのかも知れません。今でこそ、日本にもエスタブリッシュメントが出来上がり、生れつきの上下関係的なものが出て来ているのかも知れませんが、少なくとも我々が育った時代は、生れつきのスタートラインは誰も彼も同一線だったと思うのです。例えば、三菱重工には養成工制度と言つのがあって、優秀な中学出の人を採用して職工学校に入れ、優秀な職人を作っていました。私の中学時代、家庭の事情でそれ以上の進学が出来ない人は、この養成学校を狙っていました。

学年で一番とか二番の優秀な人でないと入れなかった。ですから三菱の養成工になるのは一つの誇りでした。会社に入つて見ると、この人たちは誠に優秀な人たちで、三菱の技術を支えている人たちでした。先端の作業者に止まらず、管理者になつて行く人が大半でしたし、工場から労働組合の役員になつて出て来る人たちは、殆どがこれらの人たちでした。私は本社から事務職の立場で組合に出たのですが、この人達と付き合つてみると本当に優秀で、組合に関係していた当時、私は、三菱で一番優秀なのが、この中学出の養成工出身の人たちで、次が、真面目に勉強してそのまま入社した高校出、一番ダメなのが、高校を出るまでは優秀だったかも知れないけれど、その後の四年間をブラブラ過ごして来た大学出だ、と本気で思つていましたもの。

アメリカやヨーロッパの場合、上に立つ人と下で働く人の区別が、比較的ハッキリしていると思います。外国人の労働者が多いと言つ所為もあるのではないのでしょうか。これらの労働者が管理者になつて行く可能性は誠に少ない。とすると、個々の作業者は、良いモノを作るつ、と言つより、如何に楽をして一日を過ごすか、と言つ方向に考える

のはむしろ当たり前のことではないか。これらの人たちの意識に頼って組織全体を良くして行こうと言う考えは成り立たない訳で、どうしても上からの管理と厳しい監督で組織を運営しようとするのは当然のことだったのではないだろうか。

私が最近の事故を見て、大変なことだ、由々しき事態だ、と思うのは、日本の先端の作業者、言わば職人さん達に、仕事に対する意欲とか、技術に対する誇りとか、がなくなってしまうのではないか、と言うことです。能率を重んずるあまり、管理で押さえようとすると西欧型の方式が取られつつあります。その過渡期の弊害が出て来ているのかも知れません。組織の中で、職人芸が邪魔にされるような風潮が出て来ているのに、シツカリした管理の方式が定着していない。その狭間の時期かも知れませんが、

もう一つ、忘れてならないのが、所謂リストラ、と言う奴。金が掛かっても良いモノを作る、と言う姿勢がなくなると、如何に安く作るか、の方に重きが置かれ過ぎて来ているのではないだろうか。私が勤めていた頃の三菱重工に対するお客の評価は、「技術的には全く問題がなく、信頼が置けるけれど、唯一の難点は製品の値段が高い」

と言うことでした。ですから、我々営業の務めは、製品の質の高さを如何にアピールするか、それをお客にどう説明し、理解して貰って、少し高いのを承知で買って頂くか、と言うことでした。勿論、もっと安く出来ないのか、と工場とのせめぎ合いはやりましたが、「三菱である以上、質をこれ以下に落とす訳に行かない」と言う抵抗に遭うのが常でした。三菱の技術屋としての誇りと言うか、襟度があったたのではないかと思えます。当時は営業の立場で、売るのが大変で苦しいものですから、「何故そんなに煩いことを言うのか」「少しぐらい質を落としたって、安くすれば良いではないか」「過剰スペックではないのか」なんて苦情を言うことが多かったのですが、これらのせめぎ合いは、安くて良いモノを作り出して行く努力に繋がることになり、これはこれで意味のあることだったと思います。十年ほど前から三菱重工もリストラを強烈に進めて来ています。リストラで最初に被害を受けるのは下請けさん達で、仕事は取り上げられる、値段は叩かれる、で地元の評判はガツクリ落ちました。それが進んで来ると、効率化、人減らし、特に管理部門の人減らしと言うことになります。最近、三菱重工が一九六四年の合併後

初めて赤字を出す、と言うことで話題になっています。私は、株、と言うと、汗を掻かないで儲けようとする、と言う印象が強くて好きになれず、他社の株は持っていませんが、勤めている間は社員持ち株会に入って、自社の株だけは毎月の時価で少しずつ買い貯めていました。退社の時はかなりの株数になっていたのです。一時は一五〇〇円位まで行ったので、ひと財産になると思っていましたが、最近では四〇〇円を割って三〇〇円に近付いています。四分の一以下です。貧乏人にはお金は回って来ない、ということなのでしょう。嗚呼・・・(閑話休題)

聞いてみると、三菱重工でも技術力の弱体化が表に出て来ているように思います。設計の力が弱くなって、約束通りのモノが出来ないでクレームの対象になる。工程が混乱して納期が守れない。やり直し工事で無駄なコストがかかって赤字になる。船や発電機を作っている長崎の工場で、設計や管理部門が強かった昔はこんなことは絶対にあり得ないことだったのです。これは私の想像ですが、H2ロケットの事故も、名古屋の工場が絡んだ部分が大きかった筈ですから、何かこの種の欠陥が表に出たのではないだろう

か、と思っっています。原発の事故についても、神戸の工場が全く関係がない、と言いつけるのだろうか。リストラのやり過ぎで、技術の力が落ちている。良いモノを作ろうとする意欲が衰えて来ているのではないだろうか。

日本は輸出のし過ぎだ、貿易黒字の溜め過ぎだ、何て言う人がいるけど、日本は資源のない国ですから輸入に頼らないと生きて行けない。ですから、シツカリした技術力に支えられた信頼度の高い製品を作つて輸出して、外資を稼いでいかないと生きて行けないのです。その技術力に疑問を持たれるような風潮が現れている、と言つことは日本にとつて大変なこと、由々しき一大事だと思っっています。

(平成十二年一月)

「オレオレ詐欺」異聞

高校の同窓会でのカナダ行のため上京中の九月のある日、ケータイ電話に電話が掛かりました。「琴海町(長崎近郊の町)の病院ですが、奥さんがママシに噛まれたのでご連絡します」と言います。畦道を歩いていたら突然噛まれた、とか、毒が全身に回つて

危険な状態にある、とか、意識がどうだ、とか、ゴチャゴチャと説明を始めたのです。家内が田舎の畦道を歩くなんてことは考えられないし、これは流行の「オレオレ詐欺」に違いない、と思いました。どんなことを言うのか、と興味があつたので、暫く付き合つていたのですが、バカバカしくなつて来るし、腹が立つて来て、「オレオレ詐欺なんだろう。バカにするな」と珍しく怒鳴つて電話を切りました。切る直前に先方が「さんのお宅ではなかつたのですか」と言つたような気がしたのですが、これもごまかしの一部なんだろう、と思い、直ぐに家内に電話したら、何でもない、と言つことなので、「やはりオレオレ詐欺だつたんだ。俺をオレオレ詐欺に掛けようとするなんて馬鹿にするな」と、引つ掛からなかつたことに満足してそのままカナダに出掛けてしまったのでしたが……。

最後に言つた「さん」が頭に残つていて、ハウステンボスと一緒に仕事をし、お嫁に行つて名前が変わつた女の子の中に、この名前があつたことに旅行中に気が付きました。若しかしたら本当の間違い電話だったのかも知れない、と思い始めたら、気にな

って気になって、帰国したらすぐに確かめてみよう、と旅行の間中思い続けていました。ケータイに受けた時の電話番号は、何かの時に役に立つかもしれない、と思って残してありましたので、帰国した翌日、その番号に電話して見ましたら、「琴海町町立病院です」と言う返事が返って来ました。「実は、二週間ほど前にコレコレこう言うことがあったんだけど、その日にママシに噛まれて入院した人がいますか」と誠に妙なことを質問する羽目になりました。半月も前のことなので、調査に時間が掛かっていましたが、「確かに　　さんはその日に入院して、一昨日退院されました」と言うではありませんか。本当の間違い電話だったのです。病院の人も相手を確かめてから話を始めてくれたら、こんなことにはならなかったのに、とは思いましたが、怒鳴りつけてしまったのは事実です。「そちらに怒鳴られるような目に遭った人がいる筈だから、良く謝っておいて下さい」と平身低頭せざるを得ませんでした。

早速ご本人に連絡して、「酷い目に遭いましたね」と言ったら、「どこから聞いたのですか」とビックリしていましたが、二週間入院して一昨日退院したのは事実。お里帰り

して母親と暗い田舎道を散歩していて、誤ってマムシを踏んでしまったのだそうです。病院に担ぎ込まれた時は意識も朦朧としていたが、自分のケータイを誰かに渡して、「主人に連絡してくれ」と言ったのは覚えていて、と言います。どうやらご主人の電話番号と私の電話番号が近くに並んでいて、病院の担当者が間違えてボタンを押したらしい、と言うことが分かって来ました。本人は三日ほど人事不省だったそうですが、今はスツカリ回復して後遺症もなく、今日は車の運転もした、と言っていましたから、不幸中の幸いだったと言えるでしょう。

この病院の担当者は善意の連絡をしたのに、不幸にも相手が悪かったので怒鳴りつけられる羽目になりました。人を疑いの目で見てはならない。「即刻お金を振り込め」と言われるまでは疑いを持つてはならない、と言うことです。今回は私の早とちりから善意の人に不愉快な思いをさせる結果になりましたが、私ももう少し修行して「気立ての良い人」になる努力をしたいと反省しています。それにしても、あれだけ騒がれ、警察や金融機関からも繰り返し注意されているのに、未だにオレオレ詐欺の被害が百億円の

単位で発生しているのが信じられない思いです。余程お金持ちのお年寄りが多いと言っ
ことなんでしょうか。
(平成十六年十月)

列福式

二〇〇八年十一月二十四日に長崎でカトリック教会の列福式が挙行されました。列福
式とはカトリックの信仰で、信者の尊敬を集め模範となつて殉教した人にローマ法王が
福者の称号を与える儀式です。最も高い位は聖者ですが、福者はその次に位置づけられ
ています。

この式典が長崎で挙行される切っ掛けになつたのは、一九八一年に来日された前ロー
マ法王ヨハネ・パウロ二世が長崎に来られた時に「日本は殉教者の国であり、彼らを顕
彰するように」と言われたことに始まると言います。その後、日本の教団が準備を進め、
〇七年六月に現法王ベネディクト十六世が列福を決めたのだそうで、日本の教団が主導
した列福式は初めてのことなのだそうです。前法王の発言から二七年を要しています。

歴史あるローマ教会のやることは流石に時間が掛かるものです。

この福者の候補者に、私が少し勉強した天正遣欧少年使節の一人、中浦ジュリアンが含まれていることを知って、どんなことをやるのか観に行ってみようかな、と思いました。最初は、行ってみようかな、の程度だったのですが、高校同期で信者の友人が詳しいことを教えてくれ、入場用のタグを送ってくれたりしたので、本気で行くことにしました。この入場タグは各地の教会で発行することになるので、私のは大阪の教会のタグでしたので、大阪地区の信者の皆さんの間になりました。この式典は長崎の県営野球場、長崎ビッグNスタジアムで挙行されたのですが、正式の名称が「ペト口岐部と一八七殉教者列福式」とあります。ペト口岐部とは何者だろうか、と疑問に思っていたのですが、偶々その直前に鹿児島に行った時、初めて乗った九州新幹線の中で、この人を紹介した記事に接しました。

ペト口岐部カスイは一五八七年に豊後の国東半島に生れています。八七年と言うと、当時キリシタン大名として豊後一円に勢力のあった大友宗麟が亡くなった年で、秀吉が

バテレン追放令を出した年です。ペトロ岐部はキリシタン一家に生れ、十三歳の時、有馬のセミナリオに入学します。天正遣欧少年使節の四人の後輩に当たることになります。一六一四年に徳川幕府が宣教師の国外追放令を出し、少年使節の一員原マルチノがこの時にマカオに追放されていますが、同じ時期にペトロ岐部も同じくマカオに追放されるのです。同じ船に乗せられていたでしょう。ところがこの人はこれを機会にローマへ行こうと考え、マカオにいた宣教師の助けを得て一七年にマカオを出奔するとインドのゴアに向かいます。ゴアはその当時アジアのキリスト教の拠点になっていたところですが、この人の凄いのは、ここから聖地エルサレムを経由して陸路でローマに向かうことを考えたところです。キャラバンと一緒にペルシャの砂漠を横断し、パキスタン、イラン、イラク、ヨルダンを通って、一年半掛かってエルサレムへ。ここから巡礼船に乗ってイタリアに向かい、キプロス島、クレタ島、トリエステ、フィレンツェを経てローマに辿り着いたのは二〇年の六月頃だったと言いますから、マカオから三年以上かけて歩き通したと言うことになります。ここで三十三歳にして司祭になりますが、二年後の二二年

に布教の目的で日本に帰ることを決め、ゴア、マカオ、マニラを経て三〇年に帰国します。この間、何度も嵐に遭遇して難破の目に遭い九死に一生を得て薩摩の坊津に上陸したそうです。その後、東北を中心に布教活動をしますが、捕らわれて棄教を迫られ、江戸で拷問を受けて一六三九年に殉教するのです。当時の宗門奉行井上政重が残した調書に「キベヘイトロはコロび申さず候」と記されていることが知られています。

これに対して中浦ジュリアンの方はこれほど劇的ではなく、使節の一員としてローマには行ったものの四人の使節の中でも一番手のかかる凡庸な人と言う評価を受けています。法王への謁見も高熱のため果たせず（若桑みどりさんの数合わせ説は、クリスチヤンの間では流行っていないようです）、そのため逆にグレゴリオ十三世の特別の好意を受けたことが特筆される程度で、帰国後も中々司祭になれないほど成績も凡庸だったらしい。それでも司祭になって布教活動を始めてからの活動は中々のものだったようで、一六一四年の宣教師追放令の後も潜伏して布教活動を行い、三三年に捕えられて棄教を迫る拷問を受けて、一緒に捕えられた当時宣教師の大物だったフェレイラ神父が拷問に

耐え切れず棄教したにも拘らず、そのまま殉教しています。「私はローマへ行った中浦神父である」と言つて捕えられたと伝えられています。

宗教にはおよそ興味もなく信心心もない私ですが、こうした歴史上の好奇心を満たす目的で列福式を見学に出掛けたわけです。行つてみると会場は大変な人。全国各地から教区毎にツアーが組まれていた様子で、沢山のバスが続々と着いて参列者は三万人を越えたそうです。ローマ法王庁から法王代理が出席。アジアの国々からの代表も来ています、日本全国から大勢の大司教やら司教やら司祭たちが五〇〇人以上来られたとか。どうやら参加者は殆どが信者の方ばかりで、野次馬として見物に来た、という不心得者は私ぐらいのものだったのではないだろうか。儀式なのだから、と一応ネクタイを締めて行つたのがせめてもの礼儀、と言つことになるのでしょうか。生憎、かなり強い冷たい雨が降つて来ましたが、傘を差す人なんか一人もいません。ビニールの合羽を被つて静かに濡れてお祈りをされている様子でした。私は事前の注意に従つてゴルフ用のレインウェアを準備していたので、楽勝でした。

野球場のホームベースの辺りに祭壇が設けられ、グラウンド一杯にパイプ椅子が並べられて、グラウンドに入れる人は特別な人たちみたい。普通の人たちは客席からの参列で、私がいたのは左翼席の真ん中でした。

一生に一度あるかどうかの貴重な経験で、これ以上ない宗教行事の雰囲気の中にいるのに、最後までその雰囲気になれず、傍観者の野次馬でした。キリスト教の行事は歌が多い。何かやっては賛美歌を歌っていました。周りの信者の方達は皆知っているらしく唱和して歌っていました。こちらは全く分かりません。でも簡単なメロディーの歌が多いので、何度かリフレインされるのを聞いていると付いて行くことが出来そうな気がします。アフリカの僻地なんかでの布教の際に盛んに歌を歌っている場面が映画なんかで出て来ますが、歌と一緒に歌うことによって連帯感が生れるものです。これも布教活動の作戦の一つなんだろうが、なんて不遜なことを感じたりしました。それとやっていることが大仰。神父様がそれほど大事で立派な人なのか、と思わされます。教会が強くなり過ぎたことに反発した宗教革命の理由が判るような気になります。同じ神様を崇

めるのに、枢機卿から大司教、司教、司祭やら、聖人、福者なんて順位をつける必要があるのかどうかにも疑問を感じました。

ペトロ岡田東京大司教が代表して一八八人の列福をラテン語で要請し、これに対して教皇代理のマルティンス枢機卿がベネディクト教皇の認可を伝え、列福宣言がなされま

す。教会の公用語は今でもラテン語なのでしよう。私はラテン語を初めて耳にしました。

日本人唯一の枢機卿ペトロ白柳神父の説教がありました。この中で、日本で布教が始まってからの殉教者は、名前が分かっているだけで五五〇〇人、名前の分からない人を含めると二万人を越すと言っていました。当時の日本政府の弾圧・迫害の強さ・残酷さは世界に例を見ない、とのこと。これまでに日本で聖者になった人は長崎の西坂で殉教した二六聖人を含めて四二人、福者はこれまでに二〇五人いるそうです。今回は一六〇三年から三九年までの殉教者の内から一八八人が選ばれています。家族揃っての殉教者が多いのが特徴で、女性が六七人、四歳までの幼児が二九人も含まれているとのことでした。

幼児が殺されるのは痛ましいことではありますが、これは言わば親へのお付き合いたいなもの。一歳の赤ん坊が「信者の尊敬を集め模範となった」として福者に列せられると言つのも変な話だな、なんてつまらないことを考えました。

最後に参列者全員に聖体が拝領される儀式が始まりましたが、野次馬の私としてはこれだけはご遠慮して席を離れました。

死んでも信仰を棄てない、という生き方（死に方）は誠に立派なことかとは思いますが、私には死んでも信念を曲げない、と言つ心情は理解できるような気がするものの、それが信仰と言つことになるとうごにも理解ができません。元々信仰心が薄い上に、歴史上、戦争の原因として一番多いのが宗教に拘わる問題ではなかったか、なんて印象を持っているものですから、どうしても宗教には反発を感じてしまいます。どうやら私は天国には入れて貰えない人のようですな。

（平成二十年十一月）

宗教の話

「珊瑚」も（ ）と（ ）を合わせて五〇〇号を超える発行回数となっていていますが、宗教に関する問題が話題になったことは殆どなかったと思います。欧米だったらこの種の同人誌には必ず宗教の話が出て来ていたのではないかと思うのです。この辺の感覚は日本人特有のものではないでしょうか。私の記憶では、極く初期の頃、「神様ってなに」と言つて題名で故岡崎がそれらしきものを書いたことがあつたと思います。珊瑚諸兄姉には特別の宗教に帰依されている方はいないと思われるので、私が最近考えさせられていることをご紹介します。この種の議論はこうした場合では出さないのが礼儀ともされていますので、若し、差し障りがあつたらお詫びしますし、逆にご意見・ご教示を頂ければ有難く存じます。

過去に、色んな方から何度かキリスト教への入信を勧められたことがありますが、これらには全く興味を示さなかつたので、これまでは先方も早々に諦めてくれていました。ここへ来てかなり熱心に入信を勧めてくれる友人がいるのです。この人は旧来のカソリ

ツクヤプロテスタントの宗派に飽き足らず、「幕屋」と言う無教会派の一派に属している伝道にも力を入れておられ、自分自身が方々で伝道活動をしている類の人です。この人にお断りの手紙を書いたり、メールのやり取りをしたり、お話をしたりする過程で、自分の考えを少し整理してみたので、ご紹介しようと言う訳です。

まず、宗教と言うと、愛とか平和とかのイメージがありますが、古今東西の歴史を見ると宗教ほど戦争や紛争の原因になっているものはないと思うのです。キリスト教は生れて直ぐの頃から迫害に晒されて来ましたし、イスラム教は「右手に剣、左手にコーラン」の教えに従って、布教が進められて来ました。十字軍は異教徒退治の戦争ですし、キリスト教内部での数々の宗教戦争、パレスチナの聖地を巡る争いからアイルランド紛争、イスラム教内部の宗派間の争いなど枚挙の暇がありません。七〇〇年以上に亘るスペインのレコンキスタ運動だって、宗教戦争の一種でしょう。特に一神教の宗教が戦争を引き起こした例が多く、宗教は平和を齎すものではないのか、と言う疑問すら持っています。宗教がなかったら、世界はもっと平和だったのではないか。極端な言

い方ですが、日本にもキリスト教が入って来なかつたら、悲惨な迫害や殉教の歴史はなかつたのではないか、と思うのです。自分が正しいと思う宗教を信じるのは自由ですが、それを無理に広めようとするとところから紛争が起こるのではないだろうか。私に言わせれば、自分が信ずるのは勝手だが、それを人に勧めるのは余計なお世話なのではないか、と言うことになります。クリスチャンの皆がマザー・テレサだつたら紛争は起こらなかつたのではないか、なんて考えています。

この言い方に対しては、勧誘してくれた友人も流石に反発を感じたらしく、「本当の宗教は平和を愛するものだ」、「戦争を起こしたのは信仰が浅い人達なんだ」との反論がありました。 「十字軍なんて、キリスト教の最高指導者のローマ法王の命令で異教徒退治に出掛けていたではないか」と言う反論には答えて貰えませんでした。伝道が戦争や紛争を引き起こす、と言う私の意見については、伝道者のこの人にとっては許せないことだつたようですが、キリストも宣教命令を出している、とのことで、信者には、常に伝道・布教をせねばならない、と言う使命があるようでした。確かにキリスト教徒に

とっては、布教は大事な仕事なのでしょう。アフリカの奥地にまで潜り込んで劣悪な環境の中で伝道に努めたり、日本の過酷な禁教令の下で迫害に耐えながら布教に努めていた宣教師の姿なんて、普通の我々から見ると、何のためにそんな苦勞をしているのか、と全く信じられない思いです。

私がキリスト教に対して反発を感じる理由は、まず入信の条件として、処女懐胎やキリストの復活、聖霊の存在などの奇跡を信じることを求められるのが気に入りません。あんな奇跡は信じると言う方が無理だと思っています。それと数年前に長崎での列福式（福者に列せられるための儀式）を見物（宗教儀式を「見物」に出かける、なんて全く不遜な行為ですが・・・）に行った時に感じたことですが、とにかく「我々の罪をお許し下さい」から入るのも気に入りません。確かに我々は数々の悪いことをする罪深い人間だとは思いますが、何も「お許し下さい」から入ることはないと思うのです。

宗教と言うのは、やはり死後の世界を恐れるところから生まれるのではないだろうか。私は前々から感じているのですが、死ぬ瞬間は怖いだろうな、苦しいのは嫌だな、とは

思うけど、死後の世界のことには心配したことがありません。天国や地獄なんて存在せず、死ねば無になってしまふ、と単純に考えているようです。生前に悪いことをすると地獄に落とされると言う話は分からないでもありませんが、天国に入れて貰うために良いことをしよう、とは思わない。これでは本末転倒のような気がします。ましてや信心をしないと地獄に落とされる、なんてトンでもない話だと思えます。これでは子供を塾に行かせないと入試に失敗するぞ、と言う脅しと同じ種類の恐怖産業ではないか。無神論者の合理主義者みたいですが、合理主義者の筈の偉大な科学者達の中にも熱心なクリスチャンがいたのを見ると、それ以上の何かがあるのかな、と思うこともあります。私も神様の存在を否定している訳ではありません。大体、地球がこんなに絶妙のバランスの中に存在すること自体が奇跡だし、その中に人間がそれ以上の絶妙のバランスの中で存在していることも神様でなければ出来なかつたことだと思っています。

私が宗教と言うより、旧約聖書に興味を持ったのは、バチカンのシステイナ礼拝堂に行った時、ミケランジェロによって天井一杯に描かれた「天地創造」の壁画を観てから

のことです。キリスト教を最初に迫害し、キリストを十字架に架けたのは、ユダヤ教の宗教家達だったのですが、旧約聖書はユダヤ教の聖典だったはずです。その旧約聖書の冒頭に書いてある「天地創造」が何故、キリスト教の最高の礼拝堂の天井に描かれているのか、に疑問を持ったのです。旧約聖書については解説書も幾つか読んだし、カトリック教会の司祭さんが主催する旧約聖書の勉強会にも参加して旧約聖書自体も一部読んでみました。司祭さんと言う人は、信者とキリストの間に立つ人と言われているだけに、物凄い勉強をして来た人だと思います。私が付いた司祭さんはアルゼンチン人の比較的若い人でしたが、日本語は全く不自由なく喋れ、ラテン語やギリシャ語も解します。ヘブライ語の聖書も持っていました。修辞学やディベートも学んで来ているのでしょう。私なんか吹っ掛ける程度の議論には十分対抗できるだけの理論的裏付けを持っていました。若干、「アー言つと、コー言つ」的なところはありましたが、勿論、日本語での議論です。昔のカトリック教では、一般の信者は聖書を読むことが許されず、ラテン語で書かれた聖書が読めるのは牧師や司祭のみだったと聞いています。これらの牧師達

が神様と人間の仲介者になる訳で、そうなる一般的な信者にとっては牧師さんが神様と
言うことになる。それも良いけど、その連中が神様の名を借りて勝手なことをやり始め、
ローマ法王庁すら、相当腐敗していた時期があったと聞きます。その腐敗を取り除き、
ラテン語の聖書をドイツ語に翻訳して、一般の信者が直接聖書を読めるようにしたのが
マルティン・ルッターの宗教改革だったと記憶します。

旧約聖書を読んでみると、とにかく「神を信じる」が全面に出て来て、その信仰の深
さを試す場面ばかりが出て来ます。神様はサディストではないか、と言いたくなるほど
です。そして、信仰が十分に深くないと、厳しい罰に晒される話ばかりが目について、
こうなると神様が酷い焼餅焼きに見えて、どうにも共感出来ませんでした。旧約聖書は
ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖典なのだそうで、天地創造の神は新約の神でも
あるので、この絵がシステイナ礼拝堂の天井に描かれていてもなんら不思議はないのだ
そうです。で、旧約聖書の勉強会も昨年中断して中途半端なものになっています。

カソリックで一番気に入らないのは、豪壮な教会です。欧州に行くとそこら中に立派

な教会があつて、美術品で飾られ、物凄い宝物なんかが表示されています。観光で見せて頂くのは誠に結構なのですが、見せて頂く度に、教会にお金を貯めてどうするんだ、と言う疑問を持ちます。当時のお金持ちが「自分を地獄に落とさないでくれ。天国に連れて行つてくれ」と言いながら寄進でもして造つたものなのでしょうが、豪壮な教会を訪れる度に、教会にお金を貯めてどうするのか、それだけの余裕があつたら貧しい人や困っている人を助けて上げれば良いのに、と思つたものでした。

この人が勧める「幕屋」と言う会派は、教会を作らない主義だと聞きました。旧約聖書を読むと、迫害を受けながら放浪していたユダヤ人たちが、預言者モーゼが神様から授けられた「十戒」が刻まれた石板を持ち歩き、この石板を納めていた粗末なテントが「幕屋」と呼ばれていた、と記されています。この点にだけは共感が持てるので、「入信するなら幕屋にします」と言うことにしています。こうした議論を少しやったので、暫くは勧誘の圧力を受けないで済むのではないか、と思つています。

宗教と信仰は全くの別物だ、と言う人がいます。私が興味を持っているのは、飽くま

で「宗教」であって、「信仰」に到達するまでには大分時間が掛かりそうですし、むしろ到達出来ないのではないかと思っています。

(平成二十四年三月)

ルーパー鳩山首相

大野木兄・茂木兄へのコメント

偶々ご両所とも鳩山政権に対する疑問を書いておられます。私も全く同感ですので、私のコメントを書いています。

民社党政権が出来、鳩山首相が誕生して直ぐに疑問を感じたので注意して見えています。あの人は何一つ責任を持って決めようとしません。自分で決めたことが一つでもあったらどうか。友愛とか、皆さんのご意向を考えて一番良い方法を模索する、とか精神論ばかりで自分で泥を被ろうとしない。これでは組織のトップになる資格はない。組織のトップをやった経験もないのでしょうか。それがいきなり国のトップだって……。酷い人を総理大臣にしてしまったものです。日経は完全に批判的だし、文芸春秋も同じく。

私は朝日新聞は手にしたくもないので、読んでいませんが、あの変なペンの偏向新聞でさえ、最初は持ち上げていたものの、流石に最近は批判的になって来ている、と聞きま
す。佐野真一と言うノンフィクション作家が「鳩山一族 その金脈と血脈」と言う本を
書いて文芸春秋から新書版で出しているのを読んでみましたが、面白い。弟の邦夫氏辺
りを引つ張り出して、ご本人の生い立ちや歴史を紐解いていますが、無責任な宇宙人振
りが浮かび上がって来ます。一番心配なのは外交関係。今の時代に核を持たない軍事的
な独立なんてあり得ないと思います。ところが、日本は国内に強烈な核アレルギーがあ
る上に、周辺諸国からガチガチの棒を嵌められている。日本が核武装すると言った時に
一番反対するのはアメリカだろう、と言われていた程です。日本の技術力を高く評価し
て、それを恐れているからです。となれば、情けないけど他の国に守ってもらう他はな
い。それを「米軍の基地を『最低でも県外』に移設する」なんて、見通しもなく出来も
しないことを言つて、邪魔者扱いするばかりか、国内を纏めきれないで、問題のお尻を
アメリカに持つて行く、なんて全く恥ずかしい話です。国同志の約束事を政権が変わつ

たからと言って反古にして良いとは思えません。オバマ大統領との会談で「Trust me」なんてバカなことを言っている。特にアメリカは「Fairness」を重んずる国柄、オバマ大統領が「騙された」と思ったら手酷い圧力を掛けて来るのではないかと思います。圧力を掛けられれば日本には必要以上に反発が起こるでしょう。日本国民の反米感情が酷くなる。收拾の出来ない事態に追い込まれるのではないか。小沢や鳩山がその辺を狙って、意識的にこんな動きをしているのかも知れないけど、鳩山にはそんな深い考えはないでしょう。単なる意気地なしだと思っています。自分が決められないことへの理由付けや引き伸ばしの理由に連立政権を使っている。意気地なしの上に卑怯者でしょう。アメリカでは彼を評してルーピーと呼んでいるそうです。ルーピーとは最低の愚か者と言う意味。日本の首相がルーピー呼ばわりされるなんて全く情けない話です。日本国民はこんな人を首相にしてしまったことを恥じねばなりません。

小沢は完全に闇將軍を演じていると思います。こうした役割が彼には一番居心地が良いのではないか。責任は他の人に取らせて自分は影で権力を握っている。これで参議院

戦で民社党が勝つたら、完全にファッショになるのではないかと危惧します。民主主義の名を借りたファッショ。ナチズムと同じです。陳情の一本化、六〇〇人の訪中団、宮内庁長官に対する恫喝など自分の力を誇示しようとするファッショの意図が見えて来ています。怖いことだと思います。中国にペコペコしているけど、中国の覇権の下に入っていくなんて、考えただけでゾッとします。中国がやって来た周辺民族に対するやり方が、日本に向けられることになるでしょう。参議院戦で民社党が勝つたら、少なくとも三年間はこんな人に抑えられる国になる。国民が賢くなつて参議院戦では民主党に勝たせないようにするのがせめてもの抵抗なのではないだろうか。

(平成二十一年十二月)

東日本大震災

大変な災害でした。皆さまのご関係の皆さまに大事はなかったでしょうか。これに関連して感じたことを幾つか。

一・申し訳ないけど、当地長崎では地震の揺れは感じられないほどでした。実は私はその時間にゴルフをやっていたのですが、終わってから携帯電話に、茅ヶ崎の実家で地震に遭った家内からのメールが届いていることに気が付き、ゴルフ場の人にテレビを点けて貰ってヤツとこのニュースに接したほどです。家内が不自由な人の多い実家にいて上げられて良かったな、と思いました。相模原に住んでいる娘一家が一番の心配でしたが、既に電話は通じず、間接的に無事が確認されたのは午後遅くなってからのことでした。一番酷かったのは、福島に住んでいる娘の連れ合いのご両親のところでしたが、これも夕方までに間接的に無事を確認。直接話が出来たのは三日後でしたが、人身には被害はなかったものの、屋根瓦が全部落ちたとのこと。幸い雨が降って来る前にブルーシートで屋根を覆うことが出来たようでした。

二・それにしても情報社会であることを再認識させられました。ゴルフ場にいる誰も、この時点ではこのことを知らなかったので、真っ先にテレビを点けて貰ったのですが、各地の津波の凄まじさを報じる動画の多かったこと。九・一一テロの時に、トレ

ードセンター・ビルに激突するジャンボ機の様子を二機とも撮影した報道にも驚かされましたが、これと同等か、それ以上の情報力の凄さを感じました。津波の場合、来ることが予想出来るので、撮影の準備が出来るということなのだろうか。

三・未曾有の災害とは言え、この狭い日本でもこんなときに全く様子が判らなくなる地域があることに驚かされました。未開の土地でもなく、国土の隅々までが開発されているのにこんな事態になるのだろうか。どうやら電気が潰れると通信手段がなくなる、と言うことらしいのですが、文明とは脆弱なものだと言うことを感じました。

四・その中で、日本国民はまだまだ捨てたものではない、と言うことを感じました。給水を待つ長蛇の行列に静かに並んでいる人達、ヤツと開店したスーパーの前で、お行儀良く並んで入店の順番を待っている人達の姿を見て、日本人の素晴らしさと美しさを見た感じがして、嬉しくて涙が出ました。どこかの国なら、我先に、自分さえ良ければ、の暴動や略奪が起こっても不思議ではなかったと思うのです。外国の人達にもこの点は感じられたようでした。外国から届いたユーチューブの動画をメル友の皆さま

んにはご紹介しましたが、このような大きな被害に対する日本人の冷静な対応や自
心、連帯、勇気を高く評価し、むしろ驚きを以って受け止めて、Pray for Japan. We
are with you. 頑張れ、のメッセージが数多く寄せられていました。天皇もお言葉の
中でこの点に触れておられましたね。フランスの詩人が昔、「私はこの民族だけは滅
びて欲しくないと思う民族がある。それは日本民族だ」と言ったことがある、と言
います。「逝きし世の面影」に描かれた日本人の心がまだ残っていたと言っことな
でしょう。マスコミも変に情に絡んだ批判的な報道をするばかりでなく、こうした事
実を報道して、災害に遭っている方の励みにして上げれば良いのに、と思いま
した。

五・やはり政府の対応はお粗末と言わざるを得なかったでしょうね。悪く言えば、
フォーマンズ得意の菅総理としては、この災害は最低の水準に落ち込んだ人気を回
させる絶好の機会ではなかったでしょうか。着任直後のフォークランド戦争で一
気
にアイアン・レディの名を轟かせたサッチャー首相や九・一一テロで一時的にでも
圧倒的な人気をかち得たブッシュ大統領みたいに、ここで指導力を発揮して手柄
を立て

ば今後の政治の運営に良い影響が残せたのではないか、と思うのですが、何も出来なかつた。避難勧告に出て来たりしていましたが、こんなことは事務方のやること。市民運動の抗議や反対のパーフォーマンスは得意だつたけど、自分が危機の先頭に立つて自分の心からの言葉で国民を鼓舞する、なんてパーフォーマンスは出来なかつた。その程度の男だつたと言うことなのでしょう。外国人から首相への献金問題が報道されたその日のことですから、自分への銚先が他に逸れて、助かつた、と思つていただけのことかも知れません。彼が最初にやったのが、東電に乗り込んだことのようにですが、渦の真ん中にいる東電を怒鳴りつけてどうなると言つんでしよう。その中で官房長官のみは仲々立派だつた。勿論専門外のことなんだろうけれど、自分なりに事態を理解した上で説得力のある説明をして、努めて冷静に事態の沈静化を図ろうとしていく姿勢に好感を持ちました。

六・地震が起こると、地震学者と称する連中がテレビに出て来て、今回の地震の原因はどうだつた、こうだつた、と解説してくれますが、私は以前からこんな連中にむしろ

嫌悪感を抱いていました。元来この種の学者と言うのは、こつした危険を予知したり、防止策を講じたりするのが役目でしょう。災害の後になって物知り顔にこんな解説をして何になるのか。だったら、「申し訳ないけど、今の私の知識と能力では地震の予知は出来ないのです」とお詫びした上で、「今回の現象を貴重なデータとして研究の材料に加えさせて頂いて、将来は予知が出来るように努力します」位のことを言っていて欲しいと思いました。

七・今回一番男を下げたのは東電でしたね。全くお粗末のひと言でした。危機管理の訓練が全く出来ていなかった、と言われても仕方がないでしょう。福島原発の事故。

一〇〇〇年に一度と言う人もいるほど、想定を超える大変な地震であり、津波だったことは確かですが、原発なんて過去の最悪の事例を大幅に上回る事例にも対応出来るように作られていた筈です。二重・三重の危機防止策も考慮されていた筈です。次から次へと事故が連発している状況を見ていて、これは初期の段階でのトップの判断ミスによる人災に違いない、と確信しました。現場の皆さんの命を賭した努力には頭が

下がりますが、これとて殆どが下請けの人達で、東電の社員は危険のないところで見ているに違いない、なんて思わざるを得ませんでした。私は太陽エネルギーを利用出来るような技術開発が完成するまでの繋ぎ役として、原子力発電は絶対に必要なものだと思っています。今回の地震が、原発の安全性を示す絶好の機会になれば良いな、と思っていました。日本の原子力発電所が未曾有の地震にも耐えられるものであることを世界中に示して欲しかった。それにしても、対応が如何にも不様だった。対応が後手々に回った上に、社長を始めとして、説明に出て来る社員連中の何ともお粗末なこと。如何にも自信がなさそうで説明に説得力も何もない。事態を自分なりに理解していないからなんでしょう。上がって来る報告書を読むだけで、聞き手が何を知らたいのか、を洞察する力もない。こんな連中に危険な原発を任せておいて良いのか、と思った人は多いのではないだろうか。もう少しマシな社員はいなかったのだろうか。これで原発反対の声が益々強くなって、日本の原発には相当の遅れが発生するでしょう。残念なことです。

計画停電の件もお粗末でした。大臣と社長を引っ張り出して、計画を発表したのは良いけれど、良く計算したら翌日から直ぐに停電にしなくても良いことが判った、なんてお粗末の極みでした。こんな時に、一番知りたいのは、何処で何時やるのか、個々の家庭で、自分が何を準備せねばならないか、と言うことの筈です。予測計算が如何に難しいとは言え、発表の段階で一番必要な情報を与えることすら出来ない。国民は異常事態の中でのこの計画に協力する姿勢を示していたと思います。それなのに、「夫々の地域がどの地域グループに属しているか、については、ウェブサイトを見る」なんて傲慢な態度に腹立ちを覚えました。

八・原発の事故については、流言飛語の類の情報が流れていました。私が加盟しているメーリングリストのグループにもこの手の情報を持ち込む人がいました。東京地区からも避難した方が良いとか、農作物は口にしない方が良いとか、放射線を防ぐためにヨードを食べる方が良いとか、危険を煽って原発反対の運動を盛り上げようとするような情報でしたが、私は「もっと冷静になろう。日本人を信じよう」と言うお人好し

の性善説で対抗していました。マスコミも、最初は危機や不安を煽るような報道が多かったように思いますが、段々に沈静化して冷静な報道に努めていたように思います。

九・異常な円高は理解が出来ませんでしたね。こんなに酷い目に遭った国の通貨の価値は下落するのが当たり前でしょう。それが異常な円高になるなんて、これは投機を目的とした投資家のやっていることだと思います。自由主義・資本主義の世の中だから仕方がない、と言ってしまえばそれまでですが、私には人の不幸を利用して金儲けしようとするこんな連中がどうしても許せない。金儲けを目的とする売り惜しみや買い溜めをする連中もいたようですね。暴動や略奪が全く見られなかった被災地の人達の行動や全国からの支援の活動の盛り上がりは立派でしたが、その外側にはやはりこんな連中がいたことを残念に思います。こんな人達が存在できる自由主義・資本主義の社会が本当に良い社会なのか、と云うことについても疑問を持ちたくありません。こんなことを言っていると、革命を起こせ、とでも言っているように思われそうですね。

(平成二十三年三月二十日)

東日本大震災 その二

東日本大震災の原発事故への対応について、私は先号で「もつと冷静になろう。日本人を信じよう」なんて申しましたが、どうやら私のお人好しの性善説が行き過ぎていたようです。その後の東電と政府の対応のお粗末さは眼を覆うばかりです。初期の段階でトップの判断に大きなミスがあったことには間違いがないと思いますが、その後の対応のお粗末なこと。こう言う事故の場合は最悪の事態を想定して、それに向かって対応策を考えるのがプロの仕事でしょう。素人目に見ても、後追い・後追いの対応には「こんな人たちに大事な原発を預けていたのか」と失望せざるを得ませんでした。最近になつても「想定外の事態で上手く行かない」なんて言っていますが、いやしくもプロである限り、想定外なんて言葉を軽々に使うものではない。あらゆる事態を想定した上で動くのがプロの仕事だと思います。これでは東電の対応は腰が据わっていない、と言われても仕方がないと思っています。誰も責任を持って仕事をしていない。如何にも責任逃れのお役所仕事ではないか、と思います。私がトップの判断のミスではないか、と疑って

いるのは、事故の直後のある時点で、この原発工場を捨てるか、残すかの判断をする段階があったのだらうと思うっているからです。即座に「捨てる」判断がなされていけば、対策も思い切ったものになって、これだけの被害にはならなかったのではないか、と思っっています。一応プロの集団ですから、「この状況では、原発の継続を諦めねばならない。この工場は捨てねばならない」と言う見解を持つ人は必ずいた筈です。その見解が組織のどの段階まで上がって、どの程度反映されて最終的な判断がなされたのか。これだけ大きな判断は社長を含む経営のトップ以外には出来ません。政府にも相談する必要があったでしょう。ここで勇気ある決断が出来なかったものでこれだけの大被害になったものと思っっています。この辺の判断がどんな経緯でなされたのか、調査委員会での調査の結果、何かが出て来るのではないかと楽しみにしています。当初から「メルトダウンは発生していない」と言つのが東電と政府の一貫した説明でしたが、私は、メルトダウンは相当早い段階で発生しているのではないかと思っていました。発生したとしても、原爆の爆発のように大量の灰塵が原爆雲になって空高く飛び散るわけではないのだか

ら、被害は限定的なもの等。これを想定しさえすれば十分な対応策を講じることが出来る、と信じていました。初期の段階でメルトダウンが発生していたことを東電が発表したのは、事故の二カ月半も後になってから、と言うお粗末でしたが、こんなことがブ口と呼ばれる当事者に判っていなかったなんて信じられません。キツと分っていたに違いありません。それでもその最悪の事態に対応する十分な対策が取られたとは思えませんが、混乱を起こしてパニックを生じさせてはならない、なんて配慮はあったにせよ、それより数等大きな被害を生じさせています。何よりもこの手の小出しの情報が外国に流れ、「日本人はウソつきだ」「日本人は信用できない人種だ」と思われるのが一番辛い。私は今回の事故で、原発の推進に大きな遅れが生じたことも残念に思っていますが、それ以上に事故への対応のお粗末さによって日本人に対する国際的な信頼度が格段に下がったことを本当に残念に思います。東電の一部の人達や経産省の安全保障院とか言う何の役にも立たない人達のお蔭で、日本人全員がウソつき呼ばわりされるのは、大東亜戦争の開戦時にアメリカ大使館員たちの不手際のお蔭で「アメリカは日本にだまし討ち

をされた」と言う汚名を着せられた時と同じだな、と思わされています。震災直後、暴動や略奪に走ることもなく、災害を冷静に受け止めた被災者の皆さんの見事な美しい行動は世界中の人達の賞賛を浴びましたが、それに倍するマイナス点を取ってしまったのが残念です。

私は、「逝きし世の面影」に描かれた江戸末期から明治初期にかけての日本人一般庶民の心の美しさは、戦後の荒廃した教育のお蔭で大分なくなってしまったとは言え、まだ幾らかでも現代に残っている、と信じたいと思っていますが、これは庶民のレベルに止まり、政治家を含む知識階級と言うか所謂指導者層には残っていないのではないか、と思わざるを得ず、悔しく思っています。自分の親の死を隠して年金を貰い続けていた足立区の人を見て、石原知事が「日本人はここまで堕ちてしまったのか」と絶望し、これが「これでは日本人に天罰が下っても仕方がない」と言う天罰発言に結びついたのだと思います。日本人の心の美しさは、レベルを問わず失われてしまったのだろうか。災害復旧復興そっちのけの昨今の政治の醜さ、お粗末さには呆れてものを言つ気にも

なれません。

(平成二十三年六月二十日)

小沢 一郎

平成二十三年十月六日に検察審査会の強制起訴の決定に基づく裁判が始まりました。冒頭で、小沢氏は自ら「国家が小沢一郎を抹殺しようとする目的の裁判だ」なんて主張をしています。国家が小沢個人を抹殺しようとするなんて、自分がそれ程の人間だと思っているのか。「司法の自殺」とも言っている。「思い上がるな。お前は一体何様なんだ」と言いたくなります。

「国会で説明しないのか」との記者の質問に対して、「三権分立を勉強してから質問しろ」なんて恫喝をしていました。その態度も気に食わなかったけれど、その時に記者がさかさず「司法が信用できないなら、折角国会の場で説明する機会があるのだから、この場を借りて堂々と国民に向かって理解を求めたらどうなのか？」と言う趣旨の再質問をしたら、どんな反応をしたらどうか。これくらい腹の据わった記者がいたら面白か

ったのではないか、と思いました。確かに最近の記者の質問は下らなくてレベルの低いものが多い。この面では、勉強してから質問しろ、と言う言い方は当を得ているとも言えそうです。

相変わらず、秘書に任せていた、自分は知らなかった、の弁明が続いているようですが、私は、四億円の帳簿への記載が嘘だったのか、単なる間違いだったのか、とか、誤記の事実を小沢本人が知っていたのか、知らなかったのか、何て細かい話はどうでも良いと思っています。極端な言い方をすれば、私は、民主政治にお金が掛かるのは避けられないことのようなので、政治家がお金の面では少しぐらい無理をしても良い、自分の懐を肥やしたり、そのお金で政治を曲げるようなことにさえしなければ、少しぐらい悪い位でなければ大きなことは出来ない、とすら思っています。政治自体に直接関係のない下半身の問題にしたって、「英雄色を好む」の例え、シラク元首相ではないけれど、「エ・アロール?」(それがどうしたの?)で片付けて良いのではないかとすら思っているほどです。

海部首相の時代の平成二年に、イラクがクエートに侵攻しました。この時に与党自民党の幹事長をやっていたのが小沢一郎でした。弱体で腰が定まらない海部首相の下で、国連平和協力法の成立に努力はしたようですが、結局、醜い国内の政治権力争いの中で失敗し、散々苦労した上で、人が出せないなら金を出す、と言う誠に恥ずかしい結論になり、九〇億ドルの支援金を出すことにしたのがこの人でした。この決定がなされた丁度その日に、イラクが国連の条件を飲んで実質的な降伏をしまい、この一兆三千億円に上る支援金は世界の笑いものになりはしたものの、全く評価されませんでした。結果は褒められたものではありませんでしたが、私はこの時点ではむしろ小沢一郎の力を評価していました。あの軟弱な首相の下で、また当時のあの政治状況の中で対外的に一応の形を付けたのは、この人の力がなければ出来なかったことではないか、と思ったのです。下手をすると世界中があれだけ騒いでいるのに、日本だけは国内の抗争に追われて何もしなかった、という、もっと見っとも無いことになり兼ねないところだったと思うのです。そういう意味では、所謂、強烈な政治力のある人だと思います。もっともこ

の膨大な額の支援金の使途については大きな疑問が残っているようです。若し、このお金が一部でも小沢個人の懐に入っているとしたら、トンでもないことだし、これは政治力の一部と考えるのは難しいと思います。政治の裏側とは難しいものです。

ところが、小沢一郎の政治姿勢となると何なんだろうか？ 「日本改造計画」を打ち出しています。これは自己責任の原則に基づく日本社会の抜本的改革だ、と言う見方をする人がいます。その中の「普通の国論」などは納得出来る部分が多いのですが、これもどうやらその時の流行に乗っただけ、と言う見方があるようです。社会民主主義を払拭して保守二大政党作りをしよう、と言う考えが基本にあつて、それが彼が推進した小選挙区制に繋がったと思いますが、民主党政権になってからは自己責任から生活第一へ、競争主義から福祉主義へのバラマキ作戦に変わってしまっています。更に、国家観と言うことになるかどうかの。政治家に一番求められている、国民と国益を守る、国としての誇りを守る、と言う姿勢が見えて来ません。国際貢献と言うことで、国連主義を主張しているようです。国連の指令の下で自ら自衛隊が動ける、なんてことを言ってい

ますが、これはどう考えても可笑しいのではないかと思います。建前としては綺麗な考え方ですが、これでは日本の国益を守ることに繋がらないと思います。

私にはこの人の政治姿勢が、選挙に勝つこと、のみにあるような気がしてならないのです。その時々で選挙に勝てるような政策を打ち出す。選挙に勝てるような政策と言つのは、多数の人の意見を容れた政策だから、それが民主主義なんだ、と言つ見方をする人もいるかも知れないけれど、本来の選挙の姿と言つものは、自分の主張する政治姿勢があつて、その是非を選挙民に判断して貰う、と言つことなのではないだろうか。自分の信ずる政策が実行するには力が必要だ。選挙に勝てば力が持てる、と言つことなんだらうけれど、選挙に勝てるような政策を出すと言つのは、何だか本末転倒の気がしてならないのです。自分が目指していることを実行するには力が要るのは当然ですが、力を握る方に目が行き過ぎている。選挙目的の為に国益を損なうようなことを平気でやる。六百人の訪中団の胡錦濤との握手問題や土下座外交の姿勢、議会より選挙を重視する姿勢、選挙を睨んだバラマキ政策や民主党幹事長時代に自身の力を強くするためにやった

陳情の一元化等、皆選挙に勝つためと自分に権力を集中させることを意図しているのではないだろうか。司法に対する傲慢な態度や中国の副主席が訪日した時に見せた天皇を下に見るような姿勢を見ていると、どうしても日本を正しい方向に持って行ってくれる人だ、と信ずることが出来ないのです。

フジテレビ系で週末を除く毎晩八時から二時間やっている「プライム・ニュース」と言う番組があります。キャスターの反町理氏は元々カメラマンと言いますが、常識的なやり取りに好感が持てるので、良く観ています。出演者に質問をするだけでなく、それに対する再質問や反論など、対話が出来る感じで、それが、我々が常識的に感じる疑問を聞いてくれているような気がして好感が持てます。先日、石原知事が出演して、例によって好きなことを言って、昨今の民主党政治を散々けなしていましたが、最後の最後で、反町キャスターの「誰に首相をやって貰ったら良いと思いますか」との質問に対して「小沢君にやって貰ったらどうか」との捨て台詞を残していました。唯、「彼には言葉が無い」と言っていました。自分を理解して貰おうとする努力や姿勢に欠ける、と言

うことではなかったかと思えます。ヤケクソの捨て台詞のようにも聞こえますが、ある意味での本心だったかも知れません。こんな危機の時代には少々強引でも強いリーダーが必要で、例え自分が憎まれても、信じる方向に引っ張って行く強力な力が必要だと思ふのです。

古代ローマでは周辺からの侵略などの国難の時には、時限的に力のある独裁者（ディクタトル）を選び出し、執政官以下全国民がこのディクタトルの下で国難に対処したとことです。国難が去ったら、このディクタトルは解任されて元の平常な姿に戻ったと言われます。こんな形になれば良いのですが、小沢氏の場合は、権力だけを持ちたい、と言う姿勢がアリアリで、権力さえ持ったら好きなことを始める怖さがあるように思えてなりません。力を持たせてしまったら何をやりだすか判らない。やはりこの人に力を持たせてはいけないのではないか、と思つています。

（平成二十三年十二月）

野田首相について・茂木 賢三郎君へのコメント

稲田朋美さんの「私は日本を守りたい」は読みました。ハッキリした気持ちの良い主張には清々しい思いすらしました。国を守る、国益を守る、と言う姿勢がシッカリしていれば、党を守る、自分の派閥を守るなんて言う醜い姿勢は出て来ない筈です。昨今の政治の動きはコップの中の戦争ばかりが見えて、何のための政治家なのか、の感を深くしています。私は最初から言っていたように、やはり民主党は小沢・鳩山・菅・輿石・山岡の五人が消えなければ何ともならないな、と思います。ウソツキの鳩山なんてまだ、何かと言うと顔を出して来る。海外にも出掛けて勝手な無責任なことを喋っているようです。見る人によっては、自分がノーベル平和賞が欲しいので、日本を辱めているのだ、とも言われます。そんな愚かな奴をインタビュに引っ張り出すNHK辺りもどうかしているのではないかと思うし、今もって鳩山派なんて言っつくっ付いている連中がいることも信じられない思いがしています。先号で極論したように自分で自分の愚かさや恥ずかしさが分からない鳩山何て、死んでもらう他ないのではないか、と思います。馬鹿

は死ななきや 治らない、を地で行っている男ではないだろうか。

一体化法案関連のゴタゴタについて考えていることがあります。一寸長くなりますが、聞いて下さい。増税のみが先行しているように喧伝されていますが、これは取り上げ方に問題があるのではないか。反対派は増税ばかりを表に出そうとするし、マスコミの取り上げ方もその方向で報道するのが間違っているのではないか。「支出削減の努力をギリギリまでやって、やることをやってから増税すべきだ」と言うのは正論に聞こえますが、こんなことを言いながら何十年もズルズル先延ばしにして来た結果がこれだけの財政赤字を生んで来たのです。野田さんが言うように、増税を決めてから同時並行でやることをやる、と言うのは正しい方向ではないかと思えます。国民が一番いやがること、つまりは票を失って自分の首を絞める結果になる増税なんてことを愚直に進めようとしている野田首相は正しいことをしているのだ、と信じて上げたい。税金を上げる、何て言ったら国民全員が反対するのが当然でしょう。それがアンケートなるものの結果では、やむなし、との回答が一時は半数に上ったと言われるし、今でも三〇%は、やむな

し、の意見だと言います。三〇%もの理解があれば十分ではないか。殊更に増税反対、を唱えている政治家は、それが票を集める結果になることを期待しているからではないだろうか。結局、この連中は、国のため、と言うより自分のため、を優先していると言うことになります。野田さんと言う人は、演説が上手いと言いますが、それは自分の言葉で喋れるからだと思う。自分の考えが腹に入っていて、それを口に出すから、聞く人の心を打つ。一体化法案の衆院通過後の記者会見も立派でした。メモなど全く持たずに自分の言葉で訴えていました。それとこの人はディベートの訓練を積んで来た人ではないかと思う。記者会見での質問に対しての受け答えも、党首討論などでのやり取りも、議論の体をなしています。久し振りに特別委員会でのやり取りも大分聞きました。町村、伊吹などベテランの自民党議員との質問・議論のやり取りが面白かった。双方とも声を張り上げる訳でもなく普通に静かに喋っているけれど、諄々と論ず、と言う感じがピッタリしていて好感が持てました。国会の議論と言うものはこうあらねばならないのではないかとすら思いました。これに比べると石原伸晃幹事長辺りはまだまだ色気が

残っていて青い感じがします。野党時代の菅前首相が殊更に声を張り上げて、声の勢いで相手を脅すような質問をしていたのが醜くて、私に「パーフォーマンスだけの人」と言うレッテルを貼らせる結果になりました。菅が首相として中国の要人と会っている姿を見たことがあります、なんとメモを読みながら話をしていました。全く自分の言葉で喋っていない。こんな姿勢で日本の国益が守れる筈がありません。恥ずかしい思いがしました。そこへ行くと野田さんが自分の言葉で喋っているのには好感が持てます。野田さん頑張り、小沢なんかに負けるな、と言う気持ちです。（平成二十四年十二月）

第二次安倍政権誕生

暮れの突然の総選挙には驚かされました。自民党の大勝に終わりましたが、これも前回同様、自民党が勝ったのではなくて、民主党が負けたのでしよう。野田さんは誠実に良くやってくれているのではないか、と思っていましたので、気の毒な感じがしました。前の二人が酷過ぎたので、そのツケを払わされたのだな、と思っっています。所謂貧乏く

じを引かされましたね。それにしても選挙結果の「ブレ」の大きさの凄さに驚いていません。国際的にも「日本の民主主義もまだまだ未成熟だな」と言う評価を受けるのではないかと、と恥ずかしい思いもしています。私は常々言っているように、安倍さんには是非もう一度やって貰いたいと思っていましたので大歓迎です。前回の辞め方が如何にも無様で情けなかったので、これほど早く復帰して来るとは思っていませんでした。これだけ圧倒的に勝つと逆にやり難い面もあるのではないかとも思いますが、選挙目当ての票稼ぎばかりではなく、憲法改正でも集団的自衛権でも尖閣諸島や竹島問題でも思い切つてやって貰いたいものだ、と思つています。但し、経済の活性化と云うことで、インフレ・ターゲットを強烈に進めているのが気掛かり、というか怖い。インフレは年金生活者の生活を破壊します。手頃なところでインフレが制御出来るかどうか、上手く行けば良いけど。それとこれは安倍政権には限りませんが、気になるのは、「一五〇〇兆円の資産の六〇%が六十五歳以上の高齢者の懐に眠っているから、これを引っ張り出せ」と云う最近の論調。誰が何処に溜め込んでいるのか知りませんが、年金で暮らし、乏しい

蓄えを削っているフツの老人をこんな人達と一緒にしないで貰いたいものだと思います。もう一つ。株なんて上がったたり下がったりするもの。アベノミクスで株が上がった、と手放して喜んでいるようでは先が思いやられるような気がします。

(平成二十四年十二月)

マーガレット・サッチャー

サッチャー元英国首相が四月八日に亡くなりました。私がサッチャー女史を意識したのは、一九七五年のことですから、もう四〇年近く前のことになります。七四年の十月に二年間のロンドン駐在員の生活を始めたのですが、その直後の七五年一月に、当時四十九歳のサッチャー女史が保守党の党首に選出されました。当時の英国は英国病と言われる経済不振に陥っていましたが、その原因が労働組合にある、として労働組合に強烈な対決姿勢を見せながら六年間政権の座を守って来た保守党のヒース首相が、労働党に敗れて下野し、保守党の党首選挙が行われましたが、予想外と言われる展開になって

サッチャー女史が党首に選ばれたのです。女史はオックスフォードを出てはいるものの、別に名門の出ではなく中流の下に位置付けられる雑貨屋の家に生まれた人。二十歳代で政治の世界に入ったそうですが、代議士になったのは一九五九年のことでした。若い頃から将来を嘱望され、同じ年代で労働党にシャーリー・ウイリアムスと言う女性代議士がいましたが、この人とどちらが先に首相になるか、が話題になっていたそうです。女性の党首が出たのは初めてのこと、当時は「マギー旋風」と騒がれ、保守党員数の多かった私の顧客筋のオジサン達が、「その内に女性の首相が生まれることになるだろう。そして英国は、女王と女性首相に支配される国になるだろう。世も末だ」と嘆いていたのを思い出します。この辺は昭和五十年三月号の珊瑚誌で紹介しました。

当時からキリッとした仲々魅力的な女性で、何よりも演説がハッキリしていて分かり易く、私なんかにも聞き取れるような英語で喋ってくれることもあって、私は最初の頃からファンになりました。

オジサン達の懸念が当たって四年後の七九年五月には保守党が労働党を破って政権

を取り返し、女史は目出度く首相に就任します。首相に就任してからの活躍ぶりは、自身が書いた「サッチャー回顧録」に一番スッキリと描かれていると思います。回顧録の最初の部分で、普通のお母さんがトンでもないことになってしまつて、「マア大変!」と言つているような微笑ましい場面が出て来て、とても親しみ易い感じを持つて読んだのを懐かしく思い出します。自伝ですから若干自慢史になつている部分もなしとはしません。マスコミで報道されている内容とあまり変わらない事実の裏側を記述したものではありませんか、と思ひました。就任二年後にフォークランド紛争が勃発します。地球の裏側、アルゼンチンの近くにある小さな島の自国の領土を守ろうとする毅然とした姿勢は見事なもので、理不尽なことは絶対に許さない、と言つ女史の姿勢を如実に表していると思ひます。この姿勢が「アイアン・レディ」の異名を生み出し、その後の政権運営に大きくプラスしたのではないかと思ひます。「サッチャー内閣で唯一の男はマーガレット・サッチャーだ」なんて言われたのもこの頃のことでした。国や国益を守る姿勢に乏しかったここ何年来の民主党政権の外交姿勢を見る度に、女史のこの美しい姿勢を思い

出して悲しい思いをしたものでした。こうした毅然たる姿勢は、政権運営のそこそこに現れます。アイルランドのテロに対しても、「絶対に許さない」と言う確固たる信念で戦う姿勢を崩しませんでした。二〇〇万人に上っていた失業者を減らして経済を活性化させようとする戦いの過程で、労働組合との対決になりますが、絶対に妥協せず、世論を味方に付けながら、鉄鋼スト、ブリティッシュ・レイランド（自動車）のスト、炭鉱のストなどを次々と負かして行く過程は見ていて気持ちが良いほどでした。前の保守党の首相のヒース氏も、同じく強くなり過ぎた組合とは強烈な対決姿勢を示し、「英国を統治しているのは誰なんだ、政府なのか、労働組合なのか（Who governs Britain?）」を売り言葉にしましたが、女史はこれより数等厳しい姿勢で戦ったと思います。外交面ではアメリカのレーガン大統領やドイツのコール首相と組んでソ連の共産主義を崩壊に追い込み、冷戦を終結させて行った経緯も回顧録に記されていますが、この辺には流石に自慢史の部分が出ていたように思います。イラクのフセインのクエート侵攻に際しては、パパ・ブッシュ大統領と組んで、フセイン叩きを主導しますが、その途中で与党

議員に足を引っ張られる形で不本意な下野をすることになり、「自分がいたらフセイン何て立ち上がれないまでにヤツツケテやったのに」なんて書いているのが痛快だと思います。

メリル・ストリープがアカデミー賞の主演女優賞を取った映画「マーガレット・サッチャー」はこの回顧録をベースに作られていると思いますが、良く出来た映画だとは思いつつも、やはり本の記述の迫力には敵わないな、と思いました。

労組の解体、国営企業の民営化、賃金の抑制、福祉の切り詰めなど国民に不人気の政策を強烈に推進したので、一時は支持率が二〇%台まで下がったのですが、信念は曲げなかったと言います。この政策はその後の労働党の政府にも引き継がれ、英国が本格的に景気を回復し、成長を続けたのはむしろ女史が退任した後だったと言われています。皮肉なことに労働党のブレア首相がその恩恵を受ける結果になりました。同じ現象はアメリカのレーガン大統領のレーガノミクスでも起こっています。保守党のレーガノミクスが推進した痛みの多い規制緩和による経済成長策が実を結んで、その恩恵を受

けて好評だった大統領は民主党のクリントン大統領だったと言われます。サッチャーさんが金融大改革（ビッグバン）を推進し、金融業の育成に力を入れたのが少々気に入りますが、いずれにしても「欧州の病人」と言われ「英国病」を患っていた英国を蘇らせたのは事実です。

目の前の人気取りに走るのではなくて、嫌われても厭がられても自分が正しいと信ずる政策を推進するのが本当の政治家だと思います。この辺は昨今の日本の政治家どもに爪の垢でも煎じて飲ませてやりたい。この点、安倍さんには期待しています。思い切っ
て自分が正しいと思うことをやって欲しいと思っています。例えば、首相が議長を務める経済財政諮問会議で日本型資本主義のあり方を検討する専門調査会が出来るそうです。企業が株主への還元だけを追求するのではなくて、従業員の雇用を維持したり、長期的な成長を重視するような、日本の経済人が昔から大事にして来た資本主義のあり方を議論することになっているようです。これは正に、私がこのところ主張して止まない方向ですので、こんなことは安倍さんじゃなくては出来ないんじゃないか、と快哉を叫び

ながら期待しています。

(平成二十五年四月)

靖国神社参拝問題(三)

靖国神社問題について書くのは、これで三度目です。昨年暮に安倍首相が参拝して、国際的な話題になっていたので、もう一度考えて見たいと思います。先号にも同じようなことを書きましたが、整理してみます。

基本的に私は、良く勇気を持つて参拝してくれた、と思っています。A級戦犯合祀の問題など、細かい点は抜きにして、国内の問題を外国からゴタゴタ言われる筋合いはない、と言う簡単な理由だと申し上げておきましょう。安倍政権が誕生して以来、中国や韓国からはバカの一つ覚えみたいに、歴史の認識が不足しているの、謝り方が悪いの、足りないの、の大合唱が続いています。このままでは未来永劫に亘って謝り続けなければならぬ。子供たちが、過去の日本人はそんなに酷いことをして来たのか、日本人はそんなに悪い人種なのか、と自分の国に誇りを持てなくなり、日本人として生まれたこ

とを恥ずかしく思うようになるでしょう。安倍さんが、日本を取り戻そう、と言っているのは、日本人に日本に対する誇りを取り戻して欲しい、と言う意図があつてのことだと思います。安倍さんは両国との関係はこれ以上悪くなりようがない、と割り切つてこの時点での参拝に踏み切つたのではないだろうか。私は、それはそれで正しい判断だつたと思っています。両国の反応は予想されていたことで、気にすることは全くないと思つています。一三〇年も前に（一八八五年）、福沢諭吉が「脱亜論」を主張しています。韓国における日本の三悪人は、朝鮮征伐の豊臣秀吉、征韓論の西郷隆盛と、この福沢諭吉なのだそうですが、「脱亜論」はシナや朝鮮とのお付き合いを控えて、先進国たる欧米の人たちとのお付き合いを尊重しよう、と言う主張です。理由として、この両国の人たちの 科学的な真理を軽んずる傾向、 道徳的な退廃、それと 国際的な紛争に対して、「悪いのはお前の方だ」と断じて憚らない国際的な常識のなさ、を挙げています。正に現在の両国と全く同じで、全く進歩が見られない。一〇〇年以上前の卓見に驚かされます。

今回の参拝が従来の参拝問題と大きく異なっているのはアメリカからの反応でしょう。「disappointed」と言いつコメントが流れて来て騒ぎが大きくなっています。桜井よし子さんは「気概を失ったオバマ大統領が言っていること」と切り捨てていましたが、正にその通りだと思います。二期目のオバマ大統領は、国内的にはオバマ・ケアを巡る共和党との戦いで国中を混乱させたし、国際的にはシリアの化学兵器使用に対してレッドカードを出したのに実行に移せなかったり、イランの核開発を阻止出来ず腰砕けになったり、で味噌の付け通しです。力の無くなったオバマさんとしては、世界の何処かでこれ以上何か問題を起こして貰っても対応する能力がない。理由は何であれ、ゴタゴタは起こして欲しくない、と言う姿勢の現れではないか、と思います。以前のアメリカには、曲がったことを許さない、所謂「unbending」なことは許さない」と言う気概がありました。これが強く出過ぎて他の国に迷惑を掛ける嫌いが無きにしも非ず、でしたが、今のオバマさんには今の自分自身を守るのが精一杯で、その気概が全くなってしまうているのでしょうか。この点では同じ民主党でもクリントン前国務大臣の方が気概があっ

たと思います。

でも、どうやら今回の参拝については、アメリカへの事前の根回しが上手く行っていないかったようです。同盟国にこんなことを言わせたのはやはりまずかったですのではないのでしょうか。

とは言っても、今回は中国と韓国の両国から、このアメリカの姿勢を良いこととして、これを利用した広報外交が展開されています。中国はこの問題を批判する宣伝戦を仕掛けるよう、世界中の在外公館に指示を出したそうで、日本版NSCの創設や集団的自衛権問題、憲法改正の議論などを重ね合わせて、「日本が軍国主義化している」との宣伝がアメリカ、英国、ドイツを始め世界中七〇か国で展開されて、これが功を奏しつつあるような気がします。英国のフィナンシャル・タイムズ紙辺りまでが、同様趣旨の記事を書いている。これはこの宣伝が浸透しつつあると言つことではないだろうか。

韓国の朴大統領は慰安婦関連の問題を中国やロシア、アメリカ、フランスなどの首脳会談の際に持ち出して、ウソも交えた「言いつけ外交」を展開しています。恥も外聞も

考えない全く見苦しくて卑しい限りのやり方ですので、放っておけば良い性質のもですが、これに対しても少しずつ反応が出て来ているように見えて無視は出来ないような気がします。アメリカの幾つかの州に慰安婦の像が立つとか、大連に安重根の記念館が出来るとか、形になって来ています。言いつけ外交の醜さは、訴えを受けた各国の首脳は認識しているかも知れないけれど、これを聞いた各国のマスコミが、面白がって日本叩きを始めているような気がします。マスコミと言つものは何処の世界でも、ニュースが売れば良い、と言っただけの下らない動きをするものです。

一月八日のプライム・ニュースに桜井よし子さんと上智大の中野晃一教授が出て来て、この問題を議論していましたが、仲々面白かった。中野教授は以前から靖国参拝消極派ですが、マックス・ウエバーが言っていたと言つ、「政治家の倫理観は普通の人のそれとは異なる」と言つ理論を基軸にして話をしていました。個人としてはどんな価値観を持つても良いし、理想を掲げてても良いが、政治家として発言する時は、国益を考えて発言せねばならない、と言つことです。靖国参拝は実現すべきだ、と言つ信念は持つていて

も良いけれど、国のリーダーとしては、それを行動に移した時に国益に反することにならないかどうか、を考えるべきだ。と言う議論でした。「disappointed」が話題になっている時期でしたから、仲々迫力のある主張でした。これに対して桜井さんの方は、「その考え方はリアリストの考え方だが、現実主義者が現実（現状）肯定主義者と混同されている。現状を守って波風を避けようとする傾向が出て来ているのではないか」と言う論点で反論していました。今の状態で穏やかに治まっているのだから、殊更波を立てるべきではない、と言う言い方になるが、これでは全く進展がない。波が立つても正しい方向に進めるべきだ、と言う議論だったと思います。仲々聞かせるディベートで、桜井さんがあの柔らかい口調で説得し、論破に努めるのに、流石に中野教授も負けていない。大分梶子摺っている様子が窺えました。偶々「文芸春秋」二月号の「この人の月間日記」に桜井さんが登場していましたが、この日の日記に「朝日新聞の申し子みたいな中野教授の、靖国に対する考え方はずい分変である」なんて書いている辺りに、梶子摺って閉口した様子が窺えて何とも可笑しかった。桜井さんは徹底的な朝日嫌いです。

正しい外交関係とは何なのか、分りませんが、やはり世界中の多くの国からの支持を得られる方が望ましいのではないだろうか。孤立は避けるべきでしょう。安倍さんがロシアを含む周辺の各国との関係改善に努めて味方を増やそうとしているのは正しい方向ではないか、とと思っています。両国に対しては、扉は常に開いていますよ、と言っておけば良い。無理に首脳会談なんてする必要はないのです。少なくともこちらから、首脳会談に乗ってくれ、とお願ひするようなことは決してするべきではない、と思います。

恥も外聞も考えずに自分を主張して来るお国柄の人たちですから、次にどんな手を打って来るのか判りません。経済面で何か日本が困りそうなことをやって来るかも知れません。私は常々中国との経済的な依存関係は出来るだけ少なくしておくべきだ、と主張していますが、ここ暫くは福沢諭吉の卓見に従って、両国とは敬して遠ざける方向で考えるべきだと思います。若し、それが原因になって経済面で何か不都合が生じたとしても、日本国民として我慢すべきなのではないだろうか。米倉経団連では、中国との関係がおかしくなると商売に差し支えるので関係維持に努力して欲しい、なんて圧力を政府

に掛けるような動きもありましたが、こんなことは言つべきではないし、言つたとしても政府としては聞く耳を持つべきではないと思つています。

日本人は自分のことを宣伝するのが下手ですね。自己宣伝は恥ずかしいことで美しくない、と言う国民性がまだ残つていないのではないだろうか。でも、こんな時代には、国としても少し上手に自己主張、自己宣伝が出来ないものかな、と思つています。慰安婦については、常々言つているように、事実の確認も不十分のままに、軍の関与を認めてお詫びを表明してしまつた河野談話が一番の元凶だと思つています。昨今、河野氏を糾弾する動きも出て来ているようです。河野氏が生きている間に裁判にでも引つ張り出して、事実無根を公の場で証明する、なんてやり方もあるかないか、なんて考えています。

尤も、韓国の日本嫌いは根が深いようです。未だに強烈な反日・侮日の教育がなされていて、日本人は悪逆非道な人種だ、と言うことが刷り込まれるので、学校を卒業して来る子供たちは、完全に日本嫌いに育つてしまつていると言われます。大きくなつて実

際に日本人と付き合つて初めて、この教育の間違いに気付く人が出て来る程だそうです。戦前の植民地時代を経験した人たちの中には、日本の統治は悪くなかった、と思つてゐる人が少なからずいるそうですが、そんな発言をしたとしても、周囲から「親日は悪いことだ」と大きな反発に遭い、「無学の田舎の人が言うことだ」と封殺されるそうです。言論の自由がこの面では封じられている、と言つ見方もあるようです。そしてこんな人たちも年を経れば段々に減つて行く。幼少時から反日教育を叩き込まれた人が大勢を占めるようになる、と言つ恐ろしいことになります。韓国に対して、「そちらこそ歴史認識に誤りがある。正しい歴史を教育してくれ」「反日教育を止めない限りお付き合いはしませんよ」なんて言つてくれる勇氣を持った政治家が出て来ないものでしょうか。

やはり、こんな国とのお付き合いは当分無理だ、と考えるのが正しい結論なのではないかと思つています。

(平成二十六年二月)

【本文に対する補足】

本文は二月に書いたものですが、その後、予想した通りの進展

がありましたので、補足します。

慰安婦問題について、安倍さんが、河野談話の見直しをしない、と表明したことについては、残念に思います。アメリカからの圧力があつたのではないか、と推察してはいますが、良い機会なのだから遠慮しないで堂々と見直しをやれば良い。この問題では日本人が思っている以上に国際的な場で日本悪者論が浸透ししつとあるようです。河野氏が生きている間に裁判所に引つ張り出して、事の真相を明らかに出来ないものだろうか。この機会を逃したら、こんな機会はもう巡つて来ないのではないか、と思つています。野田前首相が、李明博前大統領と会談した時、李大統領がこの件を持ち出したのに対して、一歩も譲らず言い合いのままになつた、と言つ話があります。これが事実とすれば、野田さんの方が余程気骨があつた、と言つことになりそうです。そう言えば、消費税の増税も野田さんが自分を犠牲にして決めたこと。誰かがやらねばならなかつたことです。この人には再度何時か何処かで活躍の場を持つて貰いたいものだと思つています。

中国との経済関係について。案の定、早速中国からは二コソンのカメラに対するイチャ

モン付けなどの個々の企業叩きが始まりました。一九七二年の日中共同声明で放棄を声明した戦争賠償の請求について、中国政府から、個人の戦争賠償請求権は放棄されていない、との政府見解が出されたりしています。全く美しくないですね。今後もこの手の経済的な圧力は覚悟せねばならないでしょう。この手の問題が起こると、財界からの圧力で与党の中にも動揺が出て来るのが常ですが、ここは我慢をしたい。正当な反論は勿論するべきですが、変な形で屈伏してはならないと思っています。

浦和レッズのサポーターが自分の応援席に「Japanese Only」の垂れ幕を掲げた事件が問題になっています。どんなグループの作業なのか、目的が何なのか、が分からないし、決して褒められたことではありませんが、無観客試合なんて厳しい制裁を科した日本サッカー協会の素早い対応は見事だったと思います。朝鮮やシナの連中が外国の国旗や指導者の写真や似顔絵を焼いたり、踏みつけたりして抗議の姿勢を表わしますが、全く醜い限りです。これらの国の政府にはこれを厳しく咎める姿勢は見られません。それだけの国民性しか持ち合わせていないと言ふことなのでしょう。今回の厳しい姿勢はあ

の連中に日本の国民性を教えて上げたことになるのではないだろうか。当人たちにはそれが分からないかも知れませんが。

（平成二十六年四月）

歴史の島 五島

昭和二十年、終戦の年の五月に東京の代々木で戦災に遭い、家が燃えてしまつて、母と云うより祖母の里の大村に疎開し、その後長崎に移住して高校卒業の昭和三十一年まで、都合一一年間長崎に住んでいたのですが、所謂離島には一度も行ったことがありませんでした。長崎県は離島の県。大きな括りだけでも、壱岐、対馬、平戸、五島とある訳ですが、長崎県には大小五八〇の島があつて、島の数では日本一だそうです。この内、有人の島が七五、無人の島が五〇五とのこと。ついでに島の定義を調べてみたところ、国の統計上は〇・〇〇一キロ平方メートル以上の島を島として数えるのだそうです。と言つことで、長崎には島が沢山あるのです。今回こちらへ来て直ぐ、平戸には一度行って見たのですが、他の島には仲々行く機会がありませんでした。もっとも平戸は本土との間に橋が出来たので、離島ではなくなつたそうです。昨年五月末、五島で業界の会合

があつたので、恥ずかしながら初めて行って来ました。私の叔父が早稲田で歴史の先生をしていて、五島だ、五島だと騒いでいたことがありましたが、福江の町をホンの二時間ほど歩いて見ただけで、なるほどこの島が歴史の島であることが良く分かりました。

驚いたのはこんな島に縄文式土器が発見されていることです。日本は大陸と陸続きだったと聞いてはいますが、こんな島にまでそんなに古くから人間が住んでいたのか、海で完全にアイソレートされていたはずなのに同じような文化が栄えていたことにまず感心しました。その当時、既に海を渡る手段があつたと言つことと、危険を冒して海を渡ろうと意図する人がいたと言つことなのでしょうね。

五島のことは、古事記にも出ているのだそうです。イザナギの命とイザナミの命が、マグワイの後、日本の国を生み出すのですが、本土を作った後、大島などの四つの島を作り、その後で「値賀島」を作つたと記述されているそうです。値賀島と言つのは五島の古い呼び名で、何でも景行天皇と言つ方が、この島は遠くにあるが近くにありよつに見える、と言われたと言つことと、「近島」になつたとのこと。その頃の天皇はどこに住

んでおられたのか知りませんが、あんな僻地まで良く行って見たものですね。この景行天皇と言う方は万世一系の天皇の系図の十二番目に登場する方で、ヤマトタケルの命の父親に当たる方。古事記によれば、ヤマトタケルの命の力を恐れて、自分から遠ざける為に命に各地の蛮族退治を命じて、命に各地に蛮族退治の伝説を作らせたものの、遂には命を客死させる原因を作った天皇とされています。

日本本土の文化が五島に届いたのは、どうやら六三〇年に始まる遣唐使の時代。遣唐使が難波、今の大阪から出立したことは知られています。瀬戸内海を西に向かい、最初の頃は今の佐賀県の唐津辺りから吉岐、対馬を経由して、一番近い朝鮮半島に渡って沿岸沿いに中国に入り、長安に向かう「北路」と呼ばれるコースが取られていたようですが、朝鮮との関係が難しくなり、その後は博多、平戸から九州の西岸を南下し、島伝いに沖縄まで行って、そこから揚子江の河口を目指して東シナ海を横断する「南島路」を取るようになったのだそうです。五島が歴史の地になって現れるのはその後のことで、後期の遣唐使は、まず平戸から五島入りして、福江島の北側にある三井楽と言つ港で風

待ちをし、良しとなつたら大海に乗り出す「南路」を取つたのだそうです。中国本土まで順調に行けば三日の行程だったそうですが、小さな船に一二〇人の人が乗り組み、四隻で船団を組むのが通例だったそうで、勿論粗末な帆船。当時としては今のポトピープル以上の決死の覚悟で日本を離れたに違いありません。現にそんなに短い航海なのに、満足に目的地に辿り着ける確率は低かったとされています。弘法大師も五島から渡り、五島に戻つて来たとのことで、五島には大師ゆかりの寺も幾つもあるのです。逆ルートですけど鑑真人なんか日本に辿り着くまでに何度失敗したことやら。

次に五島が歴史に登場するのは一一九〇年頃のこと。平清盛の弟の平の家盛と言う人が一一八五年の壇ノ浦の合戦で負けた後、流れ流れて辿り着いたところが五島列島の一番北の島、宇久島だったそうで、ここで宇久氏を名乗ったと言います。逃げも逃げたり、良くもあんなところまで逃げたもんだと言う感じですね。平家の落ち武者が住み着いたと言うところは九州には方々にあります。この近くにも、へー、こんなところまで逃げて来たのか、と思うところが良くあるのです。その後、この一族は五島全島を支配する

ことになり、後に石田氏と名前を変えています。ですから石田城は八〇〇年の歴史を持つことになります。石田城址に行きますと、平の家盛から三十何代ものルーツのリストが石に刻まれています。

十六世紀に朝鮮半島を中心に暴れ回った倭寇の本拠地が五島だったと言つことも、此処に行つて見て改めて認識しました。確かにあれだけ込み入った島と海岸線のある五島は海賊の隠れ場所としては絶好だった筈で、後に最後の頭領となった中国人の五峯王直は、捕えられて処刑されるまで、今の福江でそれこそ王侯貴族の暮らしをしていたそうです。

五島城址と言つて、シツカリした石垣が残っています。徳川幕府が黒船対策として西の押さえを作ろう、と三十代目の盛成公の頃、それまでであった石田城を改築して一八四九年に造り始め、一五年掛けて作ったお城なのだそうです。日本で一番新しい城と言つことになりましたが、出来上がって直ぐに明治維新になり、役に立たなくなつて、明治五年に取り壊されて今は石垣だけになっています。黒船と言えばペリーの最初の来航が

一八五三年ですから、それより四年も前にこんな準備をしていたなんて、役に立つたかどうかは別として、幕府も仲々やるものだと思いました。そう言えば、黒船が来たと言うことで幕府が周到狼狽したとされていますが、当時の幕府はもっとシッカリしていたのだそうで、実際にペリーが現れる何年も前に、アメリカの議会在、ペリーを頭に日本に艦隊を送る決議をしたと言うことをオランダ経由の情報で知っていたと言われます。

私が五島を身近に意識したのは、一九七〇年頃のこと。石油ショックに遭い、日本も石油を備蓄せねばならないと言う意識が出来た時、所謂「油断」の時期に、洋上に大きなタンクを浮かべて石油を蓄えようと言う計画が出来、三菱重工が中心になってこの計画を推進していた時期がありました。当時は、国が船会社から大きなタンカーを何隻も借り上げて、中東で石油を満載にして来て、そのまま日本のそこに碇泊させて備蓄する、なんて、勿体ないことをしていた時期でしたから、こんな発想が出て来たのでしょうか。丁度長崎の香焼に三菱重工の一〇〇万トンドックが出来た頃で、このドックのサイズギリギリ一杯の、長さ一〇〇〇メートル、幅一〇〇メートルの巨大なタンクを作り、

石油を満タンにして、波の影響の少ない海に浮かべ、洋上備蓄をしようと言う計画です。地理的・物理的に好適地として五島が選ばれ、色んな経緯を経て時間は掛かったのですが、結局一〇〇万トン級のタンク五つが上五島と呼ばれる中通島の入り江に浮かんでいます。第二の計画として日立造船が中心になって福岡県の白島とか言うところを候補地にして計画を進めていましたが、防波堤を作ったらたった一回の台風で滅茶苦茶に壊れてしまい、修復に大変な苦勞をしたと聞いています。まだ完成したと言う噂を聞きませんが、どう言うことになったのでしょうか。

あんなに僻地の離島で、これだけ歴史に登場するところは珍しいのではないか、と思います。今は観光と漁業に依存する静かな島です。若い人がドンドン減って過疎化していると聞きます。確かに日中街を歩いて見ると、若い人と言うか、働き手と思しき人が殆ど歩いていないのです。人口の流失がそれ程酷いのか、と思いました。

港の近くのホテルで県の観光業者の会合があり、その後の宴会を早めに切り上げて寝んでいたら、大きなエンジンの音で起こされました。十二時を過ぎたばかりです。ベラ

ンダに出て見ると、小さな漁船が次々にエンジンを掛けて出て行くのです。一隻当たり三人が一組でチームになっている様子でした。これらの船は朝の六時頃には戻って来ます。漁師の仕事と言うのはこんなものなのでしょうが、これは又大変な仕事。ここの働き手は、昼間は寝ていて、夜になると船を出して働く、と言う過酷なパターンの仕事をしているのではないか、と思いました。昼間、若い人が見えなかったのも道理、と思ったのは考え過ぎだったでしょうか。

(平成七年七月)

カナダ旅行記

第八回卒業生の私たちは、卒業四〇周年を機に一年半から二年毎に有志で海外旅行を実施している。過去四回は東欧諸国、イタリア、スイス、フランスと、もっぱら欧州方面で、歴史と文化を訪ねる旅だったが、五回目の今年は九月二十一日から六泊八日でカナダへ行き、アメリカ大陸の大きさと雄大な自然を堪能して来た。今回の参加者はやや少なめの二五人だったが、内一人が同級生以外の奥さん方やその友人達で、これらの

方々が常連化して来ている。同級生のご主人が参加しなくてもご夫人だけが参加されるような風潮が生まれつつある辺りが、この旅行会の広がり心地良さを示している。ここまで続いて来ているのは、市原緑君のリーダーシップのお蔭である。今回の圧巻は恩師デンスケこと山田英明先生（旧姓西村）のご参加。六十七歳の一行の中に七十四歳が加わったが、旧生徒共よりお元気に完走された。団長は持ち回りだが、今回は団長 南隆君、副団長 辻知広君の下に一系乱れぬお行儀の良い旅行を完遂した。

時差の関係で、出発日当日の朝到着し、一日若返ったバンクーバーでは、疲れも見せず、そのまま市内観光後一泊。二日目からはバンフ二泊、レイク・ルーズとロッキー山脈を観光した。ガイドさんもビックリの上天気にも恵まれ、正にロッキの塊の美しいロッキーの岩山群を見物し、雪上車でコロンビア氷河を走行して氷河の後退の酷さに地球温暖化の現実を目の当たりにした後、最高級ホテル・フェアモント・シャトー・レイク・ルーズに一泊し、正餐の会食となった。その後、一気にトロントに移動して、自然の驚異ナイアガラ大瀑布をびしょ濡れになって見物し、今回の旅行を打ち上げた。今年の

カナダは、日本と同じく異常気象とのことで秋の訪れが遅く、最後のお目当て、メープルの紅葉を十分に楽しむに至らなかったのが唯一の心残りだったが、連日快晴の天気恵まれ、一同満足の旅行だった。

次回の計画もボチボチ出来つつある。今後も仲の良いこの旅行会を元気で続けて行きたい。

(平成十六年十月 長崎東高同窓会誌に投稿)

(続編)

ナイアガラにはカジノがあります。カジノの経験なんてないだろうと思われる方々に、「見るだけでもご案内しましょうか」と声を掛けたら、女性群を中心に一〇人ほどの団体が出来ました。ここのカジノはモナコ程の格調はありませんが、ラスベガス程賑やかでもありません。最初、見るだけの積りでブラック・ジャックのテーブルでルールの説明をしていたのですが、やって見せる方が興味深いだろう、と思つて、教授料の積りで二〇ドル分のチップを買い、説明をしながらゲームを始めたら、バカに憑いてドンドン勝つのです。勝つと後ろについている応援団が大騒ぎするものですから、隣でプレーし

ていた黒い人が応援に回ってくれ、ディーラーまでが調子が狂っていたようでした。勝つたり負けたりで一五ドルまで行ったところで止めて、ルーレットのテーブルへ行き、説明しながら二五ドル分負けて、結局一〇〇ドル換金しました。悪銭は身に付けず、直ぐに使ってしまうのが昔からの私の主義なので、元金の二〇ドルを差し引いた後の八〇ドル分、ホテルのバーで応援団にお礼のご馳走をして面目を施しました。翌日のバスの中で、「バクチなんて勝つと思つてやつても勝てるものではない。昨夜は、犠牲になつて皆さんにみせて上げよう、と言つ清い心だったので偶々勝つたのだ。バクチにのめり込んで身を持ち崩さないように」と挨拶して大いに受けました。

初めての宇治

七月に神戸で高校同期の集まりがあつたので出掛けることにしました。同窓会への出席は目的の半分以下で、神戸の息子一家と馬場ご夫妻に会つのが主目的でした。神戸の孫は野球に夢中で、現在小学校三年生ですが、四年生の野球チームに入って活躍中です。

毎日曜日が練習日とのことなので、炎天下を見物に行きました。チャンとユニフォームを身に付けて真っ黒になってやっていました。背番号三番を付け、定位置はサードだそうですね。三番(?) サード長島、背番号三。ジジ馬鹿の目で見ると、動きが素早くて正確。上手くなるのではないか、と思われました。練習が終わると直ぐに、一人で黙ってトンボを引き摺ってグラウンド整備を始めたのに感心しました。

京都御所に行ったことがなかったので、馬場夫妻を誘って行くことにしました。三ヶ月前から宮内庁で予約を受け付けます。思いついたのが二ヶ月ほど前だったので、御所の予約は取れたものの、同時に申し込んだ桂離宮と仙洞御所、修学院離宮は満員で予約が出来ませんでした。朝九時前に馬場兄と落ち合いましたが、夫人はお母さまの介護の都合で急に不参加になり残念でした。そのまま二人で京都へ。予約入場時間ギリギリに御所前の駐車場に車を入れ、係員の案内で三〇分一寸で御所を見学しました。

静かで美しい佇まい。流石に日本の中の日本、と言っ感じで他では感じるこの出来ない雰囲気です。丁寧な手入れもさることながら、予約で入場人数を制限しているのも

良いのでしょうか。噂にのみ聞いていた紫宸殿、建礼門、王政復古で有名な小御所などを拝見。御庭池が何とも美しかった。

ここまでは私のアレンジでしたが、後は全て馬場夫人のアイデアです。全部インターネットで調べて手配してくれたそうです。

御所の近くのイタリー料理で軽めの昼食をした後、宇治に向かいます。このイタリー料理屋の名前が「コロリ」と言う変な名前でした。イタリア語にも詳しい馬場兄によれば、コロリとはカラーの意味とのことでしたが、ご存知の通り、江戸時代に猖獗して多くの人が亡くなったコレラは当時、コロリと呼ばれて恐れられていました。食べ物屋の名前としては不適當なのではないか、と思いました。

平等院は聞きしに勝る美しさでした。一〇〇〇年前に建てられた鳳凰堂は両翼を張った鳳凰の姿を髣髴させます。国宝とのことですが、京都の寺院群と合わせて世界遺産に登録されているのも当然と頷けました。壁に掛けられた五二体の雲中供養菩薩像の彫刻が繊細で美しく、丁度五二枚のトランプになっていたので、お土産に求めました。珊瑚

五〇〇号打ち上げの旅は平等院を含む京都にしてはどうか、なんて考えていました。御所や桂離宮の予約は無理かも知れないけど、良い案だと思われませんか？

宇治では私にとって二つの大きな発見がありました。

馬場夫人がインターネットで探してくれた平等院の近くの宿は、宇治川に面した、「旅籠」と言った方が良いでしょう。寅さんが泊まりそうな小さな宿でしたが、直ぐ前に宇治川の中洲に渡る小さな橋がありました。欄干に「きせんばし」と彫つてあります。近くに「喜撰」と言う名前のお店がありましたので、これは「喜撰橋」なのでしょう。ペリ―が来航した時に、その時の騒ぎを茶化した「泰平の眠りを覚ます上喜撰（蒸気船）たった四杯で夜も眠れず」と言う狂歌がありますが、上喜撰と言うのはお茶の銘柄だったことを思い出しました。昔から宇治のお茶は名茶とされ、江戸時代の江戸っ子が、良いお茶を入れて一服することを「宇治を入れる」なんて洒落た言い方をしていたことがあったようです。折角ですからこのお茶を探してみようと思って、夕食を採った普茶料理の料亭の仲居さんやお茶屋のお店の人に聞いて回りました。喜撰と言うのは百人一首に

「わが庵（いお）は都の巽（たつみ）しかぞ住む　よを宇治山と人は言うなり」と言う歌を残した六歌仙の一人喜撰法師のことですが、宇治にはこのお坊さんが住んでいたと言う喜撰山と言う名の山があつてこの近くで採れるお茶に「喜撰」と言う銘柄があると云います。お茶屋で探してみました。そのお店に在庫がなかったので、方々に電話で聞いてくれましたが、結局手に入りませんでした。「上喜撰」と言うのは銘柄ではなくて喜撰茶の上等のものである（らしい）ことが分かりました。お茶屋さんの努力に感謝する意味で宇治茶の上等の煎茶をお土産にしました。

落語の「錦明竹（きんめいちく）」と言う噺は、骨董屋のお使いに来た人が、関西弁の早口で骨董品の説明をする部分が聞き所になっていますが、その内容は全く分からないけど、その中に、「ジザイはオウバクサン・キンメイチク」と言う部分があります。何のことだろう、と長いこと疑問に思っていました。広辞苑で「錦明竹」を引いてみると、落語の前座噺、としか出て来ません。「ジザイ」と言うのは、昔、囲炉裏の上になぶら下がっていた鍋を掛ける「自在鉤」の略、とのこと。自在鉤は竹で作られていますか

ら、「黄檗山（おつばくさん）錦明竹」と言うのは特別の竹で作った鉤の骨董品と言うことなのでしょう。以前、長崎の歴史を学ぶ会で、長崎の当家のお寺の隣にある興福寺と言う支那寺を見学したとき、この寺は十五世紀の半ば頃、当時の明から来た黄檗宗の隠元禅師が建てた寺だと言う説明がありました。黄檗山と言うのはここに由来するのかも知れない、と思っていたのですが、今回、馬場夫人のお勧めで「萬福寺」と言うお寺を見物することになり、行って見るとここが黄檗宗の本山とのこと。隠元禅師は長崎に上陸して、その後京都に行ったとは聞いていましたが、徳川四代將軍家綱の援助を得てここに黄檗宗の大本山を作っているのです。寡聞にして知りませんでした。黄檗宗は臨濟宗、曹洞宗と並んで日本三禅宗の一つなのだそうです。隠元禅師という人は明でも有数の高僧だったそうですが、請われて来日し、色んな文化を持ち込んだ人です。隠元豆は勿論、卓袱台（ちゃぶだい）なんてものもこの人が持ち込んだものと聞いていました。夕食がこれも馬場夫人がインターネットで探してくれた萬福寺の前にある「白雲庵」という普茶料理の料亭でした。普茶料理と言う名前は聞いて知っていましたが、こ

れも隠元禅師が持つて来た中国流精進料理とのことで、別名黄檗料理とも言つそうです。落ち着いたお寺の雰囲気のお食事を楽しみ、本当に良い経験をさせて貰いました。四人で卓袱台を囲むのが礼法とのことでしたが、この夜は馬場兄と二人、差し向かいで良く飲みました。お喋りが弾んで、五時半頃から始めて、気が付いたら看板の八時を一時間もオーバーしてしまっていて、お店の人に大変な迷惑を掛けました。

(平成二十一年八月)

野上弥生子

仕事を離れてから、それまでの無沙汰の罪滅ぼしの積もりで始めた地元同窓会のお世話の一つが小学校の同窓会です。今や毎年の新年会と年に一度の旅行会が定例になり、初の参加者も増えて来て盛んになります。この会は皆が本当に喜んでくれるので、世話役としても遣り甲斐があるのです。同窓会の世話役なんて、別に何の得になることもなく、傍から見たら、何が楽しくてやっているんだろつ、って思われるかも知れ

ませんが、終わった後で、皆さんに「楽しかった。ありがとう」のひと言を言って貰えることだけが喜び、みたいな感じですよ。こうしたことをやることに、別に苦痛を感じないでやれるのは得な性格だと思っています。

六年前に卒業五十五周年を祝う会、と言うことで全国レベルの会を企画したときは、一〇〇人を超す集まりになったのですが、直前に胆管癌が発見され、入院・手術と言うことになって、私が出たのは計画と諸々の手配までで、実施は一緒にやっていた仲間頼む羽目になりました。その後も、旅行会で長野の茅野に紅葉を見に行ったり、伊勢神宮で古稀を祝う会をやったり、福岡の八女に蛭を見に行ったり、由布院の温泉に出かけて途中で見事なコスモスの満開を楽しんだりして喜ばれています。

昨年、石仏を見たい、と言う会員の希望に従って、スペイン旅行から帰った直後の十一月に大分県の臼杵の石仏と国東半島の魔崖仏を見に行った時は、臼杵が四百年前にオランダ船のデ・リーフデ号が初めて日本に漂着し、日本とオランダのお付き合いが始まった因縁の場所だと言うことを知っていましたので、幹事特権を利用して、その漂着

記念の地も予定に含ませて訪れて来ました。白杵というところでは、昔から河豚の肝を食べる習慣があつたのだそうです。河豚の肝には毒が含まれていて危険なので、今は全国的に肝を食べることは禁止されているそうですが、こんな歴史的背景があるので、白杵でのみこれが許されているとのことで、これも旅の目的の一つにしました。幸い全員、河豚に当たらないで無事に帰って来ました。

白杵というところは野上弥生子を生んだ町です。私はそれまで野上弥生子と言つ人を意識したことがなく、読んだ記憶もなかつたのですが、折角行くのだから、と事前に二・三冊読んで見ました。夏目漱石に認められたほどの作家だ、とのことでしたが、特別に感心するほどのことはなく、何処が良いのだろう、と言う程度の認識だったので。白杵には野上弥生子の生家が残っています。小手川酒造と言つ造り酒屋で、今でもお酒を造っています。この酒屋に隣接して「文学記念館」がありました。

明治十八年の生まれなのに余程優秀だったのでしよう、白杵の田舎から十五歳で上京し、明治女子学院に入学しています。二十一歳で卒業して直ぐ、同じく白杵から出て来

ていた野上豊一郎と結婚していますが、これが後の野上弥生子を作った理由のようです。豊一郎は法政大学の総長まで勤めた学者で、この人の影響を大きく受けています。夏目漱石とは文学を通じての付き合いだと思えますが、その他、美濃部達吉・亮吉父子、宮本顕治・百合子夫妻、安倍能成、岩波茂雄、大内兵衛など当時の文化人と言われる人達との付き合いが知られています。最初は豊一郎を通じての付き合いだったと思われるのですが、それに止まらず、自分でもずい分と親しいお付き合いをされていたようです。と言うことは、これらの人達とそれだけの付き合いが出来るだけの教養と言っか力を持つていた人だったのだと思います。晩年は私の嫌いな大江健三郎も弟子扱いにして、一九八五年に一〇一歳で亡くなった時の葬儀の際は大江健三郎が世話役をやったそうです。

弥生子の甥が書いたエピソード集がありましたので読んでみましたが、「偉大なる常識の人」と言う評価をしていました。一般社会には殆ど出て行こうとせず、近所付き合いも少ない方だったとのことですから、目立った対外的な活動は殆どしていないようですが、後に芸術院会員になり、文化功労者に選ばれ、八十六歳で文化勲章を受章してい

ると言うのはこうした人達とのお付き合いがさせたものではないかと思われまゝ。

著書の数もそれほど多い訳ではありません。三十代前半の大正二年に、十九世紀初頭にアメリカのブルフィンチと言う人が書いた「The Age of Fable」と言うギリシヤ・ローマ神話集を翻訳して「伝説の時代」と言う本にしたのが、殆ど初めての著作のようですが、夏目漱石が「育児をしながらの大変な時期に良く書いた」と言う趣旨で序文を書いています。どうやら私がギリシヤ・ローマの神話に惹かれたのは、昔この本を読んだからではなかったか、と微かに思い出しました。私は、ギリシヤ・ローマの神話は聖書と並んで西洋文明の基礎になるものではないか、と思つています。文学にしても美術にしても、一寸した洒落た会話の中にも神話が出て来ます。重工にいた頃、若い人が欧州駐在になると言うので、アドバイスを求めて来ることがありましたが、その際には必ず「聖書と神話は勉強しておいた方がよいよ」とアドバイスしていたものでした。

弥生子は五十歳を過ぎてから、日英交換教授として渡英した豊一郎に随行して約一年間ヨーロッパに滞在していますが、その間に「欧米の旅」と言う紀行文集を書いていま

す。大分ボリユームがありますので、私が行ったところを選んで拾い読みしてみました。これから又海外を歩いて紀行文らしきものを書く機会があったら、参考にしたいな、と言う気持ちもありました。

当時の海外旅行は勿論船便ですから、上海から香港に渡り、シンガポール、セイロンから紅海に入り、エジプト経由でイタリアに入ります。その後イギリスからオランダ、スイス、フランスを回ってドイツまで行き、ハンガリーに立ち寄ってスペインに向かい、その後アメリカに渡って帰国します。昭和十三年の秋から翌年の冬まで一年と少しの間のことですが、この時期は日本が大東亜戦争に巻き込まれて行く直前のこと。この辺についても欧米で感じたことも記載されていて、仲々興味深い紀行文になっています。

私は観光旅行の価値は、行った先の国々やその土地について自分が過去に蓄えた知識が如何に豊富だったか、によって変るのではないか、と思っています。歴史にしても地理にしても芸術にしても、知識があれば見方が違って来て得るものも多い。外国に観光旅行に行っても、漫然と見て回るだけでは、単に、行って来た、と言うだけで残るもの

が何もないのではないかと思えます。

弥生子の紀行文を読むと、この辺の知識の集積が凄い。実は、私も紀行文らしきものを書く際は、この辺を意識して書いて来た積もりですが、この深さには足元にも及ばない、と言つ感じがします。神話に詳しいのは若い頃に上記の神話の翻訳をしたほどだったからでしょうが、何処へ行つても周辺の知識の深さには驚くばかりでした。それと観察眼の鋭さ、感性の豊かさ、表現力の豊富さなど、やはり名を残す人はそれだけのことがある。素人の駄文的紀行文とはダンチだと言つことを再認識しました。こんな比較を試みることにすら誠に失礼なことなのかも知れませぬ。

(平成二十三年三月五日)

壹岐の話

長崎には離島と呼ばれる島が幾つもありますが、その内の一つが「壹岐」です。こちらへ来て間もなくの頃、二〇年近く前に一度行ったことがありました。原の辻遺跡が発見されて間もなくのことだったと思いますが、行つては見たものの、遺跡を観光の一助

として紹介するような仕掛けも充分に出来ておらず、案内役がいなかったこともあって、充分な見物も出来なかつたような記憶が残っています。

この六月に二度目の壹岐行きをしました。今回は歴史の勉強会主催の旅行でしたので、シッカリした説明役が付いてくれたこともあって、意義のある見物が出来ました。この二〇年間でこの島の観光に対する姿勢が大分変わったのではないか、と思いました。観光施設の整備も充実して来ているし、それぞれの施設の説明役も優秀で、楽しませて貰いました。

以前、五島に行った時に全く同じことを感じたのですが、これらの島は何れも大陸との間に存在するだけあって、いずれも「歴史の島」だと言うことです。日本の中央からは全く外れているのに、その歴史が実に古いものなのです。京都や東京が日本の中心になったのは、歴史的には極く新しいと言ふことなのでしょう。

まず弥生時代の遺跡に始まります。支那の「三国志」の「魏志倭人伝」に記された、卑弥呼が支配していたと言う邪馬台国が何処にあったのか、はまだ確定されていないよ

うで、近畿地方という説と九州地方という説が残っているようですが、壹岐の原の辻(辻)はるのつじ)遺跡も有力な場所とされています。何でも魏志倭人伝に「一支国」と記されている国の場所と王都の位置の両方がハッキリしているのは壹岐だけなのだそうです。

日本と言う国が、書いたもの(文字)の上に表れるのは、二世紀に書かれたこの魏志倭人伝が最初ですので、「日本の歴史はここに始まる」と言う言い方をされることがあります。私はこれまでに何度も主張しているように、この見方は間違いだと思つています。確かにその時代には日本には「文字」はなかったけれど、日本人は存在していました。「歴史」も「文化」も持っていた。壹岐にもそれ以前の縄文時代の遺跡が残つていて、当時の土器も出土しています。これらは朝鮮や佐賀から来たものとされ、当時の壹岐が海を舞台に広く交流していたことが窺われます。それまでに既に立派な歴史を持っていたと言つことです。

私がこの「日本の歴史はここに始まる」説に反発を感じるのは、この「倭人」と言う言葉がどうやらシナ人が日本人を呼ぶ蔑称だと聞いたことがあるからです。何も蔑称を

もって日本の歴史の始まりだ、なんて有難がる必要はないのではないか、と思うのです。

この原の辻遺跡は一九九一年以来の発掘で多くの遺構や遺物を出土していますが、紀元前二世紀から紀元四世紀中頃まで栄えたとされており、中国から来たと思われる青銅器や銅銭、朝鮮半島から来たと思われる瓦質の土器や銅製品、日本各地から来たと思われる土器が残っていて、壹岐が日本とシナ、朝鮮半島の架け橋になっていたことが判ります。人も日本からだけでなく、朝鮮半島からも渡って来ていたことが窺われます。これらは「一支国博物館」に紹介されています。

次に現れるのが古墳です。日本の古墳時代は三世紀末に始まるとされていますが、壹岐の古墳は五世紀のものが一番古く、大部分は六世紀後半から七世紀初めのものとされ、二七〇基もの古墳が残されているそうです。長崎県内にある古墳の六〇%以上が縦一七キ口、横一五キ口と言うこの小さな壹岐の島にあるとのことですから、当時は余程進んだ地域だったのでしょう。副葬品の中には大陸や朝鮮半島から来たものが多く見られ、ここでも壹岐が交易の中心であったことが窺われます。

文永の役と弘安の役の元寇の際は、五島や対馬と共に蒙古兵の通り道になって大きな被害を受けた島ですが、特に一二八一年の弘安の役のときは四万の蒙古兵の襲撃を受けて日本軍は全滅したそうです。その時の日本軍の総大将だった少弐資時（しょうじにすけとき）を祀った神社が残されています。

秀吉の朝鮮出兵（一五九一年）の際は平戸藩がこの島に城を築き、食糧・軍馬・武器などのロジスティックスの拠点になりました。

この島は明治・大正・昭和に亘って電力の普及と振興に務め、戦後は電力事業の民営化を推進し、日本の産業経済発展の基礎を築いて、電力王・電力の鬼と呼ばれた松永安左衛門出生の地です。電力事業に止まらず、戦後の産業全般に亘って多くの提言をして来ていて、これが記念館に残されています。二・三覗いてみましたが、いずれも現代にも充分通じる提言で、骨太の懐の大きな経済人だったことが判ります。昨今の原発の事故を予言するような提言もありました。遺言状が残されていましたが、これも見事なもので、葬儀不要、勲章位階は要らぬ、財産は遺族には遺してはならぬ、など小気味が良

いほどでした。政治家嫌いが貫かれています。唯一池田勇人元首相は評価されていたようです。遺言状の執行を池田氏に依頼してありましたが、池田氏は、安左工門より先に亡くなっています。

今回、充分な予習が出来ましたので、私が主催している小学校の同窓会旅行の候補地にして、来年辺り連れて行って上げようかと考えています。（今年は既に十一月の天草行きが決まっていますので・・・）

（平成二十三年七月）

愛国行進曲

「大八洲（おおやしま）」と言つ古い言葉を覚えていますか？ 戦中派の正会員の諸兄はご存じでも、お若いご夫人方は無理かも知れませんね。ご存知の通りこれは日本国の美称です。私がこの言葉を知ったのは、戦時中に盛んに歌つた「愛国行進曲」の歌詞でした。

見よ 東海の 空明けて 旭日高く輝けば

天地の正気 澆刺と 希望は踊る 大八洲・・・

日本国のことを大八洲というのは日本の国が最初八つの島から出来上がったことが、古事記や日本書紀に書かれた神話に記されているからです。イザナギの命（男神）とイザナミの命（女神）が柱の周りを回ってまぐわって（セックスして）八つの島を産み落とす訳ですが、まず、最初に産んだのが「淡路島」とされています。二番目が伊予で「四国」、三番目が「隠岐の島」、四番目が筑紫島で「九州」、五番目に「吉岐島」が来ます。六番目が「対馬」で七番目が「佐渡島」。最後の八番目が「豊秋津州」で本州の一部の順番だったというのが有力な説だそうです。古事記の時代には日本の北端は佐渡島だったそうで、それより北は存在せず、東北や北海道は島の数に入っていないようです。

一昨年十月に歴史の勉強会のフィールドワークで吉岐に行った時は、この認識がなかったのですが、その後、このことを知る機会があったので、昨年五月に小学校の同級生二〇人ほどを連れて、吉岐に一泊旅行をした時、ガイドさんの説明に割り込ませて貰って、この話を披露し、ついでに神話にはエロの部分が多い話を披露して喜ばれました

た。吉岐の島、は「生き」に通じるのだそうで、島が動いて仕様がなないので、八本の柱で繋ぎ止めておいたのだそうです。その内の二本がまだ残っていて、有名な「猿岩」もその内の一本だ、と言う話にも興味を持って貰えました。

吉岐には月読神社と呼ばれる古くて小さなお社があります。日本の国を造ったイザナギの命が左の眼を洗ったら天照大御神が生まれ、右の眼を洗ったら月読命と言う神様が生まれたとされています。天照大御神は太陽で昼を担当し、月読命は月で夜を担当します。月読神社は京都・鹿児島・伊勢・東京など全国各地にあるそうですが、京都の月読神社は吉岐から分霊されたものとされ、月読神社はこの吉岐に始まったとも言われています。因みに、イザナギの命がその後鼻を洗ったら、素戔嗚尊（スサノオノミコト）が生まれたと言われ、この三人の神様はご兄弟とされています。

神話では、もう一つ面白い話があるので、ついでにご披露しました。天照大御神が弟のスサノオの命の悪戯に手を焼いて、怒って天の岩屋に隠れてしまった話はご存知かと思いますが。太陽が隠れてしまったので世の中が真っ暗になってしまい、困った神様たち

が集まって、どうしたら出て来て貰えるか、を相談しました。その結果、岩屋の前でアマノウズメの命と言う女の神様が裸踊りをして皆で大騒ぎをしたのです。大御神が何ごとかと思つて、石の扉を少し開けたところで、力自慢のタジカラオの命がその扉を引き開けて遠くに放り投げてしまつて、大御神に出て来て貰い、世の中が明るさを取り戻して、メデタシ、メデタシになるのです。天の岩屋と言われる洞窟は宮崎県高千穂の天岩戸神社の奥にあります。洞窟の前までは行けず、川を挟んで向こう岸に見える小さな洞窟だったように記憶していますが、その時放り投げられた石の扉がなんと長野の戸隠まで飛んで行つて、「戸隠」の名前の由来になっていると聞くことを聞いていました。私の末の弟が定年後の第二の職場として勤めたのが長野だったので、一昨年四月に長野市の善光寺の近くに住んでいる弟を訪ねたとき、勿論、蕎麦の本場・戸隠に連れて行って貰いました。本場の蕎麦を二つの有名な蕎麦屋を梯子してご馳走になつて、これは流石で素晴らしいと思ひました。蕎麦の話をするなら、戸隠の蕎麦を食べなくては語る資格はないな、とすら思つたのですが、戸隠には何処かに、この高千穂から飛んで来た石

の扉があるに違いないと思って、探して回りました。大きな石碑にでもなっているのではないか、と思ったのです。蕎麦屋のおかみさんやお土産屋の店員さんたちに聞いて回りましたが分かりません。遂に戸隠神社の神主さんに尋ねたところ分かりました。その神社から正面に見える戸隠山という山がありました、その山が天の岩屋の石の扉だということです。遠目に見ても確かにゴツゴツの岩だらけの山でした。やはり神様のすることとは違う。宮崎県で投げ飛ばした岩の扉が長野県まで飛んで、山になっているのです。

私はギリシャ・ローマの神話が好きで、子供の頃に良く読みましたので、覚えている話もあります。欧州に行った時、美術館に行くと、これらの神話が絵画や彫刻の題材になっていることが多く、何だか親しみが持てて、知っていて良かったな、と思っただし、三菱重工時代に、欧州の駐在に出かけると言う後輩がアドバイスを求めて来たときには、必ず、「聖書と神話を勉強しておく」と良いよ」と言っていたものでした。

日本の神話は「古事記」や「日本書紀」に記されている訳ですが、戦後の教育の中では、WGIP（戦争犯罪周知計画）の一環として神話の教育なんて禁じられていた筈で

すから、戦後の子供たちは、日本の神話に接する機会は持たせて貰えなかったのではないだろうか。

私ももう一度、こんなに夢のある日本の神話に接する機会を作ってみようかな、と思っ
ています。
(平成二十四年五月)

アメリカ旅行

一. プロローグ

我々長崎東高の第八回卒業の同窓生の有志が二年に一度海外旅行をしている話は何
度かご紹介しています。一昨年は急逝した前任者から私が世話役を引き継いでスペイン
とポルトガルに行ったのでした。この回が卒業年次と同じ八回目にあたるので、これで
最後にしよう、という約束で引き受けたのですが、大層上手く行ったものですから、
旅行最終日のリスボンでの打ち上げ会の席で、「こんなに楽しい会は是非もう一度やっ
て欲しい」と言う演説をする人が出て来て、それに乗ってアジる人も出て来たので、逃

げる訳に行かなくなり、「二年後に生きていたら、何か考えましょう」と言う宣言をさせられる羽目になりました。

私は以前から、アメリカ東岸にはもう一度行ってみたいな、と言う気持ちを持っていました。旅行に行くなら歴史の深みが感じられる欧州の方が好きなんだけど、アメリカ東岸にはご贋品のフェルメールの絵が沢山あるのです。アメリカにはもっぱら仕事の関係の出張で五回訪問し、合計で六一泊滞在していますが、観光目的の見物は限られたものになっていたし、当時は未だフェルメールには関心を持っていませんでしたので、これらのフェルメールの絵は観たことはありませんでした。私は、三六枚とも三七枚とも言われるフェルメールの作品の内、これまでに二〇枚の本物を実際に観ていますが、ニューヨークとワシントンに、合わせて一二枚もあることを知っていましたので、これらを観てみたいものだ、と思っていたのです。リスボンで、「もう一度考えましょう」と宣言した時に頭の中にあっただのは、この計画に結び付けることでした。

今年、約束の二年目が来ることになったので、昨年末にアメリカ東岸行の一応の案を

立ち上げ、旅行会社とも下打ち合わせをした上で、「こんな案で良ければ企画しますが、
どうですか？」と言うアンケートを出しました。皆さん体力的にも大分弱っておられる
ので、参加者も多くはないだろうし、連泊の多いユックリした旅行にして、一〇人以下
位なら自分で世話をしながらやれるのではないかと、言う程度の軽い気持ちでアンケー
トしたのでしたが、二〇人を超える方々から、「参加したい」との回答が来てビックリ。
これはやはり専門の添乗員を頼まないと、とても世話をし切れない、と判断するに至り
ました。前回お願いした阪急交通社とＪＴＢの二社から三つの案を出して貰って比較検
討し、競わせた結果、前回と同様に阪急交通社の既存のツアーを買い切る形とし、これ
にこちらの希望を出来るだけ入れてもらう形で計画が出来ました。ブロードウェイ・ミ
ュージカル観劇も入ったツアーですが、これなら最初の想定よりも格段に安いものにな
ります。阪急のツアーはあまりユックリ旅行ではないけど、勘弁して貰うことにしまし
た。ツアーで設定したそのままの値段で買い切りをするのなら二五人以上の人数が必要、
とのことでしたが、少し足りないので、若干上乘せした値段で折り合うことにしました。

このツアーは日本航空が今年の四月から成田・ポストン間に直行便を就航させるので、その記念として作ったツアーとのことでしたが、買い切りが決まれば、こちらにも主導権が出来て来ます。自由行動だった時間にお目当ての美術館訪問を含めて貰ったり、美術館の滞在時間を長くして貰ったり、食事に注文を付けたり、最終日に打ち上げ会を開催するための会場を作って貰ったりしました。首都圏以外からの参加者も多かったのですが、出発前後の日本国内の移動に安値の航空券を手配させることにも成功しました。長時間のバスでの移動は年寄りには辛いので、一番長い移動を列車のアムトラックに出来ないか、を交渉し、少し追加料金を払えば出来ないこともない、と言うところまで漕ぎ着けたのですが、駅の構内をお爺さんとお婆さんの集団が大きな荷物を引き摺ってソロゾロと移動する情景を想像したら、これは避けた方が良いな、と判断せざるを得ず、移動は原案通り全部バスにしました。

実施は九月ですが、半年前の三月には正式の案内状を送って参加者を絞った結果、二二人の参加になりました。ご夫妻での参加が三組、男性の単身参加が四人、女性の単

身参加が一人と言う女性優位の団体になりました。この内同窓生は約半数、後は恩師が一人と奥さまとかご親族とかご友人とか。

九・一テロの後、アメリカへの入国制限が厳しくなっていて、事前にESTAなる申請をして認可を取っておかねばなりません。インターネットで米国大使館に申し込んで一四ドル払うと簡単な手続きで取得できることが分かりました。旅行会社に手続きを頼むと、これに加えて五〇〇〇円の手数料を取られます。参加者にも自分で取れることを勧めたのですが、出来る人が意外に少なく、その内の五人分は私が代理で手続きすることになりました。

二・JAL再生のこと

JALの再上場が決まったとのことで、出発直前に稲盛会長がNHKのインタビューを受けていました。多額の借金を踏み倒したことに對するお詫びと協力へのお礼に始まり、大勢の従業員の首を切ったこと、JAL・OBの年金を削って年金受給者に迷惑をかけたこと、社員・役員の給与カットや待遇の改悪で協力を得たこと、などの経営改善

の要因を挙げていましたが、再生成功の一番の要因は、親方日の丸の精神構造を変えたことだ、と言っていました。大分昔、山崎豊子が「沈まぬ太陽」にJALの内情を描いていたことがありましたが、小説とは言え、例によって山崎豊子流の綿密な調査の結果書かれたものとのことで、全部が事実ではないとしてもかなりの実情を語っていると聞いていました。生え抜きの社員と国からの天下りの連中との葛藤、営業の部局と人事・管理の部局の勢力争い、これに複数の労働組合が複雑に絡んで来ての内部抗争の酷さが描かれていて、こんな会社は外に向かつて力を発揮することは出来ないのではないか、と思っていました。ですから今回の倒産を機にまともな会社になるなら、それはそれで良いのではないか、と思っていました。

今回の旅行では国内便、国際便ともJALを利用しました。JALを利用したのは本当に久しぶりででしたので、この間どんな変化があっていたのかは知りませんが、今回乗ってみて、大分変わったな、との印象を受けました。アメリカ行の便はこの四月から成田・ボストン間に新たに出来た航路とのことで、機材も最新鋭機のB七八七で立派でした。

エコノミーの団体席もユツタリしているし、お客に対する社員の対応にも、客商売をしている、との意識が窺えます。機中のサービスも大分違って来たな、と思いました。スチュアーデスのサービスにも温かみを感じられました。往路の機中で一行の中に気分が悪くなった人がいましたが、当たり前のこととは言え、その対応も素早く親切で見事でした。食事も洗練されていて、食後のデザートにはハーゲンダッツのアイスクリームが出て来たし、二度目の食事は、たいめい軒のオムライスでしたが、これが美味しかった。稲盛さんは社員の意識改革が再生の一番大きな要因だ、と言っていました。こんな当たり前のことで再生出来たということは、それまでの意識がどんなに酷いものだったのかな、と思わざるを得ませんでした。

一三時間のフライトでしたが、各個人用に映像装置が付いていて、映画を二本ほど観た後は、ゲームの中に囲碁と麻雀を発見したので遊び始めたら面白くて、往復とも全く寝る暇がありませんでした。囲碁を中級、麻雀を上級でやって一度も負けませんでした。が、両方とも私の実力はとてもそんなレベルではないので、機中の時間を不愉快なもの

にしないために易しく調整してあるのだらう、と考えることにしました。

三・フェルメール

フェルメールは疑問作を含めて、三七枚の絵しか遺していないことはご紹介したことがあります。私はいままでその内の二〇枚の現物を見ています。以前ご報告した時は一八枚でしたが、その後、渋谷文化村と西洋美術館に来たのを一枚ずつ加えて二〇枚になっています。もつと見てみたいな、と言つ願望が今回の旅行を企画する動機になったのですが、アメリカ東岸にはワシントンのナショナル・ギャラリーに四枚、ニューヨークではメトロポリタン・ミュージアムに五枚とフリック・コレクションに三枚と合計一二枚あるのです。今回の旅でこの内の出来るだけ多くを見て来たいと思っていました。ナショナル・ギャラリーとメトロポリタン・ミュージアムは大抵のツアー旅行のコースに含まれているのですが、フリック・コレクションが含まれているコースはありません。今回は買い切りツアーにした強みと幹事特権を利用して、これをコースに入れて貰うことに成功しました。まず、ナショナル・ギャラリーのフェルメールは分かり難いところ

に展示されてありましたが、このところ日本の観光客にはフェルメールの人気の高いと
かで、案内人が真つ直ぐ連れて行ってくれました。先日來テレビで、かなりのフェルメ
ールおたくと思われる青山学院の福岡伸一と言う教授が盛んに宣伝していましたから、
こんな後押しがあるのかも知れませんが。一枚が貸し出し中でしたが、残りの三枚の内、
「天秤を持つ女」なんかが仲々良くて、無理して來た甲斐があつたな、と思いました。
メトロポリタン・ミュージアムでは五枚中二枚が貸し出し中で見られませんでしたが、
「水差しを持つ女」が良かった。フリック・コレクシヨンは貸し出しを禁止しているそ
うで、ここでは三枚とも見ることが出来ました。「女と召使」がフェルメールらしく、
何か深みを感じさせてくれて一番気に入りました。結局、今回の旅行では目標の一二枚
中九枚しか見ることが出来ませんでした。これで私が見た絵の数は二九枚になります。
残りの七・八枚は世界中に一枚ずつ散在しているし、個人所蔵に近いものもあるので、
もうこの辺でお終いかな、と思っています。

この内の私のお気に入りの五点を挙げて見ますと、西洋美術館で見た「真珠の首飾り」。

暖かみと優しさが感じられる絵です。重量感と迫力満点の「牛乳を注ぐ女」、これはアムステルダム国立博物館。ルーブルで見た可愛い小さな絵の「レースを編む女」。デン・ハーグのマウリッツハイスにある「デルフトの風景」、これは精緻な絵と言っ感じます。一番人気のある「真珠の耳飾りの少女」はマウリッツハイスで何度も観た絵ですが、私にとってはやっと五番目に入ります。今回の「女と召使」とどちらにしようかな、と言ったところです。平成二十一年一月にご紹介したりリストを更新して再度ご紹介します。

四・マンマ・ミーア

今回のアメリカ東岸行は私の趣味と希望を参加者の皆に押し付けてしまった感、無きにしも非ず、です。もっとも最初から「こんな計画なら世話役をやっても良いですが、どうですか？」と宣言して始めた企画ですから、皆さんも承知の上、と考えても良いのでしょうか。フェルメールについては別項の通りですが、このツアーを買うことに決めた大きな理由の一つが、ニューヨークでのブロードウェイ・ミュージカル観劇が含まれていたことでした。演目には注文が付けられない、とのことでしたが、本場の雰囲気を感じ

じることが出来るなら、演目は何でも良いな、と思っていました。ブロードウェイでのミュージカル観劇は大分以前に「ア・コーラスライン」を観て以来二度目です。ところが出発の五日ほど前になって、演目が「マンマ・ミーア」に決まったことを知らされて飛び上がりました。本場のブロードウェイで今一番お気に入りの「マンマ・ミーア」が見られるなんて願ってもないラッキーです。今回の一行がどの程度ミュージカルに興味があるか分からないし、英語の歌や台詞では理解が出来ないだろうと思って、出発前日の結団式の席で一五年六月号の本誌に投稿したマンマ・ミーア紹介文のコピーを配り、「機中の退屈しのぎに予習しておいて下さい」と言っておきました。丁度、成り立ちから筋まで書いてあるので、格好の予習の材料になったと思います。

当日は大急ぎで夕食を済ませ、開演ギリギリにブロードウェイのウインターガーデン劇場に飛び込みました。やはり本場の迫力は凄い。「チキチータ」や「I have a dream」の場面では感激で涙が止まらなくなりました。一行の内、三人ほどにはお気に入りの演目だったようで、熱心に観ていましたが、殆どは旅の疲れと食事の際のアルコールの所

為もあつて、最初からお休み時間になっていました。ところが後半になって盛り上がつて来たら、全員が眼をパツチリ開けて、最後のノリノリの部分では、全員が立ち上がつてリズムに合わせて手を振り腰を振つて踊っていました。大成功。終わつてからも「良かった、良かった」の連発。予習も役に立つたようで面目を施したことでした。

五・行程

九月二十日のお昼に成田発。使用したボーイング七八七型機は、その後事故で話題になりましたが、私どもの飛行には全く支障なく、快適でした。十三時間の機中の苦行の後、同日のお昼頃ボストンに着いてそのままバスでフィラデルフィアに向かう強行軍の初日でした。途中、トム・ソーヤーのマーク・トゥエインの生家と「アंकルトムズ・ケビン」のストウ夫人の家のあるハートフォードに寄つて、夕方フィラデルフィア着。初日の辛さを事前に予告して大分替しておいた所為もあつて、皆さんも覚悟が出来ていたようですが、流石に疲れて時差を感じる余裕もなく、初日から皆さん良く眠れた様子でした。二日目はフィラデルフィア観光。ここはアメリカ独立のシンボルみたいな街で

すが、如何にも歴史が浅い感じですが。立国が江戸中期のことですから、仕方ありません。独立記念館や自由の鐘を見物した後、ワシントンに向かいました。途中、ボルチモアに寄り、インナー・ハーバーなる観光名所と称するところに連れて行って貰いましたが、如何にも人工的でアメリカ的な、無理に作り出したようなワーフ・エリアで、あまり評価出来ません。古い街並と言うことで売り物のエルフレス小径なるところも訪れましたが、少し古めのレンガ建ての家並みが一〇〇メートルほど続いているのみ。こんなものを観光施設と称しているのか、と気の毒になる程でした。三日目のワシントンはお決まりのアーリントン墓地のケネディ夫妻のお墓とリンカーン記念堂。ここで別項のリンカーンとケネディの偶然の一致を一部の人にご披露しました。プロの案内人を差し置いて、知ったかぶりをするのも憚られたので、大っぴらなご披露にはしませんでした。ホワイトハウスと国会議事堂を見た後、お目当てのナショナル・ギャラリー。午後はスミソニアン宇宙航空博物館。そのままニューヨークに移動して、四日目はジョン・レノンが暗殺されたダコタ・ハウスと名曲「イマジン」の碑を訪れた後、お目当てのメト

ロポリタン・ミュージアム。美術館に出来るだけ時間を取りたい、と言う希望の要請が効いて、一時間半ほどユックリ鑑賞が出来ました。午後は自由の女神クルーズ。前日がオバマ大統領の誕生日だったとのことで、ジェット機が五機で空にお祝いの絵文字を描いていました。その後、これもお目当てのフリック・コレクションに直行したので、グランド・ゼロは見損ないました。若い添乗員がなかなか常識的な人で、「悲劇の場所を観光名所にするなんて抵抗を感じる」なんて言っていましたから意図的に外したのかも知れません。大急ぎで早めの夕食を済ませて、ブロードウェイ・ミュージカル「マン・ミーア」。その後、ニュージャージーの丘に登ってマンハッタンの夜景を見せて貰いました。最終日は朝からボストンに向かい、午後はビーコン・ヒルなる名所に行きましたが、これもアメリカの観光資源の貧しさを示すような十八世紀の街並でした。今回訪れた都市の内、私が初めて行ったのはボストンだけでしたので、これらの観光地も二度目・三度目のところが多かったのですが、アメリカは自然の景観は別として所謂観光国ではない、と言うことを感じました。観光土産も通り一遍で貧弱です。マサチュー

セツ工科大学（M I T）は玄関を訪れたのみで、最後にハーバード大学の構内をユツクリ見物して打ち上げとなり、九月二十五日発・二十六日着で帰国しました。今回は迷子探しに走り回ることもなかったし、健康面でも少し具合の悪い人も出ましたが大したことはなく、事故もなく無事幹事役のお勤めを果たすことが出来ました。

今回の旅は、美術館三つに博物館が一つ、ミュージカル観劇と大学見物、と文化に溢れた旅になりましたが、どうやら私の趣味を押し付けた感が強く、最後のご挨拶でその点に触れてお詫びを申し上げたことでした。皆さんの満足度は高かったようで、「もう一度」のお願いの聲が続出して困っています。こちらは経済的な理由もありますので、これからは国内旅行でお茶を濁す程度で勘弁して貰えないか、と検討して見ることにしています。

（平成二十四年十月）

恐ろしい程の偶然の一致

同じようにアメリカ大統領の現役で暗殺されたリンカーンとケネディの間に驚くべ

き偶然の一致があったとこのことで、左記の coincidence を教えてくれた人がいます。自分で確認した訳ではありませんが紹介します。少々無理なこじ付けの部分もありますが、恐ろしいほどの一致点があったことが分かります。

Abraham Lincoln was elected to Congress in 1846.

John F. Kennedy was elected to Congress in 1946.

Abraham Lincoln was elected President in 1860.

John F. Kennedy was elected President in 1960.

Both were particularly concerned with civil rights.

Both wives lost their children while living in the White House.

Both Presidents were shot on a Friday.

Both Presidents were shot in the head

Lincoln's secretary was named Kennedy.

Kennedy's secretary was named Lincoln.

Both were assassinated by Southerners.

Both were succeeded by Southerners named Johnson.

Andrew Johnson, who succeeded Lincoln, was born in 1808.

Lyndon Johnson, who succeeded Kennedy, was born in 1908.

John Wilkes Booth, who assassinated Lincoln, was born in 1839.

Lee Harvey Oswald, who assassinated Kennedy, was born in 1939.

Both assassins were known by their three names.

Both names are composed of fifteen letters.

Lincoln was shot at the theater named 'Ford'.

Kennedy was shot in a car called 'Lincoln' made by 'Ford'.

289

Lincoln was shot in a theater and his assassin ran and hid in a warehouse.

Kennedy was shot from a warehouse and his assassin ran and hid in a theater.

Booth and Oswald were assassinated before their trials.

こんな偶然はそうそう他にはないのではないのでしょうか。恐ろしい偶然と言つものはあるものなのですな。

(平成二十四年六月)

対馬に行きました

四月の初め、小学校の同窓生一〇人ほどを連れて、対馬に行つて来ました。小学生同期の同窓会は私が主催していて、毎年必ず新年会をやります。卒業生二九四名の内、こちらで掌握している物故者が三五人、住所不明の人も多くて連絡できる人が一七〇名程度ですが、県外に出ている人も多く、長崎での新年会への出席者は四〇人程度です。その席で希望の上がつたところに、その年の内に旅行するのが年中行事になっています。その年の実行委員会で行先を検討するのですが、長崎の土地に住んでいながら、離島に行ったことのある人が意外に少ないのです。今年は、対馬に行きたい、と言つ希望が多かったと言つことです。先般ご紹介した「長崎楽会」で年に一度、東京の会との合同でフィールドワークと称する旅行会が催され、これには出来るだけ参加することにしてい

ますが、三年前に吉岐に行ったので、これを下見と捉えて、翌年の一昨年はこの同窓生を連れて吉岐に行きました。一昨年はこの長崎楽会で対馬に行っていたので、今年の対馬行は準備が楽に出来ました。

最初は昨年十月に行く予定で計画を作ったのですが、時ならぬ大型台風の影響で、丁度その日の対馬行の船便が欠航になってしまったので、止む無く中止にしました。でも、この会は気持ちの良い会で、直ぐに「残念会をやりたい」、との声が盛り上がって、二日後には残念会をやりました。その席で、「中止ではなくて延期と言うことにしてくれ」との要請が出たので、四月に復活したのです。この半年の間に、燃油サーチャージとやらが大幅に値上がりしたし、消費税の増税もあつたし、会員自身や周辺のご親族の都合などで参加者も大分減つたので、単価はずい分高いものになりました。

対馬と言うところは昔から韓国との繋がりが強いことは承知していましたので、あまり行つて見たいところではありませんでした。一昨年初めて行つて見て、更にその感を強くしたので、続けて行くのも躊躇われたのですが、図らずも二年続けて行く羽目にな

りました。そう言えば、私の韓国に対する偏見には大分年季が入っています。三菱重工にいた頃も、韓国との商売は出来るだけ避けて来ましたし、韓国への出張は他の人に譲って来ました。ですから、初めて韓国に行ったのは、ハウステンボスに来てからで、集客のプロモーションに二度ほど出掛けたのみです。

対馬はイザナギ、イザナミの命が生み落とした大八洲（おおやしま）の中の最初の八つの島の内、吉岐に次いで六番目に生まれた島で、日本で十番目の大きさ（七〇〇平方キロ）の島ですが、朝鮮海峡を挟んで韓国とは四九・五キロの距離なのだそうで、博多からの航路が一三〇キロ、一番近い長崎との直線距離で一〇〇キロ程度ですから、むしろ韓国の方に近い島です。「対馬」と言つ名前も韓国側から見た島の形が、馬が向かい合つて草を食んでいる姿に似ていると言つことから名付けられたと聞きました。

地理的な要因が主な理由でしょうが、歴史的にも対馬は韓国との繋がりが強いのです。有名な宗主家と韓国との繋がりは切つても切れないものがあつたようです。宗主家の、日本と韓国の間を取り持つ外交ではずい分と苦労が多かつたようで、案内人がその歴史

も詳しく説明してくれました。江戸時代に入ってから朝鮮通信使についても詳しく説明して貰いました。「通信」と言っからコミュニケーションのことかと思っていましたが、これは「信を通ずる」と言っことなのだそうで、お互いの信頼関係を大切にしよう、と言っことなのだそうです。一六〇八年から一八一一年の間に一二回に亘っ大がかりな「通信使」と称する使節団を受け入れ、幕府のある江戸まで四々五〇〇人規模の大行進をしていたのです。今の韓国と「信」を通じることなんて出来るのでしょうか。

最近の韓国からの観光客は年に二〇万人、その観光収入が四〇億円とかで、対馬が経済面で韓国に大きく依存していることが判ります。現在の島の人口が三・三万人だそうで、それも年々大きく減少の傾向にあるそうですから、この観光客の経済効果の大きさが想像できます。行って見ると、韓国からの団体客が我が物顔に歩き回っているし、お店もこの人達を大事にしているのが良く分かります。タックス・フリーの店も幾つかありました。でも、お店の人たちからは、お行儀が酷い、との苦情が多く聞かれました。ゴミやティッシュはその辺に捨て散らかす。トイレや風呂場を汚す。釣ツアーが多い

が、禁止されている撒き餌を平気でやる。登山に来る人が多いとのことですが、ゴミは捨て放題など日本人観光客では考えられないような行動が聞かれました。一番困るのは漂流ゴミで、朝鮮半島に面した西側の海岸は、発泡スチロールや医療器具などの漂流ゴミで覆われていました。

韓国からの観光客を受け入れるための税関が、北部の比田勝港に作られています。釜山からの船が毎日この港に入り観光客を受け入れています。

ハングル語で「対馬は韓国の領土」と胸に大きく書いたデザインの上着を着たグループが来るのだそうです。こんな無作法な人たちが来るのを許して、それでも経済的に助かると言うことで、対馬の人たちがペコペコしているようで、どうにも気に入りません。韓国人が土地をドンドン購入しているのだそうです。国境の島ですから、小規模ではあっても、陸・海・空の自衛隊が駐在しているのですが、基地の周辺の土地が韓国人に買い占められつつあると聞きました。これを規制する法律がないのも可笑しいことだと思います。先般、銅造の釈迦像が韓国人に盗まれたことで大きな話題になりました。

犯人が見付かっても、元々韓国から持ち出したものだから返さなくても良い、なんて言っているそうです。盗難に遭ったと言うお寺を行程に含めて貰いました。仏像が盗まれた寺ですから何も無い場所を見るだけですが、せめて実態を知って貰いたい、帰ってからそうした事実を周囲で話題にして貰いたい、と言う気持ちを入れて見て貰いました。宝物殿を破って宝物を盗んだ例もあるそうで、お寺の本殿も鍵を掛けて自由に入れないようになっていました。

海彦・山彦の神話の起源となる豊玉姫を祀った二つの神社や元寇が襲来した時の激戦地を見物し、対馬を治めて来た宗主家の歴史を勉強。日露戦争の日本海海戦が行われた海峡を見物して、その土地の人たちが海戦で沈められたロシアの軍艦の兵隊を助けた美談を聞きました。絶滅種になっている対馬山猫を見物。北端の、釜山が見えると言う韓国展望台まで行きましたが、靄の所為か、PM二・五の所為か空が霞んでいて韓国は見えませんでした。

浅茅湾では芋崎港を訪れました。ここは一八六〇年にロシアのポサドニツク号が来航

して対馬を不法に占拠した時に拠点としていた港です。幕府の力ではどうにも出来なかつたところを英国領事のオールコックが他国の領事を糾合して、これを退去させてくれた謂れのある港です。偶然に、最近の勉強の所縁の地を訪れることが出来ました。

対馬は九〇%が山地とのことで、何処へ行くにも石段を登らねばならず、年寄りには辛い旅です。私は前回の旅行でこれを承知していましたが、足の弱い仲間には一番楽な一四〇段の石段の方は少し無理をして登らせ、厳しい方の二七〇段の方は一部の人には諦めて貰って、下で待っていて貰う、などの配慮が出来て下見の効果を上げました。幸いお天気に恵まれ、往復のジェットfoilも平穩な航海を楽しむことが出来、皆さん事故もなく喜ばれた一件落着でした。

(平成二十六年四月)

吉原悟一君

吉原悟一君の早世に当たり、告別式では弔辞を
読んだし、追悼文集の編集長を務め、自身も投稿
した。同人誌「珊瑚」にもこの辺の紹介をした。

重複する記述もあるが、全部を紹介する。

吉原悟一君のこと

吉原悟一という人は、私の中学時代からの幼友達ですが、昭和三十四年夏に有備館での合宿に参加してくれたことがあるので、覚えておられる同人がおられるのではないかと思います。思い出話を書かせてもらうことにしました。

彼は雲仙岳の麓、小浜温泉から四キロほど登った山の中で育ち、ここで小学校を卒業

したのですが、父親の勧めで中学から長崎に出て来て、下宿生活をしながら、高校までを過しました。朴訥で飾らず誠実な性格で「悟一ちゃん、悟一ちゃん」と皆に愛された人でした。私はこの初期からの大切な友人で、少し勉強し、沢山遊んで、戦後、武道が解禁になって直後の中学三年の頃から一緒に柔道を始めました。高校卒業後は滋賀大学に進み、柔道部のキャプテンも勤めました。一橋の合宿に参加してくれたのは、この頃のことです。始めた頃は彼の方が強かったのですが、合宿の時、久し振りに手合わせを試してみたら私の方が相当上になっていましたし、何かの弾みで学業の成績表を見せたら、それ程大したことはなかったのに、優の数も私の方が彼よりも大分多かったです。ですから大変に感心して、入社試験か何かの時に、「尊敬する人物」の欄に私の名前を書いて物議を醸したことがあったそうですから、彼も私のことを評価してくれていたのではないか、と思います。

柔道を始めて三ヶ月ほどで初めての対外試合に出たときは、彼が先鋒、私が次鋒でした。高校一年のとき、一緒に初段の試験を受けに行ったのです。彼が問題なく勝ち進ん

でいるのに私の方がモタモタして仲々成績が上がらないので、自分が試合をしながら、隣の試合場で試合をしている私の方ばかり見て心配しているものですから、試験官から「真面目にやれ」と注意を受けていたことがありました。

卒業後はコスモ証券に就職して東京に出て来たので、社会人になってからも付き合いは続いていました。二十数年前に私が長崎に戻ってからは、少し疎遠になっていましたが、お互いに自由になってからは私が上京すると一度は彼の家に泊めて貰い、飲みに行ったり、ゴルフに出掛けたりしていました。その内に在京の高校の同期生二〇人ほどが私の上京に合わせてゴルフ会を開催してくれることになったので、その際は必ず前夜に彼の家に泊まり、その晩は囲碁の手解きを受けて、翌朝、彼の車で一緒に行くのが通例になっていました。尤も囲碁の方は、私が碁石を手にするのは年に二回、この機会だけでしたが……。彼の奥さんはお箏のお師匠さんで若い頃に「一公会」と言う一派を立ち上げ、お弟子さんも多くて隆盛を誇っています。娘さんを東京藝術大学の邦楽科に進ませる程の実力の持ち主です。悟一君はこのお師匠さんと娘さんのマネジャー役として、

お二人の活動にも大きな力になっています。私もここ一〇年近く、年に一度のこの会のおさらい会を拝見に出掛けることにしています。

その彼がこの七月に急逝したのです。私は直前の四月に上京し、例によってゴルフをしましたし、ご家族とも食事を共にしました。この日の彼のゴルフは調子が良くて、久し振りに一〇〇が切れた、と喜んでいるほどの元気でした。今回の四月の上京中には珍しく一緒になることが三度もあつて、最後は離京直前の四月の末に軽く一杯やったのでした。

私が帰つた翌日、体調の不調を感じて医者に行つたら、すい臓がんが既に肝臓に転移していることが判明し、最悪の事態、手術は不能、と宣言されました。本人が「余命は一年ぐらいか」と医者に聞いたたら、「それ以内」との反応だったそうです。その日の夜に電話があり、本人の口からこの知らせを聞いたときは、ビックリすると共に、これはいけないな、と思つたものです。

見事だったのは、最初から「俎板の上に乗つた鯉の心境だ」と言っていて、最後まで

その姿勢を崩さなかったことでした。

その後は通院で抗がん剤の治療を受けていましたが、効果は薄い様子でした。私は本人や奥さんや見舞いに行ってくれている友人達から逐一電話で報告を聞くのみでしたが、七月の初めになって、五月から六月にかけて行った治療の効果を検査して貰ったら、全く効果が現れていない、と言う判定を受けてそのまま入院。その後病状は急激に悪化したようでした。奥さんから、最後の機会になるかも知れないので来て欲しい、との連絡を頂戴し、その翌日の七月十二日、朝一番の便で上京して、その日と翌日の二度病院に見舞いました。その時は、苦しんではいたけれど、頭と気力はシツカリしていて、昔話なんかこちらよりも正確に覚えているほどでした。別れる時に握手をしたのですが、シツカリした力強い握手でした。流石に顔はタオルで隠して見せませんでした。キツと永の別れを覚悟して泣き顔を見せなくなかったのでしょうか。私は十四日に一旦長崎に戻ったのですが、その翌日には意識が混濁して来て酸素の吸入が始まったと言いますから、全く良いタイミングでお別れが出来たことになります。

私がお見舞いして三日後の七月十六日午後、「今、亡くなった」との知らせが奥様から届きました。再度上京して通夜に参列し、ご依頼を受けてご葬儀では弔辞を読んで来ました。

ご家族には酷な言い方になりますが、これは理想的な死に方の一つではないだろうか。発病してから二カ月半。三ヶ月前まではゴルフを楽しみ、半月ぐらい前までは囲碁の間が見舞いに来ると相手をしていたと言います。身体が不自由になったり、ボケが来て五年も一〇年も周囲に迷惑を掛けて生きている、なんてみっともない事態には陥らず、最後の一週間ほどは苦しんだのでしょうか、これは私を含む年寄りが理想とする「ピン・コロリ」の部類の死に方ではないか、と思います。

五月の第一回目の入院後、自分史を書き始めていました。「後一〇年ぐらいは大丈夫だと思っていたが、こんなことになったので、書いてみることにした」と言っていました。が、ノートにビッシリ八〇枚ほど書いてありました。「もう長くはない」と覚悟を決めて書き始めたのだと思います。整理を頼まれて持ち帰り、パソコンに打ち込む作業を

したら、A四ビツシリで一七枚、二万四千字ほどになりましたが、あの状態で良くこれだけ書けたもの、と感心するばかりでした。何十年も前のことを正確に思い出して書いています。昭和三十四年夏の有備館での合宿のことも書いてありました。会社の関係では先輩やお客さんへの感謝の言葉が主になりますが、その記憶が実に細かく正確なので、残念ながら、結婚して荒川に家を建てた辺りで終わっていて、最後までは到達しておらず未完成交響曲になっていますが、これを中心にして、自分史・追悼文集を作ろうということにしています。編集長を引き受けることになり、一二〇人ほどの候補者に追悼文投稿の依頼状を出して、原稿集めに掛かり、印刷屋との打ち合わせをやっているところです。

(合掌)

(平成二十三年八月号「珊瑚」より)

弔辞

故吉原悟一君のご霊前に哀悼の辞を述べさせていただきます。

悟一ちゃん！

七十を過ぎて亡くなった君への呼びかけとしては、不適切かも知れませんが、我々仲間にとっては、君はどうしても「悟一ちゃん」なのです。「悟一ちゃん」「悟一ちゃん」と、君ほど皆に親しまれ、愛された人はいませんでした。

君は雲仙岳の麓の小浜の山の中の小学校を卒業した後、教育熱心だった父君の勧めで長崎に出て来られました。一人で下宿生活を送りながら長崎中学校・長崎東高等学校で勉学に励み、優秀な成績を修められました。朴訥で誠実で飾らない君の人柄は誰にも何処に行っても愛され、「吉原さん」の名前は知らなくても「悟一ちゃん」の名前は知っている、と言う人がいるほどでした。君自身も、自分は両親に良い名前を貰った、と言っていたことがありますね。私は、君が長崎に出て来て直ぐの頃から友人としてお付き合いをさせて戴きました。一緒に少しは勉強し、沢山遊んで、戦後解禁になって直後の柔道も一緒に始めたのでした。一緒に茶道も少し齧りました。

小浜の山の中のお宅にも何度も招んで戴き、ご家族の皆さんからも歓迎して戴いたの

ですが、六人兄弟の長男の君はご両親、妹さん、弟さんたちの愛情と尊敬を一身に集める存在でした。ご兄弟姉妹の仲の良さは半世紀以上経った今でもそのままに続いていて、見ているも気持ちが良いほどです。

滋賀大学に進まれ、元の大阪屋証券、今のコスモ証券に就職されました。仕事のこと
はあまり良く存じませんが、君の人柄が多くの人に愛され、仕事の上でも大きなプラス
になったことは容易に想像できます。その確かな証拠があります。奥さまの初江さん
のお母さまはお客さまの一人だったそうですが、君はそのお母さまに見初められて、自分
の娘を託すに相応しい人だ、と思われ、最高の伴侶を得られたことです。君も、自分は
良い女房に恵まれた、と言っていましたね。私は結納の際に、君のご両親役、仲人の運
転手役、友人代表役を勤めさせられたのでした。その後は史直君、佐知子さんの一男一
女に恵まれ、幸せな家庭を作られました。

君が偉かったのは、お箒のお師匠さんをされていた奥さまをズツと支援して来られた
ことです。ご存知の通り、奥様は若くして、「公会」と言ってお箒の一派を立ち上げられ、

活動を続けておられます。お二人のお見合いの場が、この「一公会」立ち上げの第一回目の会だったのです。その後「一公会」は、専門家の方々が驚き、感心するほどの隆盛を誇り、今年は四十二回目を数えます。初江お師匠さんは多くのお弟子さん達を育てて来られましたが、一番の出色は実の娘の佐知子さんで、難関東京藝術大学の邦楽科を卒業されて活躍中です。君は佐知子さんの活躍にも大きな力になっています。孫娘の眞生ちゃんのお守りを小さい頃から引き受けて活動を支えて来ました。今や、眞生ちゃんが一番の友達は悟一お祖父ちゃんだ、と聞いています。清徳寺のご住職さんに頂戴したご法名「眞徳院諦與悟道居士」の最初の文字が眞生ちゃんの「眞」の字でした。ご住職さんに伺ったら、全くの偶然で使った字だ、とのことでしたが、余程のご縁を感じています。佐知子さんは昨年、第一回目のリサイトをなさいましたが、リサイトの後のご挨拶で、「父が元気な内にリサイトをやって聞いて貰いたかった」と言う意味の、とても良いご挨拶をなさいました。本当に良いことをして上げられたな、親孝行が出来て良かったな、と思っています。

退職の後は、この奥様と娘さんのお筈の活動の支援活動の傍ら、好きな囲碁やゴルフを楽しまれていましたが、この四月の末に身体の異常を感じ、医者に行つた時は、既に病魔は手遅れの段階に進んでしまっていました。我慢強くて人に心配を掛けるのが嫌い、と言う生来の君の優しい性格が禍いしたのだと思います。

私がガンを患つた経験を持つていふこともあつて、この直後に長崎の私のところに電話で知らせて来たのが、私がこのことを知つた始めでした。その後は奥さん、息子さん、娘さん、ご兄弟姉妹達、囲碁やゴルフの仲間達と、大勢の人達の励ましを受けながら闘病生活を送られました。遂に帰らぬ人となりました。

見事だったのは、君の最悪の宣告を受けてからの毅然とした態度でした。最初から「板の上の鯉の心境だ」と言つておられました。最後までその姿勢を崩しませんでした。鮮やかな覚悟でした。同じ年齢の私も遠くない将来にこうした覚悟をせねばならない場に立たされると思いますが、見習うべき姿勢だと思つています。

それにしても早過ぎた。もっともつと長生きして貰つて、ゴルフや囲碁を楽しんで貰

い、君の周囲にあの穏やかな暖かい雰囲気振りまいて貰いたかったと思います。

十二の年で君と出会い、長年友人としてお付き合いが出来たことを心から誇りに思い、本当に良かったと思っています。

今は只ユツクリ休んで下さい、と申し上げるばかりです。

遺された奥さま、史直くん、さっちゃん、妹さん、弟さん方には、難しいこととは思いますが、一日も早くこのショックから立ち直って、お元気に過されることを心から願っています。

悟一ちゃん、さようなら。

平成二十三年七月二十二日

友人代表 長島 達明

悟一ちゃんとの別れ

吉原悟一くんの逝去に当たり、追悼文集「ごいつ

ちゃん」を制作し、本文を投稿した。

私が悟一ちゃんの病いを知ったのは、平成二十三年五月九日夜の本人からの電話でした。「アー 吉原です」と言いつ何時もと変らない屈託のない明るい声に始まる電話で、雰囲気は普段と全く変わらず、明るい声で「オレさー、ガンに罹ってしまったよ」と言うのです。それが彼との別れの始まりでした。

私はその直前の四月に上京し、この間珍しく悟一ちゃんとは三度も一緒にいます。私の上京に合わせて高校同期のゴルフ会を設営してくれていましたが、東日本大震災の直後でもあり、自粛しようと言つことになって中止にしました。それでも全くなくなるのは残念なので、同じ日に有志だけでプライベートにやろうと言つことにしました。前日から彼のお宅に泊めてもらい、その晩は近くのすし屋で奥さんも一緒に頂いてご馳走になって、四月七日に久松晃君、杉本健君に付き合っ貰って、彼のメンバーコースのやさど国際カントリークラブでやったのでした。この日は悟一ちゃんの調子が良く、良く当たってスコアも九五で、「久し振りに一〇〇が切れた」と言っ大変喜んでいました。帰ってから柴原純一郎君、松尾一誠君も来てくれて、佐知子君一家、鷺津さんも加

わって近くの中華料理屋でご馳走になりました。悟一ちゃんは宴の終わりの頃は孫の眞生ちゃんをお花見に連れ出したりしていました。会が盛り上がっている中で、眞生ちゃんが疲れて飽きが見えたので、その眞生ちゃんのお守りと、盛り上がっている大人どもの雰囲気を壊さないように、と言う彼一流の心遣いだったのだと思います。会食の後、お師匠さんの一番弟子で私がファンになっている一鳳さんのパブに行こう、と言うことになったのですが、悟一ちゃんは疲れているから、と言うことで一人帰って、お師匠さんと鷺津さんの三人で行くことになりました。パブ「花祭」では女性三人に囲まれ、「変な形の二次会になったな。オレはどうしてこんな場にいるんだろう」「なんて思いながら、それでも楽しく飲んでいたのでしたが、考えてみると、彼はこの時に既に身体の変調を感じていたのでしょうか。その後、十一日と二十五日に囲碁会で一緒になり、何れも軽く飲みました。私は四月月末に帰崎したのですが、悟一ちゃんはその直後に身体の不調を訴え、医者に行っているのです。

五月九日の電話の内容は「お腹が張るので、四月二十六日に主治医に相談したら、電

磁波で検査した結果、肝臓ガンと診断された。肝臓が原発ではなく、どこかから転移して来ていると思われるので、大学病院で再検査を受けるように勧められた。早速日本医科大学でCTの検査を受けたら、原発はすい臓ガンであることが判明した。結果を聞きに行ったのが昨日のことだったが、奥さんと二人の前で『最悪の事態』と宣告された。手術は出来ないので、抗ガン剤の治療をすること。『一年ぐらいの命か』と聞いたら、それ以内、の感触だった。」とのことでした。私が六年前に胆管ガンを患って手術を受けていたので、アドバイスを貰いたい、とのことでしたが、何のアドバイスが出来る訳もなく、「抗がん剤の治療は辛いから、栄養を取って頑張れ」と言う他ありませんでした。すい臓のガンが肝臓に転移した、と言うのは正に最悪の事態です。聞いた瞬間、これは危ないのではないか、と思ったのです。

早速、その日の内に柴原が見舞いに行ってくれ、その後電話で様子を聞いたり、奥さんからの電話でご報告を頂いたりしましたが、事態は良い方向には向かっていませんでした。

柴原がセカンド・オピニオンを求めることを盛んに強調していましたが、セカンド・オピニオンは患者本人と周囲のご家族の納得代として考えるもので、私は医者を用いて治療して貰うのが一番良い、と考えていました。医者を信用しなくなつては直る病気も直らないのではないか、と思つていたので、あまり積極的ではありませんでした。本人も医者任せよう、と言う気持ちが強いようでしたし、史直君が医者に頼んでフィルムや経過報告書を貰つて来て検討している、とのことなので、これで充分だと思ひました。結局、史直君のインターネットでの調査の結果、NK細胞とやらの治療を試みることになり、これが充分セカンド・オピニオンの役割を果たしたと思つています。三〇数年前に私の母がガンの末期を迎えた時、珠光会と言う診療所に相談に行ったことがあります。本人の血液で血清を作つて貰つて、これを投与すると直るかも知れないし、直らないとしても最後が楽になる、と聞いて早速試みたのですが、確かに大きな効果があったと思われます。このNK細胞の治療も同じ種類のものだと思ひましたので、お勧めしたのでした。結局、この治療は二回のみ行いましたが、三回目は間に合わなかつた、

とのことでした。

早速、抗がん剤（ゼムザール）の投与が始まりました。五月十日に日本医科大学付属病院に入院し、五月は十二日、十九日、二十七日の第一クール。第一クールの第三回目以降は通院での投与になりました。家で美味しい好きなものを食べて体力を付ける、と言う医者への配慮だったのではないか、と思います。副作用で酷い目に遭っているのではないか、とそればかりが心配で、本人や奥さんや見舞いに行ってくれている柴原や松尾の様子を聞きましたが、それほど酷い副作用は現れていない、とのことでした。電話に出て来る本人の声にも張りがあつて、普段と全く変わりません。食欲は落ちているが吐き気も左程ではないし、脱毛もないと言います。「過去に鍛えた自分の体力が抗がん剤に耐えているのだろう」と言つて元氣付けていました。退院直後の五月二十一日には結婚四十周年のお祝いの会をやっています。

見事だったのは、最悪の事態を宣告されてからの彼の姿勢でした。最初から「俎板に乗った鯉の心境」と言っていました。その姿勢を最後まで崩しませんでした。五月の

入院後、自分史の執筆に取り掛かっています。本人は「後一〇年ぐらいは大丈夫だと思っていたが、こんなことになってしまったので、書いてみることにした」と言っていました。あの状態で良く書けたもの、と感心します。あの達筆な自筆でノートにビッシリ八〇枚ほど書いてありました。何十年も昔のことを実に正確に覚えています。お世話になった方々への感謝の部分が多いのですが、姓名から、先輩の場合は卒業年次、勤務先からその役職まで。自分の仕事に対するシツカリした考え方も述べてあります。退院後も自宅で書き続けていたとのことですが、見事なものです。最後までは到達出来ず、結婚して家を持った辺りで終わっていて、未完成交響曲になっているのが残念ですが、整理を頼まれてワープロに打ち込みながら、この自分史は多くの人に読んで貰いたい、これを中心に追悼文集を作ろう、と思ったのでした。

六月に第二クルルの治療が始まりました。十日、十七日、二十四日にゼムザールを投与していますが、流石に辛くなって来た様子でした。電話の声にも元気がなくなっていて、弱って来ている様子が窺えました。「抗がん剤はがん細胞もやつつけるけど、同時

に健康な細胞も傷めつけるものだから、体力の維持が大切だ。それには口から食べるのが一番大事だ」と言い続け、こちらからも食べ易そうなものを見繕って送ったりしました。第一回の入院中から退院後、六月に入ってから困暮の仲間は連日のように見舞いに行ってくれていたようですが、必ず相手になり、六月二十三日には自宅に朝長保生君、下永昌弘君、坂本善弘君、久松晃君の四人が集って午後一杯困暮大会をやったそうです。ゴルフと困暮が何よりの楽しみで、困暮をやっている間は辛さを忘れる、と言っていましたから、良いお見舞いをしてくれたものと感謝しています。

六月三十日と七月一日に治療の効果を調べる検査をし、その結果が判ったのが七月八日でしたが、効果が全く現れていない、と診断されたのでした。衰弱の具合と脱水症状を見て、即入院を勧められ、翌九日に入院したとのこと。その後、病状は急激に悪化の一途を辿ったようでした。

七月十一日夜の奥さんと柴原からの勧めで、翌十二日の朝一番の便で上京し、十二日には松尾と、十三日には柴原、松本公良君と一緒に見舞いました。思ったほど痩せてい

ず、顔の色艶も良くて、がん患者特有のどす黒くくすんだ顔色ではありませんでしたが、流石に苦しうでした。痛みは腹部全体にあるとのことでしたが、ひと言で言って「しんどい」とのことです。どうにもならない全身の倦怠感と腹部全体の痛みに襲われていたものと思われます。すい臓が破れて膵液が体内に流れ出すと、それが自分の内臓を消化し始めるので酷い痛みに襲われる、と聞いたことがあります。その痛みではなかったでしょう。それでも頭と気力はシッカリしていました。昔話をすると、我々より正確に当時のことを覚えているし、「何も食べたくない」と言いながら私の目の前でメロンを四分の一ほど食べてくれたのも、「口から食べる」と口喧しく言っていた私に対する心遣いではないか、と思いました。見舞い客に対して、「暑かっただろう」とか、「冷蔵庫に冷たいものが入っているから食べる」とか、「お茶を飲め」とか、自分が苦しい中で、人に対する思いやりを忘れないのも変らぬ悟一ちゃんでした。

彼の思いやりについては思い出すことが多いのですが、一つだけご披露します。中学三年のとき一緒に、戦後禁止されていた学校柔道が解禁になった直後の柔道を始めたの

です。高校一年の時、一緒に初段の検定試験を受けに行つたのですが、彼は強くてドン・ドン勝ち進むのに、私がモタモタして仲々成績が上がらないものですから、自分のことよりもこちらの方を心配して、自分で試合をしながら、隣でやっている私の試合の方ばかりを見ているものですから、試験官に「真面目にやれ」なんて注意されていたことがあります。お蔭で二人とも首尾良く黒帯になりました。

以前自分が熱を出して苦しかった時、背中をさすって貰つて大層気持ち良かったことを思い出して、かなり強くゴシゴシと背中をさすって上げましたが、若い頃から鍛えた背筋はまだまだシツカリしていました。帰る時、握手をしたのですが、力強くて病人とは思えないほどでした。それでも手を出しながら、顔はタオルで隠していました。キツと永の別れを覚悟して涙を隠していたのに違いありません。

私は七月十四日に一旦帰崎したのですが、直後の十五日に柴原から連絡があり、酸素吸入が始まったこと、意識が混濁して来たことを知らせてくれました。私は全く良いタイミングでお見舞いに行けたことになります。

七月十六日午後、奥さんからの連絡で十四時十三分のご逝去を知りました。ご依頼により弔辞を読むことをお引き受けし、柴原に葬儀委員長をやって貰うことにしました。二十一日に生田俊介君と一緒に再度上京して、通夜に参列。二十二日のご葬儀での弔辞には私の思いを十分に籠めることが出来たと思います。

十二の年で悟一ちゃんと知り合い、あの暖かい人柄と付き合って六二年。彼の早世は惜しんでも余りありますが、その最後を私の弔辞で送って上げることが出来て本当に良かった。こんな機会を与えて下さった奥さまに感謝しています。

(合掌)

318

吉原悟一君の追悼文集制作

昨年七月に私の幼友達で親友の吉原悟一君が亡くなったことはご報告しました。彼が死の直前に自分史を書き始め、未完成交響曲ではありますが、かなりのボリュームの文を遺して逝ったこともご報告しましたし、これを元に「自分史・追悼文集」を作ろうと思ったこともご報告しました。

「ご遺族や親しい友人に相談したところ、是非やろうと言つことになり、私が編集長を引き受けることになりました。言い出しついで仕方がなかったこともありですが、この種の作業をまだ億劫がらずにやれることを証明してみよう、自分を試してみたい、と言つ気持ちもありました。こんなことは「鉄は熱い内に打て」の例え、出来るだけ早く立ち上げた方がよいので、コトの直後の昨年八月には会社の関係者、大学の関係者、中学・高校の友人、ご近所の皆さん、ご親族などの一三〇人程度に、追悼文制作の趣旨を説明し、原稿を依頼する勧進帳を発送しました。あまり無理強いすることは避けよう、と言つ趣旨でお願いしたのですが、思ったよりも反応が良くて、年末までに想定を大幅に超える九〇近い原稿が集まりました。集つた原稿を読んでもみると、故人が色んな方面で周囲の人に愛され、親しまれた存在だったことが窺われ、多くの方が原稿を寄せてくれたのも、故人の人徳のお蔭だな、と思いました。原稿を頂戴した方には漏れなくお礼を添えて受領の確認状を出しましたが、どうした訳か中学校時代の恩師へのお礼状が先方に届いていなくて、強烈なお叱りの手紙を頂戴する、なんて一幕もありました。お礼状

がパソコンに残っていたことと、発信の日を日記に記録してありましたので、申し開きが立って事なきを得ました。

やっている内に知恵が出て来るもので、故人が生前に書き残した、母上や息子・娘たちへの手紙だとか、自分で書いたご挨拶状的なものも出て来たので、これらも遺稿集ということにして、紹介することになりました。

当初は、二万四千字の自分史部分に同じ分量程度の追悼文部分を加えて、五万字程度の本になるのではないかと想定して始めたのですが、結局これが一七万字を超える字数になりました。

最初、印刷屋は故人の奥さまと付き合いのある東京の印刷屋に頼むことにしたのですが、メールや電話で打ち合わせをしてみると、どうにも頼りないのです。私が持ちかけるアイデアにピンと反応してくれない感じがしないので早めに諦め、奥さまの了解も得て、当地の印刷屋に頼むことにしました。この印刷屋は私がハウステンボス時代に付き合いのあったところで、信頼のおけるところなので、早速担当者を探し出して打ち合わせの

機会を持ちましたが、私が考えている方向にスンナリ付いて来てくれそうです。実際の発注は四月頃になります。やり方・進め方の打ち合わせを一月の内に済ませて万全の体制を取りました。故岡崎信夫の「夭折」と故渡辺雅司の「寛容と努力の人」を作ったのは、もう四〇年近く前のことになるし、この時は、印刷屋との交渉はもっぱら野口兄にお願ひしていた記憶があるので、私にはノウハウはあまり残っていませんでしたが、出来上がりなんかのイメージはあの二冊が大いに参考になりました。

私が、自分の「自分史」を手作りで作った時の知恵で、原稿をパソコンに取り込んでから編集・印刷すると、物凄く楽なことが分っていましたので、印刷屋との最初の打ち合わせでこのことを提案してみましたら、印刷屋もこのアイデアに直ぐ乗ってくれ、生の原稿を持ち込むよりも数等安くやってくれることを確認しました。見積を取ってみると、生の原稿を持ち込むのに較べて三分の二くらいの値段になります。九月頃から原稿が届き始めましたが、届いた分を片っ端から私のパソコンに取り込む作業に掛かりました。パソコンに取り込む関係上、メールで送って貰うのが一番有難い、とお願ひしたの

でしたが、大部分は手書きかワープロによる投稿でしたので、打ち込みの作業が大変でした。作業自体は手作業なので、届く度にボチボチ打って行けば良いのですが、夫々に故人の思い出が綴られているので、これを否応なしに何度も読まされる羽目になり、私はその度に思い出が甦って、何時まで経ってもこの早過ぎた別れのショックから立ち直ることが出来ず辛い思いをしました。

四月の上京時にご遺族との最終の打ち合わせを済ませ、帰宅後のゴールデンウィーク中に印刷屋との最終打ち合わせと発注。二回の校正を経て、六月十九日には納品。ご遺族に選んでもらった写真を中心にカラー写真のページが四ページ、文中に皆さんから提供して貰った写真五〇枚程を配置したA五版三二〇ページの立派な「ごいっちゃん」と言う題名の自分史・追悼文集が出来ました。ご遺族のご希望により五〇〇部を作りましたが、これで印刷屋への支払いが六〇万円程度ですから、お値打ちだと思いましたが、一周忌への参列は、遠隔地なのでご遠慮しようかと思っていたのですが、本の納品と打ち上げを兼ねて参列せざるを得なくなりました。七月一日の一周忌ではお返しとして参

列者の皆さんにお配りして喜ばれ、戻ってから、原稿をお願いした方や写真の提供を頂いた方にはこちらからお礼状と共にお送りして、一年間の作業を打ち上げにしました。

一番親しくしていた幼友達の最後をこのような形で送って上げることが出来て、良いことをしたな、と思いましたし、私もまだまだやれるぞ、と言うことを確認した久し振りの大事業でした。

（平成二十四年七月号「珊瑚」より）

小林 敏教君

ハウステンボスが開場して間もなく、販売本部長室に電話があつた。「唐島です」と言う。誰だか分からず、聞いて行つたら「家里だ・家里だ！」と言う。養子にでも入つたのか、名前が変わっていたが、長崎東高の三年八組で一緒だったのを思い出した。ハウステンボスに来ていると言うので、事務所に来て貰つた。話を聞くと、ハウステンボスの大ファンだそうで、この事業を始めた神近社長を大いに尊敬していると言う。佐世保で本屋をやっているが、お店に神棚を作り、ハウステンボスのお土産品を飾って朝夕

拝んでいるなどと言う話をしていた。日を替えてご馳走したいと言うので、当時、ハウステンボスの最高級和食のお店だった「伊万里」でご馳走になった。その時に連れて来てくれたのが小林敏教君だった。小林君とは高校時代は同じ組になったこともなかったし、全く初対面みたいなものだったが、その後はゴルフを中心に付き合いが始まった。唐島君とはその後、佐世保に出ると本屋のお店に寄って裏の倉庫みたいなところで話をしたりしていたが、暫くして本屋を閉めてお店も売ってしまった。その後、膠原病とか言う難病に取りつかれ、お宅には何度も見舞に伺ったが、その内に病が進んで見舞を受けられるのも辛い様な事態になったので、その後はスツカリご無沙汰することになった。

小林君とはその頃、友永禊郎君が主催していた東八会のゴルフ会で度々一緒するようになった。友永君が東京に行ってしまったてからは私が幹事役を引き継ぎ、ダントツに上手かった小林君を会長格にして平成十九年から七年程幹事役をやった。この会も最初の頃は三組位出来たのでコンペ形式でやっていたが、一人二人と減って行って、最後の頃は一組がやっとの状態になった。特に平成二十二年に小林君が大腸がんで入院手術する

事態になってからは、全く人数が揃わず、コンペが成立しない状況が続いた。小林君は手術後の抗がん剤の副作用に苦しんだが、医者者を替えてから元気になり、治療具を付けたままでゴルフを始め、始めれば相変わらず上手くて、我々の会でも再三に亘って賞品を持って行ったし、本拠地の長崎国際でもシニア公式競技で優勝した、と喜んでいたこともあった。リーダー格の小林君の体調が不安定になり、参加者も揃わなくなったので、この会は平成二十五年の九月に解散することにした。

昨年秋に再度調子が悪くなり、福岡の病院に入院したと聞いたので、本人にメールを送ったりハガキを出したりして、見舞に行ける状態なら行きたい、と伝えてあったが、全く返事がなかった。この四月の初めに奥さんから電話があり、自宅に帰っていることを知った。本人が、ゴルフ関連の品を上げたいので、私に送ってやってくれ、と言っていると言つので、それなら受け取りに伺つから、と言つことにしてその日の内に見舞に行った。秋口に再発が確認され、福岡の病院に半年間入院、長崎の虹ヶ丘病院に転院して一ヶ月、本人の希望で自宅療養をすることにし、寝室を病室にした由で、自宅のベッ

ドに寝ていた。点滴のみで生きている状態とのことだったが、意識はしっかりしており、その辺のことも話してくれたし、古いゴルフボールや長崎国際の帽子をくれた。痛みも左程ではない様子で、痛み止めもモルヒネではなく座薬を使っているとのことだった。その所為で意識もハッキリしていたのだろう。

ゴールデンウィーク明けに奥さんから電話があり、もういけないので葬儀の時に弔辞を読んでくれ、との依頼があった。事の前にこんな依頼を引き受けて良いものだろうか、とも思ったが、弔辞を頼まれたら断るものではない、名誉と違って二つ返事で引き受けるべきだ、と言うことをどこかで聞いた覚えがあったので、お引き受けした。付き合いがそれ程深かった訳ではなく、エピソードもあまりないので、西島伸治君と野中弓さんに応援を頼み、それらを入れて弔辞は直ぐに出来上がった。

二日後の五月十日に亡くなった旨の連絡があり、その日に丁度長崎に出掛ける予定があったので、夕刻、帰りにお宅に伺ってお参りした。奥さんは疲れてお休み中とのこと、娘さんが相手をしてくれて最後の様子を伺った。翌十一日のお通夜は失礼して、

十二日のメモリード大橋での葬儀に参列し、弔辞のお役目は滞りなく済ませた。三月の伊藤裕美ちゃんとの結婚式で親族代表挨拶をさせられた際、意外に口が回らないことに気が付いていたので、二・三日前から発声練習をしておいた。その所為でハッキリとした口調で弔辞が読め、好評だった。

葬儀に出て行ったら、遺族の親族としてハウステンボスと一緒に働いた荒木由紀君と林田三紀君の姉妹が参列していたので驚いたが、小林君の実姉が姉妹の母親だったことを思い出した。由紀君は同じハウステンボスヒルズに住んでいたもので、ゴルフの賞品として果物を沢山貰って、消化に困った際は、上げることにしていた。幼かった娘さんが一緒に取りに来てくれていた。五・六年前に福岡の方に越して行っただが、十五歳になった娘さんが弔辞奉呈者の席に着いた私の姿を見て、「果物のオジちゃんがいる」と言った由。旧知の前田ご夫妻とも久し振りの再会だった。骨上げ・直会の席に出席するように依頼を受け、少し気が重かったが、前田家の皆さんとの交流のお蔭で気持ちの良い時間をおくることが出来た。

記録の為、弔辞を左記する。

小林 敏教君への弔辞

故小林 敏教君のご靈前に哀悼の言葉を述べさせていただきます。

君とは長崎東高第八回卒業の同期生でしたが、学生時代はあまり付き合いがなく、卒業後の進路も全く異なっていたので、君との付き合いが始まったのは私がハウステンボスの立ち上げを手伝うために、東京での勤めを辞めて長崎に戻って来た頃のことでした。でも、それからでももう二〇年以上のお付き合いになります。

最初一緒したのはハウステンボスでの会食でしたが、君との付き合いの大部分はやはりゴルフを通じてのものでした。同期生で作っている東八会のゴルフ会では、君が中心的存在で、君のコースである長崎国際ゴルフ倶楽部で定例的な会をやっていました。腕前は、私なんかはとて相手にならず、何時もご指導を受けるばかりでした。数年前に大腸ガンの手術を受けられましたが、その後はスツカリ元気になられ、ゴルフも再開

されて、私どもの会でも盛んに賞金を稼いでいましたね。国際の公式競技でも良い成績だったと喜んでいたこともありました。東京地区の同期のゴルフ会も、君の病院の休診日の木曜日に設定して貰って一緒に道場破りに出掛けたものでした。我々のゴルフ会は君の病気が再発して欠場勝ちになったので、自然消滅ということになってしまいました。その頃、抗がん剤の副作用を抑える大変有効なサプリメントを発見された話を聞いて、同じ病気で苦しんでいた私の東京の友人に勧めて上げたことがあります。この時も親切に詳しく情報をくれましたね。東京の友人はお蔭で抗がん剤の治療を全クール終えることが出来、すっかり元気になりましたが、君は努力の甲斐もなく帰らぬ人となられました。

我々の同期生では医者になった人があまり多くなかったこともあって、君は我々のファミリードクターみたいな存在として皆の尊敬を集めていました。専門の皮膚科に止まらず、健康上の悩みがあると何かと話を持ちかけたものですが、何時も親身になって丁寧に応対してくれ、一番頼りになるホームドクターでした。

我々の同期会では二年に一度海外旅行をやっていたので、何度も誘ったのですが、患者さんを大事にする君は、仲々参加してくれませんでした。「年を取った医者でも、遠くから僕を頼って来てくれる患者さんがいるので辞められないんだ」と言うのが君の口癖でした。二〇〇六年に英国に行った時、私が世話役をやったので、「そんなことを言っていたら、一生遊べないぞ」と言って相当強烈にお勧めしたところ、奥さん同伴で参加してくれました。北はエンジンバラから西は湖水地方、ストラットフォード・アポン・エイボンではシェークスピアの劇を楽しみ、最終日はロンドンを地下鉄とバスで歩き回りました。あの時は君も本当に喜んでくれましたね。旅行が終わった時に、「ありがとう」と言ってくれて握手した時の君の嬉しそうな笑顔が忘れられません。

君は飲む方も嫌いではなかった。銅座で飲んだ後は、同期生の溜まり場になっている「スナック弓」に出掛けて、蛮声を張り上げてカラオケに興じるのが常でした。良く一緒にしたのですが、石原裕次郎や堀内孝雄が君の持ち歌でした。

この十月には我々同期生は一年遅れの喜寿の会をやる計画を立てています。全国から

一〇〇人は集まる会にする積りです。その席に君がいないのは本当に淋しい。残念です。君と友人としてお付き合い出来たことを心から誇りに思い、本当に良かったと思っています。どうか安らかにお眠りください。

残された奥様、お嬢様、息子さんには難しいこととは思いますが、一日も早くこのシヨックから立ち直って、お元気に過ごされることを願っています。

小林君、さよつなら。

平成二十六年五月十二日

長島 達明

(平成二十六年六月)

